EXCITE ～ソード・ライダー・オンライン～

春風駘蕩

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類の夢、仮想空間を実現させたＶＲＭＭＯＲＰＧ『ソードアート・オンライン』。

デスゲームへと変貌したその世界で生き残るため、奮闘するプレイヤーたちに突如、謎のウィルス・バグスターが襲いかかる！

プレイヤーの一人、ユウキは不思議なアイテム・ゲーマドライバーとガシャットを使い、未知のパンデミックに立ち向かう！

「ＳＡＯ」と「仮面ライダーエグゼイドのクロスオーバーです。　楽しんでいただけたなら幸いです。

目次

1｜はじまるNew Game｜1
2｜はじまるNew Game②｜5
3｜はじまるNew Game③｜14
4｜Strategyは「いのちだいじに」｜24
5｜Strategyは「いのちだいじに」②｜32
6｜Strategyは「いのちだいじに」③｜40
7｜I⊠ma 仮面ライダー！｜48
8｜I⊠ma 仮面ライダー！②｜55
9｜I⊠ma 仮面ライダー！③｜64
10｜I⊠ma 仮面ライダー！④｜71
11｜BLACK CATと孤独の剣士｜75
12｜BLACK CATと孤独の剣士②｜85
13｜BLACK CATと孤独の剣士③｜96
14｜BLACK CATと孤独の剣士④｜107
15｜New comerは突然に！｜116
16｜New comerは突然に！②｜124
17｜New comerは突然に！③｜132
18｜New comerは突然に！④｜141
19｜New comerは突然に！⑤｜151
20｜頼れるアイツはLonely boy｜162
21｜頼れるアイツはLonely boy②｜171
22｜頼れるアイツはLonely boy③｜181
23｜頼れるアイツはLonely boy④｜190

―1―　はじまるＮｅｗ　Ｇａｍｅ

真っ白なシーツのかけられたベッドの上で、少女が窓の外を眺めている。開かれた窓から吹く風に長い黒髪を揺らし、やがて柔らかな意味を浮かべた。

ベッドの脇の机の上に置かれたデジタル時計が、１２：５９を示しているのに気づくと、少女はその隣に置かれている大きな機械を手に取った。

ヘルメットのような、少女が身に付けるには少々無骨すぎるそれをすっぽりと被り、ごろりとベッドの上で仰向けに寝転がる。ヘルメットとケーブルが繋がっていることを確認すると、ワクワクとした様子のまま目を閉じた。

最後に見た時計の時間から数えて、時刻が１３：００になった瞬間、少女は目を閉じてそのフレーズを呟いた。

「リンク・スタート！」

閉じた瞼の裏に真っ白な光が灯り、いくつものメッセージが表示されながら景色を一変させていく。

しばらくその不思議な光景を眺めていると、一瞬の閃光のうちに、少女の視界は大きく変貌していた。

右を見て、左を見て、上を見て、下を見て。普通の家の部屋の中から、初めて見る景色が広がっていることを確認する。

「……！」

まるでファンタジー小説や歴史の教科書に出てきそうな街並みが見渡す限りに続いている。

しばらく辺りを見渡していた少女は、やがておもむろに空に向かって手を伸ばし、眩しい太陽に重ねるように手のひらを広げる。

有名なあの歌のように、透かして見える自分の血潮がはっきりと流れている光景に、少女はみるみるうちに、興奮で顔を真っ赤に染め上げていった。

「ついに来たんだ…！　この世界に！」

どこまでも広がる空、眩しい太陽の光と熱、吹き抜ける柔らかな風

の感触、その全てがまるで本物のようだと錯覚してしまう。
勿論、視界の端に映るアイコンやＨＰバー、ユーザーネームがこの景色は全て０と１の組み合わせによるバーチャルリアリティなのだと証明している。
だがそれでも、つい現実世界だと勘違いしてしまうほどに、その景色は造り込まれていた。
「ここが……浮遊城アインクラッド、ソードアートオンラインの世界！　ＶＲＭＭＯってこんなにスゴイんだ！」
少女が舞い降りた世界、そこはある天才科学者が作り出したデータで作られた世界。
ナーヴギアというハードを使い、人間の意識を現実の肉体から切り離し、広大な仮想空間でゲームをプレイする、人類が長年夢見てきた世界だった。
少女がダイブしたゲームソフトの名は『ソードアート・オンライン』。
剣を使い、モンスターと戦って、全１００層からなる浮遊城の中の広大な世界を冒険するＲＰＧだ。
「スゴイスゴイ‼？　ほんとに異世界に来ちゃったみたいだ‼？　アハハハッ‼？」
少女は思わず、その場でクルクルと回って周囲の景色を堪能してしまう。
見れば、周りには少女と同じように初心者らしい装備に身を包んだプレイヤーたちがいて、少女のことを微笑ましそうに、あるいは気恥ずかしそうに見つめているのが見える。
少女は気にせず、現実でも見せないぐらいにはしゃぎ続けていた。
しかしふとした瞬間に、少女はハッとした様子で固まった。
「ってこんなことしてる場合じゃなかった。いっけね」
この世界にきただけでここまで大いにはしゃいでしまっていたが、ゲームを始める際に、最初の所持金としてある程度は与えられているが、ちゃんと考えなければすぐになくなってしまう。
前知識もないままにフィールドに挑むのは、即座にゲームオーバー

になってしまう危険性が高かった。
「ん？　あれは…」
そんな中、ユウキは視界の端を過ぎていく人影を目にする。
少女が目を向けるとその先には、精悍な顔立ちの黒髪の青年が、颯爽と街中を走り去って行く姿があった。
「ちょいとそこのあんた！」
全速力で追いかけ続け、ようやく青年の背中が近づいてきた頃に、ユウキが大きく声をかける。
だが、ふとその声が重なって聞こえてきたことに目を丸くした。
「え？」「お？」「ありゃ」
青年が振り向き、ユウキが首を傾げ、同じように声を発したバンダナの青年が固まる。
しばらく見つめ合っていたユウキとバンダナの男性は、やがておずおずと互いに手を差し出し合った。
「お、お先にどうぞ」
「いえいえそちらこそ…」
「え…えっと、俺に何か用かな？」
勢いよく声をかけておいて、互いに前を差し出し合う二人に、青年が戸惑ったように問いかける。
こう着状態に陥った男性に代わってユウキが尋ねた。
「あのさ、お兄さんってもしかしてβテスターじゃない？」
「っ…なんで、そう思ったんだ？」
「みんなどこの店で剣を買おうかって悩んでるのに、お兄さんまっすぐに何処かへ向かおうとしてるんだもん。だから、ああこの人経験者なんだなって」
「おお！　俺もそう思って声をかけたワケよ」
ユウキのおかげでようやく本題に入れると、バンダナの男性は申し訳なさそうに手を合わせた。
「なぁ…悪いんだけど少しだけレクチャーしちゃくんないか？　ＶＲＭＭＯは初めてでよ、ダチと合流する前にちょっとでも慣れておきたいんだわ」

「ごめんね。でも、ちょっとでもアドバイスが欲しいんだ！」
二人の見知らぬプレーヤーに突然頼まれ、青年もやや困ったように頭をかく。
しかしやがて、観念したようにため息をついた。
「……まぁ、いいぜ。一人も二人も同じようなものさ」

―2―　はじまるＮｅｗ　Ｇａｍｅ②

「どわぁ⁉？」
　男の急所にイノシシ型のモンスターが突撃し、バンダナの男性――
―クラインがどどっと倒れ込んだ。
　股間を抑えてバタバタともがき苦しむ彼に、キリトという名の青年は呆れたように目を向けていた。
「仮想空間で痛みなんて感じないだろ？　いまのそれはただの錯覚だ」
「……あ、ほんとだ」
　それまでの醜態が嘘のように、クラインはあっさりと体を起こして首をひねった。
　興奮したようにこちらを向いているイノシシ、フレイジーボアをにらんで眉間にしわを寄せる。
「くっそぉ…なかなか上手くいかねぇな。この…ソードスキル？ってのがどうにも出てくれねぇんだよな」
「なんかコツとかあるの？　教えてキリト先生！」
「んー…なんていうかな…」
　クラインの戦いの様子を見守っていたユウキも、経験者であるキリトに熱い眼差しを送っている。
「こう…いちにのさんで出すよりは、一旦力を溜めてから一気に打ち出すっていうのかな。Ａボタンを長押ししながら、十字キーで打ち出すみたいな」
「グッてやってバーン！　…みたいな？」
「……そう、だな」
　ユウキの擬音語ばかりの返事に、キリトはあまり肯定したくない思いを抱きながらも頷く。
　というか、クラインも今ので何となくわかったような顔をしていた。
「スキルが立ち上がるのを感じたら、あとはシステムが勝手に技を打ち出してくれる。それだけだよ」

「ふむふむ…」
説明を聞いたクラインが、何度も反芻しながらフレイジーボアに向かって構える。
フレイジーボアは何度も地面を蹴り上げると、一気にクラインに向かって突進を開始した。
「グッてやって…！」
剣を腰だめに構えたクラインが、接近してくるフレイジーボアに向けて刃を横薙ぎに振るう。
体の側面に大きな裂傷を刻まれたフレイジーボアは、空中にしばらくの間留まったかと思うと、次の瞬間青い結晶の破片のように砕け散った。
クラインの目前に通知が現れ、経験値とコル――この世界における通貨が手に入ったことを示した。
「おっしゃあああああ‼？　ついに初勝利だこんにゃろーめ‼？」
「おおー！　凄いじゃんクラインさん！　いーじゃんいーじゃんスゲーじゃん！」
「おめでとう。…といってもいまのやつ、レベルでいったらスライムレベルだけどな」
「えっ…⁉？　俺はてっきり中ボスくらいかと…」
「それはない」
呆れた表情のユウキが横目を向ければ、先ほどと同じフレイジーボアが何匹か新たに現れているのが見える。
こんなにもポンポン現れる中ボスがいてたまるか、という話だ。
「まぁいいや！　まずはあいつら狩りまくってレベル爆上げしちゃおうよ！」
「あ！　おいお前ら！」
モンスターと戦うひとしきりの流れを覚えたユウキが、新たにポップしたフレイジーボアに向けて突撃を始めた。
向かってくる敵を迎撃しようと、フレイジーボアたちも勢いよく突っ込んでいく。
「さっきのクラインさんみたいに…ほっ！」

しかし、フレイジーボアの突進が直撃する寸前、ユウキは真上に向かって高く跳躍していた。
標的を見失い、すぐさまその場で停止するフレイジーボア。その背中に、ユウキの両足が勢いよく叩き込まれた。
「よっ！　とっ！」
数匹のフレイジーボアを踏み台にしながら、ユウキは縦横無尽に跳ね回る。
ワイヤーアクションでも見せられているかのような光景に、キリトもクラインも空いた口が塞がらなかった。
「イヤァァァ‼？」
ひときわ高く跳躍したユウキが、真下の二匹のフレイジーボアに向かって剣を一閃する。
認識の範囲外から繰り出された剣撃に、フレイジーボアはなすすべなく両断され、青いポリゴンの破片となって消滅した。
「おお～！　なんかスゴイの出た！」
初めてのモンスターハントに、キラキラと目を輝かせるユウキ。
一方で、ユウキのファーストチャレンジを目撃していたキリトとクラインは、驚愕のあまりなんのリアクションも取れずにいた。
「おいおいおいおい……なんだユウキちゃんのあの動き。別のゲームのキャラみたいだったぜ」
「…マイティみたいだな」
あんぐりと口を開けて固まっていたクラインは、キリトのつぶやきに目を見張る。
「マイティって…マイティアクションか？　俺アレ結構やってたんだよな」
「きっとアイツも、相当マイティシリーズをやりこんでたんだ。そのイメージが、あの動きを可能にしたのかもしれない」
「スッゲェな…ってか」
感心したまま放心していたクラインだったが、ユウキが新たにポップしたモンスターの方へ突撃して行く姿に我に返った。
このままでは自分の分の獲物まで狩り尽くしそうな勢いだ。

「お前、俺の獲物も獲ってんじゃねぇよ!!?」
「イヤッホーウ!」
慌てて走り出すクラインの気も知らず、ユウキは剣を振り回しながら意気揚々とフレイジーボアに挑んでいく。
その後を追うクラインの後ろ姿に、休日に遊んでもらっている子供と親戚の叔父のような構図に見えて、キリトは思わず苦笑をこぼしてしまっていた。
「やれやれ…」
それがとても眩しいものに見えて、キリトは困ったように肩をすくめるのであった。
☒
「あー、楽しかった!」
空が赤く色づき始め、肌寒さのようなものを感じてきた頃合い。
散々駆け回って、モンスター相手に暴れまわったユウキは満足げな笑顔を浮かべて、仰向けに倒れこんだ。
「俺ぁ、まだここが仮想空間だなんて信じられないぜ。作ったやつは天才だよな!」
「本当にな」
「俺、この時代に生まれてよかったよ、マジで!」
「大げさな」
興奮気味に剣を掲げるクラインに、キリトもやや呆れたように肩をすくめる。
とはいえ、全員が彼と同じような感想を持っていたことは確かだ。
「ハードが凄すぎて、後から出てくるソフトはどれもみんな物足りない感じがしたもんな」
「技術が追いついてなかったんだろうねー」
まだまだ語り足りないという様子のクライン。そんな彼に生暖かい視線が向けられるのも、仕方がなかった。
二人の視線に気づき、クラインは照れ臭そうに頭をかいた。
「初のフルダイブ体験なもんでよ」
「じゃあ、ナーヴギア用のゲームをやるのはこれが初めてなのか?」

「っつーか、ＳＡＯが手に入ったから慌ててハードを揃えたって感じだな。初回ロット一万本のうちの一つを買えるなんて我ながらラッキーだぜ」
「うちも似たような感じだなー」
たははー、と呑気に笑うユウキに苦笑し、クラインはキリトに視線を向けた。
「βテストの時はどこまでいけたんだ？」
「二ヶ月で第八層までだ。でも今回は一ヶ月もあれば十分だろう」
その自身もやる気も満々のキリトの言葉に、ユウキはしばらく彼を凝視し、やがてニヤッとからかいの笑みを浮かべた。
「キリト、慣れてるみたいに見えて実はめちゃくちゃハマってるでしょ」
「…正直、βの時は寝ても覚めても、ＳＡＯの事しか考えてなかったな。この世界はこの剣一本あればどこまでもいける、現実よりも生きてるって感じがするんだ」
「あははは…それも仕方がないよねー」
ユウキも自分の手を夕日にかざしながら、その精巧さを改めて実感する。
透けて見える自分の血管、大気に映る光の加減、その全てがただのデータとは思えず、まさにこの世界で生きているという気がしていた。
「結構、時間経っちゃったね」
「今日はもう上がりかね。あんまり長くするとあの人に怒られちまう」
仮想世界は現実世界と時間が連動しているため、外の景色もここと同じぐらいの時間帯であろう。
一般的なプレーヤーなら、すぐさま現実の問題を片付けることを考えるはず。
しかしそれでも、この世界を離れることは気がひけるのは確かだった。
「クラインはどうすんだ？」

「もっちろんまだまだ続けるぜ！　…って言いたいところだがよ、ちと腹が減っちまってな」
ひもじそうな表情で、クラインが自分の腹を抑えるのを見て、思わず笑いが溢れる。
体はベッドの上で微塵も動いていないとはいえ、脳が活動している限りエネルギーは消費され続けているのだから、当たり前の話だった。
「あーそういえばそんな時間かー」
名残惜しそうに、美しい景色に目を向けるユウキも、空腹を感じて切なそうな顔をする。
どんなにゲーム好きでも、こればっかりは仕方のない話であった。
「ちなみに俺はこんなこともあろうかと！　午後６時ぴったしに熱々のピザが届くように注文をしていたのだ！」
「用意周到なやつだな…」
「あーボクもそうすればよかったー」
和気藹々とした雰囲気のまま、各々が現実世界に帰るために気分を切り替えていく。
腹が減ってはなんとやら、ゲームよりも自分の体が大事なのは当然だった。
「つーわけで、俺は一旦ログアウトしてから戻ってくるぜ。また時間があったら会おうや」
「ああ…俺も楽しかったよ」
「あ！　だったらさ、フレンド登録？とかいうのやっておこうよ！　またみんなで遊ぼうよ！」
「お、いいねぇ！　次は俺のダチも一緒に連れてくるぜ！」
この数時間でかなり親交を深めたプレイヤーたちが、また会う時を願って語り合う。
しかしただ一人、キリトだけがどこか気まずげに目をそらしていた。
「？　どうかしたのか、キリト？」
「あ、いや…なんでもないさ。……そうだな楽しみにしてるよ」

訝しげなクラインの問いに、キリトは無理やり作ったような笑みを向ける。
どうにも気になったクラインだったが、深入りしてもいいことはないだろうと判断し、曖昧に会話を途切らせた。
「じゃ、また会おうぜ！」
「俺たちも一旦戻るか」
「はーい」
またログインする瞬間を今から待ち望みながら、ユウキたちは空中にシステムメニューを展開させてスクロールする。
注意が外れている間に立ち去ろうと、キリトが無言で背を向けた時だった。
「……あり？　ログアウトボタンがねぇ」
クラインがこぼしたそんなセリフに、全員が訝しげな表情で振り向いた。
「なんだと？」
立ち去ろうとしていたキリトも、クラインの言葉の意味がわからず、すぐさま彼の元へ駆け寄っていく。
ユウキも一旦システムメニューを閉じ、クラインの元へと駆け寄っていった。
「何を言ってるんだ…そんなわけがないだろ」
「い、いやでもよ」
「どっか違うとこ見てるんじゃない？　ボクちゃんと説明書見たから知ってるよ？　メニュー画面の一番下の…」
初めてでうまくいかないのだろうと決めつけ、ユウキが手本となるようにシステムメニューを展開する。
しかし、画面をスクロールしていくうちに、その表情がみるみるうちにこわばり始めた。
「下の……どこ？」
ユウキのメニューに触れる手が、ブルブルと小刻みに震え始める。
顔を真っ青にしたユウキは、隣に立つキリトにすがりつくように振り向いた。

「キ、キリト！」
「……ああ、俺も見た。無いな、ログアウトボタン」
キリトの表情も、あり得ないとばかりに引きつって冷や汗のエフェクトが流れている。
全員の表情が凍りつき、急激に空気が冷え込み始めた気がした。
「おいおいマジかよ。正式サービス初日からこんなんでどうすんだよSAO！　GMコールしたか？」
「さっきからやってるけど…一向に繋がらないんだ」
「ほかでもおんなじようなことが起きてるのかな…？」
重くなり始めた空気をわずらわしく思ってか、クラインがわざとらしく大声で喚く。
その声で少し我に返り、少し落ち着いた様子のユウキが空を――運営が見下ろしていそうな場所を見上げた。
「他にログアウトする方法ってあったっけ？」
「なきゃ困るだろ。構造上欠陥だらけになっちまうぜ」
「だよねー」
変な空気を払拭しようと、冗談じみた口調でクラインが言うと、同乗したユウキが陽気な笑い声をあげる。
だがキリトは、その若干痛々しい努力に混ざることはできなかった。
「……ないよ」
「へ？」
「現実世界に戻るためには、ログアウトボタンを押す以外にゲームを終わらせる方法はないんだ」
キリトが告げた残酷な事実に、再びユウキたちの表情が青く染まっていく。
そこに漂っていたのは、まるで病院で余命宣告を受けたかのような絶望感だった。
「…うそ、でしょ」
「やばいぞクライン！」
「ああ、わかってるよ！　どうすりゃいいんだよこっから⁉？」

「いや、それもだけど…お前のピザが」
「あああそうだ!!?　俺のピリマヨピザが!??」
「いやそこはどうでもいいでしょ」
しょうもないことで嘆きの声をあげているクラインに、ユウキがジト目でツッコミを入れる。
しかしすぐに、こんなことをやっている場合ではないとキリトに向き直った。
「けど…こんなことあっていいの？　ボクら、ゲームに閉じ込められちゃったってことだよね？」
不安げなユウキの問いかけに、キリトもまた眉間にしわを寄せて考え込んでしまう。
それも当然、彼は単なる1プレイヤーでしかなく、設計にも運営にも関わっているわけではないからだ。
「普通はありえない…ログアウトできないなんて欠陥、あっていいはずがない。今後の運営にだって関わる重大な問題だ」
「だったらなんで、GMからも運営からも通知がこないのさ？」
「普通ならこんな事態、一旦サーバーを停止させてプレイヤーを全員強制ログアウトさせればいいのに…アナウンスもないなんて…」
MMORPGにあるまじき事態に、プレイヤーたちはその場から動くこともできず立ち尽くすばかりだった。
その時だった。彼らの周囲を突如、青白く強い光が照らし出したのは。
「!?　何だ!?」
「これは……転移!?」
本来は結晶型のアイテムを使うことで発動する、任意の場所に移動するシステムのエフェクトが発動したことに、ユウキたちは驚愕で大きく目を見開く。
そしてその姿は、あっといまにまばゆい光の中に飲み込まれていった。

―3―　はじまるＮｅｗ　Ｇａｍｅ③

あまりの眩しさに目を閉じていたユウキたちは、やがて周囲の光が収まっていくのを感じた。
恐る恐る目を開けると、辺りの景色が見覚えのあるものだと気付いた。
「…ここって」
「始まりの街…だよな」
何の前触れもなく、ゲームの始まりの場所へと連れ戻されてしまったことに戸惑いの声を上げるユウキ達。
あたりに視線を巡らせれば、周囲のあちこちで同じような青白い光が灯り、プレイヤーたちが続々と姿を現すのが見える。
次第にその光の出現のペースが衰えていき、おそらくはＳＡＯにログインしていたすべてのプレイヤーが呼び出された時だった。
「おい、上見ろ！」
一人のプレイヤーが、頭上を指さして緊迫した声を上げる。
つられて他のプレイヤーたちも顔を上げ、精密に作られた空に無数のアナウンスが表示されてく光景を目撃した。
『Ｗａｒｎｉｎｇ』『Ｓｙｓｔｅｍ　Ａｎｎｏｕｎｃｅｍｅｎｔ』
横長の六角形の表示が連なり、空が真っ赤に染まっていく。
夕陽の赤勝ちのような紅色に染まりきった時、表示と表示の間から鮮血のような何かがしたたり落ちてくる。
それは意思を持つかのように蠢き、プレイヤーたちの目前に垂れ落ちてくると、徐々に人の形を作り出していく。
赤いローブを纏った、顔の見えない魔導師のような巨大なアバターが姿を現した時、それを見上げていたプレイヤーの一人が困惑気味の声を発した。
「ＧＭ…⁉？」
その声が響くと、無貌のアバターはそれを肯定するかのように、妙に反響する声を返した。
『プレイヤー諸君、私の世界へようこそ』

「私の……世界？」
開口一番に放たれた意味の分からない言葉に、キリトは思わずオウム返しでつぶやく。
誰一人として現在の状況を把握できていない中、無貌のアバターはローブを揺らしながら静かにその場に佇んでいた。
『私の名は茅場晶彦、この世界を唯一コントロールできる人間だ』
名乗られた名に、キリトは思わず息をのむ。
ＳＡＯの世界を生み出した天才、今やプレイヤーの中で知らないもののいない有名人にして、ＳＡＯに最も詳しい存在。
そんな人物がこの異常事態に対して、全く悪びれる様子も狼狽した様子を見せていないことが、キリトの中のいやな予感を加速させていた。
『プレイヤー諸君はメインメニューからログアウトボタンが消滅している事に気付いているだろう。しかし、これはバグではなくソードアート・オンライン本来の仕様である』
「仕様……だって？」
どよめきが上がる。隣に立つ誰かと視線を躱し、戸惑いの声を上げる。
茅場晶彦を名乗るアバターの告げた言葉の意味を測りかね、他の誰かにも止めようと必死になっていた。
『諸君は今後、自発的にログアウトする事は出来ない。また、外部の人間によるナーヴギアの停止もあり得ない。それを試みた場合――ナーヴギアが発する高出力マイクロウェーブが、諸君らの脳を破壊し、生命活動を停止させる』
ドクン、とキリトやユウキの胸の中で、心臓が激しく脈動する。
ありえないという思いが、目の前の光景の異様さやアバターの放つ威圧感によって尽く塗りつぶされていく。
クラインは乾いた笑いをこぼしながら、縋るようにキリトの方を向いた。
「何言ってんだあいつ？　んな事が出来る訳……」
「出来るんだ……ナーヴギアの原理は電子レンジと同じなんだよ。リ

ミッターを外せば、脳の限界温度４２度を超えるんだ」
キリトの告げた残酷な真実に、クラインの顔色が青く染まる。
それでも信じられない、いや信じたくないのか、首を振ってなおもキリトに詰め寄った。
「けどよ、電源を切れば……」
「ナーヴギアには内蔵バッテリーがある……」
「な……けど、無茶苦茶だろ！　なんなんだよ！」
現実を受け止めきれず、クラインはバリバリと頭をかきむしる。
茅場晶彦は、なおも信じられずにいる様子の彼らに最後の通告をして見せた。
『残念ながら、警告を無視したプレイヤーの家族、あるいは友人らがナーヴギアを強制解除しようとしたその結果、すでに２１３名のプレイヤーが、このアインクラッド及び現実世界から永久退場している』
動揺はざわりと声の津波となり、プレイヤーたち全員の心に突き刺さる。
かすかな希望、全てが嘘や出鱈目であることを願っていた者たちは、その事実にがくりと膝をついた。
『この事はすでにあらゆる報道メディアが繰返し報道している。よって、ナーヴギアの強制解除の可能性は十分に低くなっているだろう。諸君らは安心してゲーム攻略に励んでほしい』
「ふざけるな‼？　今の状況で呑気に遊んでろって言うつもりか‼？」
『しかし十分に留意してほしい。今後このゲームに於いて、あらゆる蘇生手段は機能しない。諸君らのＨＰがゼロになった瞬間に、アバターは永久消滅し同時に――――諸君らの脳はナーヴギアによって破壊される』
声なき悲鳴があちこちから上がる。
未だに聞き間違いだ、嘘だと信じたくて、それでも状況の異常さがそれが事実だと物語っていて、誰もが顔色を真っ青に染めていく。
『諸君らが解放される手段はたった一つ、このゲームをクリアする事だ。アインクラッド一層から最上層の１００層までを完全クリアす

る事でのみ、生き残ったプレイヤーはこの世界からログアウトする事が出来るのだ』
「クリア……100層だと！　出来る訳ねぇだろ！　βじゃロクに上がれなかったんだろうが!!?」
クラインが怒りを混ぜて叫ぶが、虚像である赤いローブの巨人が答えることはない。
彼はただ真実を語るだけ、電子の世界の牢獄に閉じ込められた者たちに、絶望を与えるだけだった。
『では最後に、諸君らに私からのプレゼントがある。アイテムストレージを確認してくれたまえ』
茅場晶彦がそう言うと、プレイヤー全員の目の前にメッセージウィンドウが現れる。
プレゼントを受け取ったと言う内容で、それを開くと手元に手持ちサイズの鏡が出現した。
「手鏡…？」
一体なんだと覗き込めば、当然映るのはアバターとしての自分の顔。
しかし次の瞬間、手鏡を覗いていたプレイヤーたちは青い光に包まれ、一瞬その姿が見えなくなった。
「うわっ!!?」「うぁっ!!?」
思わず声を上げるキリトたちが、あまりの眩しさに目を瞑る。
あちこちで同じような光が発生し、広場が一瞬光で埋め尽くされていく。
しかし何かが起こったと言う感覚はなく、すぐにその光は何事もなかったかのように収まっていた。
「な、なんだったんだ今のは…」
「おい、大丈夫かお前ら」
「あ、ああ…」
「大丈夫だよクライ、ン……」
閉ざしていた瞼を開け、キリトは顔を上げてクラインを見る。
が、その表情が固まり、二人はしばらくの間見つめ合ったまま立ち

尽くしてしまった。
「……どちら様ですか？」
「いやおめぇこそ誰だよ」
交わされる声は、先ほど聞いていたものと同じ。しかし目の前にいるプレイヤーは、全くと言っていいほど面影のない顔だった。
凛々しい顔立ちだったキリトがいた場所には、中性的で小柄な少年の姿が。そしてクラインがいた場所には、無精髭が目立つ逆立った赤髪の男の姿があった。
「てかその声…装備！」
「おいおいおいおい…嘘だろオイ⁉？」
声や身にまとう装備の種類から、相手の正体に気づき、まさかと頬を引きつらせる二人は、互いを指差しあって目を見開いた。
「お前クラインか⁉？」「お前がキリトか⁉？」
ほぼ同時に叫び、嫌な予感が立ったことでより複雑そうに顔を歪めてしまう二人。
キリトはクラインをしげしげと見つめ、呆れたように眉を寄せた。
「おまっ…意外と年齢鯖読んでたのな」
「うるせぇ‼？」
思わず呟いたキリトにクラインは噛み付くが、二人ともそれどころじゃないと自分を落ち着かせる。
鏡に映った自分のアバターを見てみれば、ナーヴギアをつける前と変わらない見慣れた顔がそこにはあった。
「まさか…アバターの姿じゃなくて、現実の姿になってるって言うのか」
「ってことは……」
ふと、クラインが恐る恐るといった感じで横目を向ける。
そこでわなわなと震えているのは、この世界で出会ったもう一人のプレイヤーの少女。
その身長は幾分か縮み、なかなかメリハリがきいていた体はかなり肉が削ぎ落とされてしまっていた。
「…ユウキ、ちゃん。なんかどうも幼いなと思ったらそんなちっちゃ

かったのか」
「あ…あああああ…！」
ユウキは目を剥き、自身の胸に手を当て言葉にならない声をこぼす。
実際よりも大きく設定していた、悪く言えば盛っていた少女の胸は、いっそ哀れなほどに綺麗さっぱりなくなってしまっていた。
「う…嘘だ……‼？　ウゾダドンドコド――――――ン‼？」
「ボケてる場合かアホユウキ‼？」
ガクーッと膝をついてうなだれるユウキにキリトがツッコミを入れる。
しばらく何も聞こえない様子のユウキだったが、やがて観念したように切なげな表情で立ち上がった。
「マジかよ……どうなってんだこれ？」
他のプレイヤー達の反応を見る限り、全てのアバターが変更され現実の姿に戻されていることがわかる。
どういう理屈か理解していないクラインに、キリトは確信をもって答えた。
「スキャンだ、ナーヴギアは、高密度の信号素子で顔を覆っている。だから正確に顔の形を把握できてるんだ」
「でも、身体はどうやって……」
「アレじゃねぇか？　初めてセットアップした時キャリブレーション？　だっけか、あちこち身体触っただろ？」
「あぁ……そういう事か」
なるほど、といった様子で頷くユウキ。
あの妙な指示のせいで、夢のグラマラスボディが水泡に帰したのかと、ユウキの中ではかなり身勝手な怒りがこみ上げていた。
「でもよォ……なんだってこんな事！」
「……それもすぐに答えてくれるさ」
キリトは焦りと怒りをないまぜにした表情で、天空に浮かぶ巨人のアバターを睨みつける。
それに気づいたように、茅場晶彦は説明を再開した。

『諸君は今、「何故？」と思っているだろう。ＳＡＯ及びナーヴギア開発者の茅場晶彦は何故こんな事をしたのかと。私の目的は既に達成せしめられた。私はこの世界を鑑賞する為に、その為だけにこのナーヴギアを、ＳＡＯを創造したのだ』

――――これはゲームであっても、遊びではない。

ユウキの脳裏に、茅場明彦が雑誌の取材に対して答えたセリフが蘇る。

あれは、ＳＡＯの技術の高さを知らしめるための比喩表現かと思っていたが、そういうことだったのかと妙に納得してしまっていた。

『以上で「ソードアート・オンライン」正式サービスのチュートリアルを終了する。諸君らの健闘を祈る』

言うだけ言って、赤いローブの巨人のアバターはその形を崩れさせ、あっという間に姿を消していく。

巨人の姿が消え、始まりの街が最初の雰囲気を取り戻しても、誰もその場から動くことができずにいた。

目には見えなくても変わってしまった。

人類最高の発明によるゲーム空間は、プレイヤーたちを死に誘うデスゲームへと豹変したのだ。

「いや……いやァァァァ‼？」

誰かの悲鳴が聞こえてくる。

それを皮切りに、悲鳴と絶叫があちこちから上がり始めた。

「ふざけんな！　出せ！　ここから出せよ‼？」「そんなの困る！　この後約束があるんだ‼？」「誰か！　誰か助けてぇ‼？」「嫌ぁ‼？　お父さん‼？　お母さん‼？」

もはや誰一人として、平静を保っている者はいない。目の前に迫って見える〝死〟の恐怖から逃れたくて、誰にともなくあたり辛すことしかできなくなっていた。

飛び交う怒号、轟く絶叫、響き渡る悲鳴、そこにあるのは全て、窮地を前にした人間の本性ばかりであった。

「ヒドイ…」

「まるで地獄だぜこりゃあ…」

ユウキもクラインも、その光景に絶句し目を見張る。
正直言えば自分たちも泣き叫びたい気持ちではあったが、先に見せられた地獄絵図によって逆に冷静になってしまっていた。
その時不意に、キリトがクラインとユウキの手をつかんで走り出した。
「クライン、ユウキ、こっちだ」
「お？　おおおおお⁉？」
「キリト⁉？」
いきなり手を引かれ、建物の陰に連れ込まれる二人。
困惑気味に見つめるユウキとクラインに、キリトは真剣な眼差しで告げた。
「よく聞いてくれ。俺は今からこの街を出る、お前らも一緒に来い」
「！　…オイ、キリト。まさかお前…」
クラインはキリトの言葉から何かを察したのか、ゴクリと息を飲んで言葉を失う。
キリトは険しい表情で、小さく頷いた。
「奴の言ったことが本当なら、これからひたすら自分を強化しなきゃならない。知ってるだろうけど、ＭＭＯＲＰＧのリソースは基本奪い合いだ。同じことを考えてるプレイヤーによって、はじまりの街周辺はすぐに狩り尽くされるだろう。今のうちに次の村を拠点にした方がいい」
ようやくユウキも、キリトがなぜ自分たちを連れてきたのか理解し目を見張る。
キリトは選んだのだ。ユウキとクラインのみを助け、他のプレイヤーたちを置いていくことを。
自分たちが確実に生き残るために、他を見捨てることを決めたのだ。
「俺は危険なポイントも、安全な道も把握してる。低いＬＶでも安全にたどり着けるはずだ」
非常に酷ながら魅力的なキリトの提案に、クラインはわずかながら希望を見出したように目を見開く。

しかし何か思うことがあったのか、すぐにその表情は迷いを孕んだものに変わっていった。
「けど……けどよ、俺は他のゲームで知り合った奴等と、徹夜でこのソフトを買ったんだ……あいつらはまだ広場にいる筈なんだ！　あいつらを置いてはいけねぇ……」
「キリト、正直に言いなよ。一人でも足手まといを連れていったら、それだけ生き残れる確率は下がるんでしょ？」
緊張の混じったキリトの表情から、少年の内心の焦燥を悟り、ユウキが苦笑しながら告げる。
本当に自分の身が可愛いなら、ユウキたちを連れていくことなく一人で向かっていてもおかしくなかったのだ。
その選択を取らず、二人だけでも連れ出そうとしたキリトの優しさを、ユウキは頼もしく感じていた。
「まぁ…そういうこった！　これ以上お前の世話になる訳にゃいかねぇ。気にすんな。お前に教わったテクで何とかしてみせるさ！　前にやってたゲームじゃギルドの頭張ってたからよ‼？」
クラインもキリトの葛藤を感じ取ってか、不安を吹き飛ばそうとするように笑みを浮かべて言い切る。
どう見ても虚勢であることはわかっていたが、キリトはそれを見て見ぬ振りをし、苦しげに無理やり笑みを見せた。
「そっか……ならここで別れよう。何かあったらメッセージ飛ばしてくれ……」
「おう」
ユウキとクラインに、意志を曲げる気も頼り切る気もないことを悟り、キリトは後ろ髪を引かれる気持ちのまま背を向ける。
このまま別れたら、もしかしたら二度と会えないかもしれない。それを理解しながら、キリトは自分一人が生き延びるためにフィールドへと足を向けた。
「キリト！」
すると、キリトが街の外へ出る寸前に、二人の声が呼び止めた。
キリトが振り向くと、クラインはどこか照れ臭そうに頬をかき、不

器用に笑いながらキリトを見やった。
「おめぇ、本当は可愛い顔してんだな！　結構好みだぜ‼？」
統治綱セリフに目を丸くするキリトだったが、すぐにふっと微笑みを浮かべて、不敵な笑みを返した。
「お前こそ、その野武士面の方が十倍似合ってるよ‼？」
胸のつっかえがわずかに晴れたように、キリトの表情は明るくなる。
今度はじっと自分を見つめてくるユウキに目を向けて、ためらいがちに口を開いた。
「……またいつか会えたら、その時は」
「うん……！　またいつか、今度はちゃんと冒険しよう！」
間髪入れず、嫌そうな様子も見せずに答えるユウキに背を向け、今度こそキリトは始まりの街を後にする。
クラインも惜しみながらユウキに別れを告げ、広場にいるであろう仲間たちの元に駆けてゆく。
「……ノーコンティニューで、クリアしろってんだね。天才ゲームクリエイターさん」
一人残されたユウキは、二人には見せなかった鋭い視線を虚空に向け、明らかな怒りをあらわにする。
この世界を、現実世界の何処かから見ているはずのあの男の顔を思い浮かべ、決して逃しはしないと決意を新たにする。
「待ってろよ。そのツラ絶対ぶん殴ってやるからな！」
勢いよく拳を突き出し、ユウキは姿の見えないラスボスに挑戦する。
その声は、データで構成された風にかき消されながらも残る、確かな響きを持っていた。

―４―　Ｓｔｒａｔｅｇｙは「いのちだいじに」

ボスが待ち構え、次なる階層へと進めるステージのある迷宮区にほど近い都市『トールバーナ』。
ソードアート・オンラインを攻略し、事件の首謀者である茅場晶彦に制裁を加えると言う目的のため、初心者プレイヤー・ユウキも広場を訪れていた。
「おーおー…思ったよりたくさん来てるじゃん！　よかったよかった！」
扇状に設立された広場に集まっているプレイヤーたちに、ユウキは思わず感心したような声を上げてしまう。
さっそく自分も参加しようと駆け寄ったユウキは、階段を下りる途中で見覚えのある横顔を目にし、思わず足を止めていた。
「…ん？」
「お？」
パチパチと目をしばたかせてユウキが声を上げると、それに気づいたプレイヤーの青年も訝し気に振り向く。
そして彼、キリトもまた、一度見た顔であるユウキがいることにに驚きの眼差しを返した。
「あれー？　キリトじゃん！　思ってたよりも早く再会できたねー」
「あ、ああ……ユウキも相変わらず元気そうで安心したよ」
少し険しい表情でほかのプレイヤーたちの方を見ていたキリトは、前に会った時と変わらないハイテンションで隣に腰かけるユウキに微妙に頬を引きつらせる。
周りの緊張感を丸々無視したようなユウキに向く苛立ちが、隣に座るキリトには居心地悪いようで、気まずそうに視線をそらした。
「やっと始まるんだねー。…第一階層ボス攻略会議」
「…ここまで来るのに、出さなくてもいい犠牲があまりに出過ぎた。これがせめて希望になればいいが……」
しみじみといった様子でユウキが呟くと、キリトも神妙な表情で同意する。

二人はただ、会議が始まることを待ちわびているのではない。ようやく事態の好転につながる一歩目が踏み出されることに、首を長くしていた。
デスゲームと化したソードアート・オンラインでの時間が始まってから、早一ヶ月。
その間において、およそ２０００人ものプレイヤーが命を落とした。多くは自らフィールドに赴き、モンスターと戦い敗北した者達だったが、一部は戦ってすらいない。
死ねばゲームから解放されるという絵空事を信じ、自ら命を絶ってしまった者たちがいたのだ。
ほとんどのプレイヤーたちは、そういった事実から極端に活力を失い、はじまりの町から閉じこもってしまったと聞く。この攻略が進めば、この状況が変化するかもしれないのだ。
「そんなくらい顔じゃ勝てる戦いも勝てないよ！　ほら笑って笑って！」
やや厳しい表情でうつむいていたキリトの肩を叩き、ユウキはからからと笑う。
空気の読めない、能天気な発言に周囲のプレイヤーたちは眉を顰めるが、隣のキリトにはそれがユウキなりの発破のかけ方のように思える。
「はーい！　それじゃ、そろそろ始めさせてもらいます！　みんな、もうちょっと前に！　そこ……あと、三歩ほどこっち来ようか！」
しばらくすると、広場の中心に青色の髪の青年が立ち、集まったプレイヤーたちに声をかけている。
どうやら彼が、今回の事件が起きて初めてアインクラッド攻略のための会議を提案したプレイヤーのようだ。
（やはり、少ないな……）
広場の中心に集まると、余計に自分の周りのプレイヤーたちの数の物足りなさが目立ってしまう。
本来の「ゲーム」であれば、もっと多くのプレイヤーが前線で攻略のために集まっていたはず。しかし現在周囲に見えるのは、その半分

もいない人数であった。
「今日は俺の呼びかけに応じてくれてありがとう！　知っている人もいると思うけれど、自己紹介しとくな！　俺の名前は〝ディアベル〟。職業は気持ち的にナイトやっています！」
ディアベルと名乗ったプレイヤーが爽やかに話すと、集まった志願者たちからからかうような声が上がる。
ディアベルの気取った感じのないまっすぐな雰囲気が、プレイヤーたちの緊張をほぐすことに成功したようだ。
「こうして最前線で活動しているトッププレイヤーのみんなに集まってもらった理由はもう言わなくてもわかると思うけれど、今日、俺達のパーティーが第一層のボス部屋を発見した！」
しかし、ディアベルが語った内容に、今度は打って変わって動揺と緊張が走る。
キリトもユウキも、思わず息を飲んでディアベルの話に集中した。
「そこのボスを倒して俺達はみんなに伝えなきゃいけない。このゲームは必ず攻略できるって！　それがここにいるトッププレイヤーの義務だ。そうだろう？　みんな！」
「そうだ！　やってやろうぜ！」
「俺達ならやれる！」
ディアベルの発破に呼応し、数人のプレイヤーたちも勇ましく拳を突き上げて同意する。
まだその表情には緊張と恐怖が残っているものの、ディアベルを見る目には期待と希望が宿り、自身を必死に鼓舞していることがうかがえた。
ディアベルも満足げに頷き、プレイヤーたちを見渡して次なる指示を与えた。
「よし、それじゃぁ、六人一組でパーティーを組んでくれ！　ボスは一つのパーティーじゃ戦えない、パーティーを束ねたレイドを造るんだ！」
いよいよ本格的な攻略が始まると、ワクワクした様子を見せるユウキとは真逆に、キリトはディアベルの指示に顔を青くした。

無理もない。彼はユウキやクラインに声をかけられるまで、ずっと一人でプレイし続けてきたぼっちだったのだから。
（い、いかん。急いで誰か……あ、ユウキは⁉？）
もしやユウキも別の班に入ってしまうのではないかと振り向いたキリトは、自分の隣に座ったままのユウキの姿にホッと胸をなでおろす。
落ち着いたキリトは周囲を見渡し、他にプレイヤーはいないかと探し始める。
そして、どこの班にも混じらずにうつむいているフード姿のプレイヤーを見つけた。
「アンタ、あぶれたのか？」
「違うわ。周りが親しい人ばかりなだけよ」
「……それ、あぶれたっていうんじゃ」
ユウキとキリト一緒に近づいてみれば、生真面目そうな固い返事が帰ってくる。声からして女性らしく、人を寄せ付けない冷たさがあった。
なんとなく相手が一人でいた理由に思い至ったユウキは、システムメニューを操作してパーティ編成のメッセージを飛ばした。
「まぁ、いいや！　他に組む人がいないんならボクらと組もうよ」
「……別に構わないけど」
「やったね、それじゃ決まりだ！」
わずかに逡巡した様子の女性プレイヤーだったが、すぐに表示されたメッセージに同意しパーティが編成される。
無論キリトもすぐさま参加し、たった一人あぶれる心配がなくなったことに安堵のため息をつく。
「皆、組み終わったかな？　それじゃ――」
「ちょおまってんか‼？」
だいたいの準備が終わったと判断したディアベルが会議を再開しようとした時、場の空気を変える野太い怒号が響き渡った。
プレイヤーたちが振り向く中、声をあげたトゲトゲの髪の男が荒い歩調で広場の方に進み出た。

「ワイはキバオウってもんや。ボス攻略ん前に、言わせてもらいたい事がある！　こん中に、今まで死んでいった２０００人に、詫びいれなアカン奴がおる筈や‼？」
　キバオウの怒号に、キリトは一瞬ビクッと両肩を震わせた。
　キバオウの声の大きさに驚き怯んだわけではない、彼の告げた言葉に胸を突かれたような反応だった。
「キバオウさん。貴方の言う奴とは元βテスターの事かな？」
「決まっとるやないか！　β上がり共はこん糞ゲームがはじまったその日に、ビギナーを見捨てて消えよった！　奴等はボロいクエストやウマイ狩り場を独占して、自分らだけポンポン強なってその後もずーっと知らんぷりや‼？」
　ディアベルが真剣な表情で尋ね、キバオウが厳しい剣幕で怒鳴る間も、キリトは怯えたように唇を噛みしめる。キリトの顔色の悪さに、ユウキが思わず心配そうな目を向けるほどだった。
　キバオウはそれに気づかず、集まったプレイヤーたちに振り向いて鋭く睨みつけた。
「こん中にもおる筈やで、β上がりの卑怯者が‼？　そいつらに土下座させて、溜めこんだ金やアイテムを全部吐き出してもらわんと、パーティーメンバーとして命は預けれんし、預かれん‼？」
　キバオウの言うことは、はっきり言えば八つ当たりにも等しい言いがかりである。
　βテスターも、ＳＡＯのプレイ経験があるとはいえ単なる一般人。他の初心者プレイヤーを助ける義務は一切ない。
　しかし初心者にとっては唯一頼れる存在。そんな連中が自分だけ助かろうとしているように見え、不満を抱いているものが少なからずいるのは確かだった。
「あのさー、一言言っていいかな？」
　青い顔でキリトが黙り込んでいると、隣から実に面倒臭そうな声が聞こえてきた。
　目を瞬かせたキリトは、その場で立ち上がって腰に手を当て、キバオウをジト目で睨んでいる勇気を見つけてぎょっと目を剥いた。

「何やチビ！　ワイの言うことに文句があるっちゅうんか
「おっ、おいユウキ！」
「チビじゃなくてボクはユウキ、ビギナーだよ。キバオウさん…だっけ？　死んだ２０００人の中に元βテスターが何人いたか知ってる？」
「知らんわそんなもん‼？」
キリトの制止にも耳を貸さず、ユウキはキバオウに向けて尋ねる。
苛立ったようなキバオウの返答に、ユウキは深いため息をついて肩をすくめると、ジト目のまま再び口を開いた。
「３００人だよ。『鼠』っていう情報屋さんから買った情報だから間違いないみたいだよ」
知らない情報だったのか、キバオウはもちろん他のプレイヤーたちも驚いた様子でユウキを凝視している。
相手がようやく落ち着いたことを確認し、ユウキはさらにその先を続けた。
「これってつまりは元βテスターが絶対って訳じゃないよね？　だって色々知ってるはずの人たちがこんなに死んでるんだもん」
ぐうの音も出ない正論に、キバオウは気まずそうに目をそらし口を閉ざす。
事前の知識があったところで、それが確実に役立つとも限らない。ゲームがうまい者もいれば下手な者もいる、βテスターだと一括りにするのは間違いなのだ。
ユウキは言外にそう告げていた。
「それにさ……βテスターたちがみんな好きで先に行ったと思ってるの？」
「な……なんやと⁉？　どういう意味や⁉？」
「確かに知識がある人は有利だよ。効率的に強くなれるし生き残れる可能性も高い。…でもそういう人達は、ただの数値であるはずのＨＰが全部なくなれば、本当に死んじゃうことを知って冷静でいられたのかな」
ユウキの言葉に、キリトは驚いた様子で彼女を見上げる。

ユウキの言った疑問は、キリトがユウキとクラインをおいて街を出た時の心情そのものだったからだ。
「βテストでは誰も死ななかった。だってコンティニューできるんだもん。でも今は違う……ノーコンティニューでクリアしなきゃ、本当に死んじゃうんだよ」
「ぐっ……」
「死ぬのは怖いよ。誰だって……でも一番怖いのは、死ぬときにひとりぼっちになることだよ」
キリトは思わず、自身の胸ぐらをつかんできつく握りしめてしまう。
この世界でできた始めての友人たちを見捨てた時、激しい罪悪感と同時に孤独感にも苛まれていた。このままいけばひとりぼっちだと言う事実に打ちのめされ、身勝手にも強い後悔を抱いてしまっていたのだ。
苦しげに顔を歪めるキリトの肩を、ユウキは静かに軽く叩いた。
「先に行ったβテスターは、みんな一緒に行ったのかな。そうじゃない人もいるよね？　中には自分一人が楽しむためにＳＡＯを手に入れて、誰とも組まずにやってきた人たちもいたかも知れない。もともと人とつるむのが苦手な人もいるかも知れない。……それでも行くしかなかったんだよ。生き残るために、死にに行くしかなかったんだよ」
ユウキの言葉は、他のプレイヤーたちには単なる想像としか伝わっていないかもしれない。
しかしキリトには、それが自分達を置いていったキリトに対する慰めのようにしか思えなかった。
ずっと張り詰めていたキリトの心が、少しだけ戒めを解かれた気がした。
「俺も発言いいか？」
ユウキの長い質問が終わると、今度は黒い肌の巨漢のプレイヤーが立ち上がって手をあげた。
「俺の名はエギルだ。キバオウさん、あんたの言いたい事は、元βテス

ターが面倒を見なかったからビギナーが沢山死んだ、だからその謝罪と賠償をしろ。ということか？」
「そ、その通りや！」
「このガイドブック、あんたも持ってるだろう？　道具屋で無料配布してるからな」
　エギルと名乗ったプレイヤーが小さな本を見せると、ざわり、とユウキの時とは異なる驚愕が周囲に伝播する。
　ちなみにその驚愕は、キリトにも伝わっていた。
「……俺、金払ったぞ」
「え、マジ？」
　いたずらっぽい表情で値段を告げてきた、顔にネズミのヒゲを描いたプレイヤーとの会話を思い出し、キリトは拳を震わせた。
　男女差別だと喚くつもりはなかったが、理不尽だと思わぬわけではなかった。
「もろたで？　それがなんや！」
「配布していたのは元βテスター達だ」
　またも初めて聞く情報を知らされ、キバオウが絶句する。
　プレイヤーたちの興奮が鎮火されたことを確認し、エギルは全員の方へ声を張り上げた。
「いいか！　情報は誰にでも手に入れられた、なのに沢山のプレイヤーが死んだ。その失敗を踏まえて、この場で論議が行われると俺は思っていたんだがな？」
「……ええわ、ここは引いといたる。でもな！　ボス戦が終わったらきっちり白黒つけたるからなぁ！」
　渋々といった様子で、キバオウは引き下がる。
　その途中、なぜか一瞬キリトの方に鋭い視線が向けられた気がしたが、すぐに逸らされたために気付く者はいなかった。
「よし、会議を再開しよう」

―5―　Ｓｔｒａｔｅｇｙは「いのちだいじに」②

「攻略会議は以上だ。最後に分配についてだけど、金は全員で自動均等割り、経験値はモンスターを倒したパーティーに、アイテムはゲットした者の物とする。異論はあるかな？」

会議はその後、フロアボスやの装備や攻撃方法についてや作戦についてなど、数時間にわたって続いた。

空が赤く夕暮れのエフェクトに染まり始めてようやく、全員が納得できる方針が決定された。

「よし！　明日は朝１０時に出発する！　では解散‼？」

若干疲労を感じさせる声でディアベルが告げ、プレイヤーたちはそれぞれがとった宿に戻っていく。

ユウキは待ってましたとばかりに両手を天に伸ばし、固まった全身をほぐし始めた。

「んぃ～…長いこと座ってるだけだと肩凝るね！」

「お前、途中何回か寝かけてただろ。キバオウがものすげぇ睨んでたぞ」

「あ、バレた？」

「そりゃ何度も船こいでたらな…」

こっくりこっくりと、何も尋ねられてもいないのに頷いていれば誰でもわかる、とキリトはユウキを睨む。

苦笑したユウキが舌を出して頭をかいていると、じっと二人を見つめていた女性プレイヤー、アスナが口を開いた。

「……あなた達、仲良いのね」

不意にかけられた感想に、ユウキとキリトは不思議そうにアスナの方に振り向いた。

「ん？　そう見えたか？」

「ええ…ちょっと邪推しちゃうぐらいに」

「ん～、アスナさんが考えてる関係じゃないと思うけど……具体的にどんな関係って言われたら、普通に気の会う仲って感じかな？」

ユウキは一度キリトの方を向き、じっとその顔を見つめて首を傾げ

る。
昔読んだ少女漫画では、好きな男を見つめていると顔が熱くなったりしていたが、キリトに対して別段そんな感じはしない。
単純に、この人は一緒にいて面白そうだな、と思うぐらいだった。
「私、あなたに名前言ったかしら」
「へ？」
その時、急にアスナの声が訝しげに硬くなったことでユウキは慌てて振り向く。
名乗った覚えのない名を呼ばれたことで警戒させてしまったのだと気づき、ユウキは納得のため息をついた。
「あ、もしかして気づいてない？　視界の右端にプレイヤー名が出てるんだよ。……って顔も動かしたらダメだって」
言われてアスナはすぐに警戒を解き、自己紹介もすませていない二人のプレイヤーの名前を改めて確認した。
「ユウキとキリト……これがあなた達の名前ってことね」
「そう！　ってことで、改めてよろしくね、アスナ！」
名前をようやく呼んでもらえて嬉しかったのか、ユウキは嬉しそうにアスナの手をとる。
戸惑い気味だったアスナだが、やがて苦笑しているキリトに真剣な視線を向けた。
「……あなた、こういうゲームに詳しいのだったら、私にできるだけ教えてくれないかしら」
ユウキとは異なり、異性に対してはまだハードルがあるのだろうか。
若干距離を感じる態度で頼まれたキリトは、眼力の強さに思わず引きながら頷いていた。
「あ、ああ…正直俺も、あんたがゲーム自体かなり初心者ってのがわかってきたからな。知ってることは全部教えるよ」
「じゃあ、お願いするわ」
まだまだ友好的とはいえない、固さのある二人のプレイヤー。
それを見ていたユウキは呆れた目を向けながら、しばらくして切な

げな表情を浮かべた。
「それはいいんだけどさぁ……そろそろどこかでご飯食べない？　ボクなんかパワーダウンしてきたよ……」
「そうだな……適当に腹ごしらえしながら作戦会議といくか」
　腹を抑えて悲しげな音を響かせるユウキに、キリともな時状態だったのか即座に了承する。
　そのまま待ちへと並んで戻って行く二人の背中を見つめながら、アスナは感慨深げにつぶやいていた。
「……ほんと、仲のいい兄妹みたいね」
　その口元には、いつの間にか羨ましげな笑みが浮かんでいた。
☒
「……まさかここまで素人だとは」
　手頃な店に入り、食事しながら初心者プレイヤーであったアスナにレクチャーをしたキリトの感想がこれであった。
「し、仕方がないじゃない！　生まれてこのかた、ゲームとか遊びとはあんまり縁がなかったんだもの…」
「それで初めてチャレンジするゲームがＳＡＯ？　思い切ったよねぇ」
　フードの下の顔を赤くして言い返すアスナに、ユウキは思わず渇いたため息をついた。
　例えるなら、電卓しか使ったことがない子供がいきなりパソコンに挑戦するようなものだろうか、と関係のないことを考えていた。
「ま、とにかくこれで本番で知らない単語を聞いてもテンパらずに済むね。ほとんど一夜漬けみたいなもんだけど」
「ええ……あなた達の足手まといにはならないわ」
「頼もしいことだな」
　どことなく得意げに胸を張るアスナに、キリトは苦笑し肩をすくめると、しばらくして腰を上げた。
「じゃあ、それぞれ宿に戻って明日に備えるってことで。解散！」
「おーっ！」
「お、おー」

終始テンションの高いユウキに釣られ、アスナもつい一緒になって拳を上げてしまう。
頬を赤く染めている姿を見て、ユウキがケラケラと笑っていると、ふと思い出したようにキリトに振り向いた。
「あ、ごめんキリト。解散しといてなんだけどちょっとキリトの家に寄っていい？」
「ん？　…ああ、またか。いいぞ」
「……⁉？」
そのまま店を後にしようとしたアスナだったが、背後で聞こえてきた会話にギョッと目を剥き、慌てて二人の元に舞い戻った。
「ちょ、ちょっと待ちなさい！」
一緒に並んで店を出ようとしていたキリトとユウキは、狼狽した様子で掴みかかってきたアスナにビクッと肩を震わせた。
「と、年頃の女の子が異性の家を訪ねるって……そ、それってやっぱりもしかしなくても」
「へ⁉？　ち、違う違う！　お風呂借りるだけだって！」
アスナがなにを心配しているのか察したユウキは、ボッと頬を染めて即座に否定する。
気を取り直すようにごほんと咳をすると、心配そうにじっと見つめてくるアスナに説明を始めた。
「ボクが借りてる部屋って、安さだけ見て選んだからさー。ベッドが一つあるだけで窮屈だし……キリトはなんかちょっといいとこに住んでんだよね。お風呂付きとか羨ましいぞこのやろー」
「だから他のとこ紹介してやっただろうが…」
「だってあそこ高いんだもん」
ジト目で見つめてくるキリトに、ユウキはブーと唇を尖らせて文句を垂れる。
顔を見合わせるユウキとキリトはその時、ぎらりと目を輝かせてキリトを凝視するアスナの豹変に気づいていなかった。
「あ～あ、もうちょっと稼げたらキリトみたいに家買って好きなだけごろ寝するのになー……っておおぅ⁉？」

頭の後ろで手を組んでぼやくユウキは、次の瞬間急に近づいてきたアスナに驚いて後ずさる。
アスナは目を見開くユウキには目もくれず、ギョッと硬直するキリトの両肩をがっしりと掴んだ。
「……」
「な……なんでしょうか、アスナさん」
無言のままっすぐに見つめてくるアスナに、本能的な恐怖を覚えたキリトが頬を引きつらせて尋ねる。
無言のまま固まっていたアスナは、やがて小さく口を開いた。
「……お風呂」
「へ？」
その声の小ささに、キリトもユウキも思わず間抜けな表情で聞き返してしまう。
アスナは自分の動揺を落ち着けるように、数回深呼吸を繰り返すと改めてキリトに質問した。
「お風呂があるのね」
☒
「ふぁぁぁぁぁぁ……！」
フードも装備も衣服も、全て取り払って生まれたままの姿になったアスナは、全身を包む幸福感に震える声を上げた。
「なんて気持ちがいいの…⁉？　こうやって体を清められるなんて何日ぶりかしら…」
「気持ち、わかるなー。ボクはそんなにお風呂好きじゃなかったんだけど、何日も入ってないと流石に気が滅入ってきてさー」
アスナと一緒に、少し大きめの湯船に使ったユウキは、初めて見たアスナの顔に驚嘆のため息をつく。
フードで隠されていたのは、非の打ち所がないぐらいに整った美しい顔だった。卵型の輪郭といい、長いまつげや大きな瞳といい、同性であるユウキでさえ見とれてしまうほどの美少女だった。
これほど綺麗な少女なら、面倒ごとを防ぐためにフードで顔を隠すのも納得である。

「誘ってくれたキリトに感謝だよ。まぁ…本人は後で自分が言ったこと思い返して顔真っ赤っかにしてたけど。『うちに来いよ』とか似合わないこと言っちゃってさ」
「ふぅん……すかしてる風で意外とウブなのね」
「そりゃまだまだ青少年ですから」
その時のことを思い出し、ユウキはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。
アスナもユウキの素直な態度にほだされたのか、出会った当初のような刺々しさを和らげ始めていた。
「……アスナはどうして、明日のボス戦に参加しようと思ったの？」
少しだけ距離が詰められたと思ったユウキが、思い切ってアスナに尋ねてみる。
しかしアスナは、またしても気を張ったような硬い表情に戻ってしまった。
「あ、言いたくないならいいんだよ？　プライベートなことにまで踏み込むつもりはないから」
「……ううん、いいわ。話す。とくに、あなたにはちゃんと」
地雷でも踏んでしまったかと不安になるユウキに、アスナは首を横に振って微笑みを見せる。
しかしそれでも、アスナの表情に憂いの影は残っていた。
「宿屋で一人で閉じこもってても、街の中に隠れてても、それはなんの解決にもならない…事実を否定しても、現実に変化が現れるわけじゃない。……ここじゃ本当に、人が死ぬっていうんだもの」
決意を秘めた眼差しで、アスナは虚空を見据えて呟く。
それはどこか危なげな光を宿していたが、同時に人を惹きつける強さも兼ね備えて見えた。
「だったら私は、逃げたくない。現実から目を背けて、無様な姿を晒すことはしたくないのよ……自分に、負けたくないのよ」
「アスナ……」
ヤケになったわけではない、諦めたわけでもない。
ただ、自分にできる戦いの全てを全うしようとしているような、そ

んなアスナの覚悟を目にした気がして、ユウキは思わず笑みをこぼしていた。
「なんか、カッコいいよね。君は」
外見の美しさもあって、今のアスナは物語の騎士のような凛々しさがある。
眼福だとばかりに相手を見つめていたユウキは、しばらくすると視線を下にずらし、湯面に浮いている二つの膨らみに目を向けた。
「おっぱいだけじゃなくて志もおっきいんだね」
「へ⁉？　ちょっと…どこ見てるのよ⁉？」
「あはははは…！」
自分にはない、ものすごく羨ましい大きくて形の整ったものが、アスナの手に隠されて餅のように変形する。
するとユウキの目がキラリと光り、掲げた手がわきわきと動き始めた。
「へへへ～…ちょっとだけ触らせてよ」
「ひゃっ⁉？　やだっ、変なところ触らないで！」
「よいではないかよいではないか！」
「ダメだったらもう～！」
バシャバシャとお湯が弾けるエフェクトを撒き散らし、少女達は姦しくじゃれ合う。
その光景は、現実世界とそう変わらない微笑ましいものであった。
☒
（……地獄かここは）
が、外にいるキリトにしてみれば非常に居心地の悪い空間であった。
壁一枚隔てた向こうでは、艶やかな肌を全てさらけ出した少女達が絡み合っている声が聞こえてくる。
健全な青少年であるキリトが無言になってしまうのも、仕方のないことだった。
（落ち着け俺……壁の向こうを想像しようとするな。素数だ。素数を数えて精神を落ち着かせるんだ……大丈夫、俺は平気だ。惑わされた

りなどしない……ステイステイ……！）
今この場で妙な行動を起こせば、キリトはすぐさま女性陣に敵判定され、より一層孤独な運命を決定づけられてしまうことだろう。
それを防ぐため、キリトは必死に脳内に浮かびそうになるピンクな妄想を振り払おうとしていた。
その時だった。
「ヨー、キー坊。お邪魔しているゾ」
「やましいことは何も考えておりません‼？」
なんの前触れもなく扉が開けられ、顔にネズミのヒゲのペイントをしたプレイヤーが現れる。
予想外のタイミングでの登場に、キリトは少しだけその場で飛び上がりながら背筋を勢いよく伸ばした。
「っていきなりどうしタ？　顔赤くして」
「な、なんでもない。それよりも」
意味不明な反応に、訝しげに眉間にしわを寄せるネズミのヒゲのプレイヤー・アルゴ。
キリトは慌てて居住いを正し、真剣な表情でアルゴに向き直った。
「仕事の話だ」

―6―　Ｓｔｒａｔｅｇｙは「いのちだいじに」③

翌日、キリト達は再び広場へと集合し、出発の時を待っていた。
「さて、俺達あぶれ組はＥ隊のサポートでボスの取り巻き『ルイン・コボルト・センチネル』を相手にすることになったけど、取り巻きだが中々に手強いから油断はできないぞ」
ディアベルが人数の確認をしているのを見ながら、キリトは前日に確認した情報をもう一度ユウキとアスナとの間で共有する。
ユウキもアスナも、何度も聞いた話に嫌な顔一つもせずに頷いた。
「俺達の中の誰かがソードスキルで奴らのポールアックスを跳ね上げる、その瞬間残りの二人で畳み掛けるんだ。弱点は喉元だからそこを狙えばいい」
「りょうか～い」
「わかったわ」
散々確認しあった注意事項に、少女たちは片方は気楽に、もう片方は生真面目に答える。
緊張感に差を感じながら、キリトはツッコミを入れたい気持ちを抑えて先を続ける。
「後は集中力だけは切らさないでくれ。ボス戦ではなにが起こるか解らない、集中力が切れるのは死に直結すると思ってくれ」
「わかってるって！」
「…そういう軽い返事が一番不安になるんだが」
「あ、あはははは……ごめんごめん」
しかしやはり我慢ができず、のんきに笑うユウキにジト目を向けてしまう。
アスナもそんな気の抜ける会話をする二人に、呆れたため息をこぼしていた。
「皆！　今日は集まってくれて本当にありがとう！　力を合わせて必ずボスを倒そう、もちろん、犠牲者無しでだ‼？」
走行しているうちに志願者全員が集まったのか、ディアベルが拳を上げて最後のやる気を注入している。

全員の士気が高まっていることを確かめ、プレイヤーたちは一斉に同じ方向を向いた。
「よし、出発だ‼?」
☒
フロアボスの待つ迷宮区までの道を、キリト達は途中のモンスターを狩りながらひたすら歩く。
ついでに昨晩教えた連携について、少しずつ実践させてみながら。
「ねぇキリト？　昨日アルゴと何話してたの？」
「……別に大したことじゃない」
「わざわざ家にきてまで世間話してたわけじゃないでしょ～？」
単純作業の繰り返しに飽きたのか、ユウキが気分転換のつもりか話題を振る。
だがキリトは若干よそよそしくごまかし、ユウキは不満げに目を半目にした。
「ちょっと…俺の持ってる装備を売ってくれって話がきてたから、その値段交渉をしてただけだ」
「ふ～ん…そっか、それならいいや」
面倒そうにキリトが答えると、ユウキもあっさり納得して後ろに下がった。
なんとなく、キリトが何かを気にしている様子を感じたが、ユウキはあえて言わずにおいた。あくまで直接的には。
「でもさ、キリト」
背中を向けるキリトに向けて、ユウキは不敵な笑みを浮かべて腰に手を当てる。
そして訝しげな様子のキリトの顔を覗き込み、やや咎めるように告げた。
「ボクらは友達なんだから、困ってることがあったら頼ってよね？」
「……！」
ユウキからの言葉に、キリトは驚いた様子を見せ、そしてそのうちくすぐったそうにそっぽを向く。
アスナはただフードの下から微笑みながら、仲のいい二人を後ろか

ら見守っていた。
その時、クスクスと笑っていたユウキが、やがて自身の目の前に提示されたアナウンスに気付いた。
「ん？　メッセージ…プレゼント？」
前触れもなく送られてきたメッセージに、ユウキは訝しげに思いながらもそれを確認する。
自分のアイテムボックス欄に収納されたのは、『???』と記載がバグっている奇妙な二つのアイテムだった。
「差出人もなし……しかもロックされてて見えないし何これ？　へんちくりんなイタズラだなぁ」
眉間にしわを寄せ、ユウキは余計な手間をかけさせられたことにやや不機嫌になる。
その苛立ちをモンスターなどにぶつけて歩き続けていると、やがて一同は大きな鋼鉄の門の前に到着していた。
フロアボスの待つ、迷宮に最深部の扉だ。
「ついにここまで来た、俺から言える事はたった一つだ……勝とうぜ‼？」
ディアベルの音頭で、集まったプレイヤー達が一斉に吠えて応える。
そしてついに、アインクラッド最初の門番の待つ扉が、ゆっくりと開けられていった。
その先に待っていたのは、巨大な赤い二足歩行の怪物だった。
狂犬の顔の下の赤い巨体は樽のようだが、分厚い筋肉の鎧に覆われて脈打っている。手に持つ巨大な斧とバックラーが、相対するプレイヤーに威圧感を与える。
凶悪にゆがんだ口からはだらだらとヨダレを垂らし、低いうなり声で威嚇を続ける。
記された名は、イルファング・ザ・コボルトロード。
何体ものコボルト達を率いる、最初の戦いにふさわしいいでたちのボスだった。
「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ‼？」

「攻撃――――開始‼？」
コボルトロードが凄まじい咆哮を放った瞬間、ディアベルの指示で隊が突撃を開始した。
セオリー通りに複数の班で取り巻きを抑え、本隊がコボルトロードに挑んでいく。
ユウキ達の班はこの取り巻きの足止め。フロアボスへの攻撃に加わる予定はなかった。
「スイッチ！」
コボルトの攻撃を受け止めたキリトは、後ろに控えるアスナに叫ぶ。
合図を受け取ったアスナは、すぐさまキリトと入れ替わるようにしてコボルトに刺突の連撃を加えた。
「アスナ、やるぅ……！」
ガシャン、とポリゴンのかけらとなって砕けたコボルトの末路を見て、ユウキは口笛でも吹きそうな高揚を見せる。
その間にも、コボルト達は次から次へと集まっては攻撃を加え、その度にキリトが盾役を担っていた。
「スイッチ！」
「オッケェイ‼？」
アスナの見事な動きに見とれていたユウキは、合図にすぐさま反応して駆け出す。
繰り出される刺突はアスナの放ったスキルと遜色ないほど見事なもので、キリトは思わず乾いた笑い声をこぼしていた。
「……お前も大概だよ、ユウキ」
ユウキは一度見たことがあるとはいえ、現在のＳＡＯの状況でも変わらず動けるのは純粋にすごい。
加えてアスナの動きも、初心者とは思えないほど洗練されたもので唸る他にない。
この二人は現実世界で一体何をやっていたのだろうな、とキリトがしみじみと考えていた時だった。
「アテが外れたやろ？　残念やったな？」

不意にかけられた、わずかに敵意の混じった声に瞬時に表情を引き締める。
気づかぬ間に近寄ってきていたキバオウが、キリトに対して嘲笑するような目を向けていた。
「……何の事だ？」
「とぼけんなや。ワイは知っとるんやで、ジブンがこのボス戦に参加した動機をな」
キバオウの言葉に、キリトは眉間にしわを寄せて見つめ返す。
何を隠そう、相手はアルゴを通じてキリトの武器、現段階では優秀な武器であるアニールブレードを買い取りたいと言ってきた相手なのだ。
「動機……？　ボスを倒す以外に何かあるのか？」
「はっ！　開き直りか。それを狙っとたんやろが！　聞いてるで、あんたが狡い立ち回りでボスのＬＡを掻っ攫いまくっとった事をな！」
キリトは思わず言葉につまり、図星だということをあらわにしてしまう。
ボスモンスターなどに最後に攻撃を加え、倒した者が得られるラストアタック。
βテスト時代に、キリトがそれを手に入れることを得意としていたことを、キバオウは知っていたというのか。
「……キバオウ、あんた聞いたって言ったな？　誰から聞いた？　そいつはどうやって俺のβ時代の情報を掴んだんだ？」
「決まっとるやろ。大金積んであんたの情報を『鼠』から買うたって言うとったで。ま、誰かは言う義理あらへんけどな」
キバオウは得意げに鼻で笑うが、キリトはそれを内心で否定した。
（嘘だな……あいつは自分のステータスですら売り物にするが、β時代のプレイヤー情報だけはなにがあっても売ろうとしない）
アルゴ自身もβテスターであるゆえか、それに関する情報を漏らさないことにはキリトも信頼を置いている。
ということは、キリトが元βテスターであることを知っている者が他にもいるということになるが…。

「もー、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ？」
考え込んでいたキリトは、ポンと肩を叩かれて正気に戻る。
振り向くと、ユウキがやや不機嫌そうな目でキリトを、そして強めにキバオウを睨みつけていた。
「いくよキリト。ボクらのお仕事はおしゃべりじゃないでしょ？」
「あ、ああ……」
咎めるように告げるユウキに、キリトは戸惑い気味に頷く。
さりげなくキバオウから遠ざけられるように手を引かれていることに気づき、キリトは苦笑しながらため息をついた。
「雑魚が来たで、くれてやるからあんじょうＬＡ取りや」
新たに現れたコボルトを見てそう言うキバオウに、ユウキはべーっと舌を出してそっぽを向く。
年下の女の子に精神的に支えられてばかりだと、キリトは思わず気恥ずかしさを覚えてしまっていた。
コボルトロードとの戦況は、いつの間にかあと少しと言うところまで達していた。
四本あったＨＰゲージが残り一本にまで減り、コボルトロードが持っていた武器を捨てたのだ。
情報通りなら、コボルトロードが次に出すのは腰にさげたタルワール。その際の決まった動作についての情報も全員の頭に入っていた。
「情報通りやな！」
「下がれ！　俺が出る！」
勇ましく叫んだディアベルが前に出て、腰に手を回すコボルトロードの前に立ちはだかる。
なんとなく、ディアベルの様子に焦りのようなものを感じたユウキは、コボルトロードが引き抜こうとしている武器の形状を見て……同時に見えたノイズのようなものに気づき、目を見開いた。
（あれは野太刀‼？　βテストと違う‼？）
「駄目だ‼？　全力で――――後ろに跳べぇぇぇ‼？」
ユウキが気づいた瞬間、隣で同じ表情になっていたキリトが思い切り叫ぶ。

しかしその声は、間に合わなかった。
コボルトロードが放った重範囲攻撃をキャンセルできず、ディアベルはその身に刃を受けて吹き飛ばされてしまう。
「ぐわあああ⁉？」
それだけでは終わらない。一瞬全身にノイズを走らせたコボルトロードは、苦悶の叫びのような咆哮を放つと再び野太刀を振り回し、宙に浮いたディアベルを滅多斬りにしていく。
斬撃の暴雨から解放され、倒れ込んだディアベルの全身には、おびただしい数の傷跡のエフェクトが残されていた。
「ディアベル‼？」
「キリト！」
思わず駆け出したキリトの声に、コボルトロードがいびつな動きで目を向ける。
振り上げられたタルワールの切っ先がキリトに向けられそうになった時、それを弾く黒い一条の光があった。
「いいやあああああ‼？」
驚愕と衝撃で動けない他のプレイヤー達に代わり、ユウキが裂帛の怒号を放ってコボルトロードに斬りかかる。
コボルトロードのターゲットが変更されると、ユウキがキリトの方に視線を向ける。その意思を汲んだキリトも、すぐさまディアベルの元に急いだ。
「ディアベル、どうして一人で……」
ディアベルを抱き起こすと、キリトはすぐさま回復アイテムである結晶を使おうとしたが、ディアベルはそれを弱々しく手で制して止める。
たとえ使ったとしても、もう手遅れだと言うことを示され、キリトの表情が曇った。
「はは……ざまぁないな……最後に欲が出て……ヘマしたよ……」
「あんた……やっぱり……」
ディアベルの反応に、キリトは確信する。
ディアベルもキリトと同じβテスターであり、キリトも自分と同じ

であると気づいたのだと。
焦りを見せていたのは、βテストと同じようにキリトにラストアタックを掻っ攫われることを恐れていたから。キバオウがキリトについて知っていたのは、ディアベルこそがキリトの装備を欲していた張本人であったからだ。
次々にキリトの中でピースがはまっていくと、ディアベルは沈痛な表情で俯いた。
「すまなかった……キリトさん……こんな事言えた……立場じゃないけど……」
申し訳なさそうに表情を曇らせるディアベルだが、キリトはその真意を察していた。
彼がラストアタックにこだわっていたのは、そのボーナスアイテムこそがプレイヤー達の希望となるために必要不可欠だと思ったからだ。
ただキリトに華を持たせないためではない。リーダーとしてみんなを導くためだった。
「頼む……ボスを倒してくれ……皆の……為に――――」
ディアベルはまっすぐにキリトを見つめ、少年の手を握りしめる。
そのわずか数秒後、ディアベルの体はポリゴンのかけらとなって砕け、虚空に消え去ってしまう。
今までプレイヤー達が倒してきたモンスター達と同じ、あっけなさすぎる最期だった。

―7―　I⊠m　a　仮面ライダー！

ポリゴンのかけらとなって砕けたディアベル。
人が一人命を落としたという事実は、それを目の当たりにしていた他のプレイヤーたちにも、大きな衝撃を与えていた。
「う……嘘だろ？」
「リーダーが……死んだ⁉？」
呆然と呟く声が上がる中、ザザッとノイズを走らせたコボルトロードがギラリと目を光らせる。
新たな獲物を探したモンスターは、大きく口を開き凄まじい咆哮を放った。
「グルオオオアアアアアア⁉？」
「う、うわぁぁぁ⁉？」
「た、助けて⁉？」
コボルトロードの放つ威圧に、ただ一人応戦するユウキを除くほぼ全員が恐怖する。
もはや彼らには、目の前いる異形はただの敵キャラと思えない。自分たちの命を奪う、本物のモンスターとしか認識できなくなっていた。
「なんで……なんでや、ディアベルはん。リーダーのアンタがなんで最初に」
キバオウはただ呆然と立ち尽くし、あっけなくこの世を去ったディアベルのいた場所を見つめ続ける。
その時、喪失感に苛まれていた彼の肩を掴む者がいた。
「へたっている場合じゃないだろ⁉？」
「な……なんやと？」
我に返り、きっと睨み返してくるキバオウに、キリトは厳しい表情で告げる。
キリトとて、まだ完全に立ち直ったわけではない。だが彼は、ディアベルから託された彼は立ち止まっているわけにはいかなかった。
「E隊リーダーのアンタが腑抜けていたら仲間が死ぬぞ！　いいか、

センチネルは湧き出る。そいつらはアンタ達が対処するんだ！」
「……なら、ジブンはどうすんねん、一人とっとと逃げようちゅうんか？」
「そんなわけあるか……決まっているだろ？　ボスのラストアタックを取りに行くのさ」
訝しげに睨みつけるキバオウに背を向け、キリトは再び剣を握りしめる。
気づけば、へたり込むプレイヤー達の元に新たに現れたコボルト達が襲いかかろうとしている。
キリトは自分自身を落ち着かせ、この状況に最適な解を導き出した。
「全員！　出口方向に下がれ！　ボスを囲まなければ、範囲攻撃は来ない！」
ユウキが縦横無尽に飛び回り、コボルトロードの注意を惹きつけている間に、キリトは一人でも多く生き残らせるために喝を入れる。
コボルトロードの野太刀を躱したユウキが、そこへ飛び退ってきた。
「ボクもいくよ、キリト！」
「私のこと、忘れてるんじゃないでしょうね？」
不敵に笑うユウキと同じように、アスナが少しだけ不満げにキリトに問う。
他に動けるプレイヤーはいないが、キリトは心強さに胸を熱くし、フッと笑みを返した。
「手順はセンチネルと同じだ！」
「よっしゃ！」
「ええ！」
小さく頷きあい、ユウキ達は一斉に異なった方向へ走り出す。
最も早くコボルトロードの足元へたどり着いたユウキは、振るわれる野太刀に全力でスキルをぶつけまくった。
「いやあああ‼？」
攻撃が攻撃となる前に、剣をぶつけることでユウキはコボルトロー

ドの斬撃を無効化させる。
剣の激突により攻撃を逸らされ、体勢を崩したコボルトロードに今度はキリトが突進した。
「スイッチ！」
「はぁぁぁ‼？」
キリトがコボルトロードの野太刀を抑え込み、アスナの刺突のための道を作る。
二人の動作の間に目立ったタイムラグはなく、思わずユウキが唸るほどに見事な息の合わせようを見せていた。
「あの三人、ただもんじゃねえぞ！」
「それに、あのチビの方！　ボスのソードスキル、全部キャンセルしてやがる！」
ユウキの異常なほどの剣技と、キリトとアスナのコンビネーションによって、みるみるうちにコボルトロードのＨＰが削られていく。
必死にコボルトの相手をするプレイヤー達の間に、少しずつ希望の光が見え始めた。
その時だった。
「……何だ？」
コボルトを斬り伏せたエギルが、視界の端に映った違和感に眉間にしわを寄せる。
異常を感じたのは彼だけではなく、どうにか自分の身を守ることに専念していたプレイヤー達も、コボルトロードに起こり始めた異変に戸惑いの声を上げ始めた。
「グオオオ〜＃＞＿；＿＃％＞＾＾＜＿＞＞＾‼？」
自分を攻撃するキリト達を重点的に攻撃していたコボルトロードが、さらに強まったノイズとともに奇妙な反応を見せ始めた。
意思のないはずのボスモンスターが、自身の異常に苦しむかのように体を悶えさせ始めたのだ。
「な…何だ⁉？」
「ちょっと……これってゲームの仕様とかじゃないの⁉？」
キリトがこぼした困惑の声に、アスナは目を見開いて聞き返す。

βテスターでさえ知らない異変に誰もが立ち尽くす中、コボルトロードはいよいよその異変を外見に表し始めた。
「|}^!,{`]%☒+〝#^<{;<^>;{^＊$>}<<〝〝‼?」
コボルトロードの体表に、いくつものオレンジ色の腫れのようなものが吹き出し、全身に広がっていく。
ぶくぶくと全身を焼けただれたように変形させるその姿は、ガン細胞を思わせるおぞましい光景を作り出していった。
「何アレ⁉?」
ユウキが驚愕で声をあげると、異形となったコボルトロードは異様に膨れ上がった腕を振り回し、胞子のような何かをばらまく。
空中に四散したそれはコボルトやプレイヤー達に張り付き、次の瞬間コボルトロードと同じように腫瘍となってまとわりつき始めた。
「うわ…うわあああ‼?」
「な、なんだよこれ⁉?　体が…⁉?」
放たれた胞子は、毒や麻痺のようにHPや行動制限をかける状態異常とも異なる、プレイヤー自体に感染していく。
プレイヤーという情報の塊に対し取りつき、破壊していくその光景はまさに、仮想空間内のパンデミックであった。
「どんどん増えてる……まるでウィルスみたいに」
「こんな変化、ありえないぞ⁉?　どんなクソゲーだよクソッタレ‼?」
敵も味方も関係なく、コボルトロードが放つウィルスによって次々に命が脅かされていく。
加えて、ただのプログラムのはずのコボルトロードが、苦悶の咆哮を放ち滅茶苦茶にあたりに攻撃を始めた。
「攻撃パターンまで変化してる…！　どうなってるんだ…⁉?」
キリトとユウキ、アスナが開きかけた希望が、全くの予想外の展開によって塗りつぶされていく。
感染したプレイヤーも、まだそうなっていないプレイヤーも、今度は自分に降りかかった死の予感で恐怖に脅かされていた。

「いやだ……いやだぁぁぁ‼?」
「死にたくない…死にたくないよ‼?」
ゲームの中で病に苦しむという、理解の及ばない現象に誰もが立ち上がる勇気を失ってしまう。
呆然と立ち尽くし、言葉を失っていたアスナは、悲痛な表情で歯をくいしばるとキッとコボルトロードを睨みつけた。
「くっ……!」
「アスナ!」
明らかな元凶であるコボルトロードに突撃しようとするアスナだったが、突如彼女も苦痛の顔で膝をついた。
いつの間にか彼女の肩にもウィルスが張り付き、徐々に彼女の体を侵し始めていたのだ。
(どうすればいい……!　一体どうしたら…‼?)
あちこちで上がる悲鳴と絶叫、そして異形となり予測不能の反応を見せ続ける敵モンスター。
どこからどうやって対処すればいいのか、ユウキは険しい形相で考え込む。
その時、ユウキはふとあるアイテムの存在を思い出した。
「そうだ…これは…?」
攻略に赴く前、いつの間にかプレゼントとして自分のアイテムボックスにおかれていた、差出人のない閲覧できなかったアイテム。
ユウキが自分のメニューを開いて中を確認すると、件のアイテムが名前を表示していた。
「…⁉?　このアイテム……使えるようになってる」
何の前触れもない、いつの間にか閲覧可能になっていたそれを、ユウキは恐る恐る調べる。
〈Ｇａｍｅｒ　ｄｒｉｖｅｒ〉、〈Ｇａｓｈａｔ〉と表記されたそれを、ユウキは目を丸くしながら凝視した。
(解放する条件を満たした……?　なんで、いつの間に…?　それに、まるでこういう展開を待っていたみたいな……そんなの都合のいいゲーム展開みたいな…)

異常事態が起きたと思えば、誰からのものかもわからないアイテムが、「待っていましたさぁ使え」とばかりに鎮座している。
明らかに怪しさしか感じないユウキだったが、あたりから聞こえてくる悲鳴に首を振り、覚悟を決めてコボルトロードを睨みつけた。
「考えてる暇なんてない！　これにもし、この状況をひっくり返せるの可能性が宿っているんなら、乗らない手はないっての！」
迷いは一瞬、ユウキはすぐさまアイテム欄から件のアイテムをオブジェクト化し、自分の手元に呼び出す。
そして現れたのは、淡い緑の箱状のものに、ピンク色のレバーがついた奇妙なもの。
それに加えて、短剣のおもちゃのような形状のゲームカセットに似たアイテムだった。
「ゲーム機…いや、ベルト？」
なんとなく、箱状のアイテムは体に巻くようにできているように思ったユウキが、訝しげに自分の腰の前に当てる。
すると、アイテムの左側から金属の帯が射出され、ぐるりとユウキの背中を回って反対側に装着された。
ベルトとなったそれを不思議そうに見下ろし、ユウキは次にカセット型のアイテムのボタンを押してみた。
【マイティアクションX！】
マゼンタの光を放ったアイテムから聞き覚えのない音声が響いた瞬間。
ユウキの全身を、奇妙な鼓動が駆け抜けた。
ユウキの目が突如赤く光り、風もないのに彼女の前髪がふわりと浮き上がる。
周囲に電子的な波紋が広がると、同時にチョコレート色のブロックがいくつも現れ、あちこちに配置されていく。
未知の衝動に目を見開いたユウキは、やがてニヤリと口元に不敵な笑みを浮かべた。
「プレイヤーの運命は……オレが変える！　変身！」
【ガシャット！】

なぜかユウキは、それをどうやって使うのかを完全に理解していた。
カセットの持ち手を上にし、ベルトの左側にある二つの穴のうち右側に入れる。
すると、ユウキの周囲に色とりどりのキャラクターのセレクトメニューが現れ、ユウキはその一つを手のひらで押した。
【レッツゲーム！　メッチャゲーム！　ムッチャゲーム！　ワッチャネーム⁉？】
押されたメニューが回転しながら巨大化し、人形を写したスクリーンになると、それはユウキに向かって重なっていく。
ユウキの小さな体がスクリーンを通り抜けると、ユウキの全身が光に包まれ、新たな装甲が身に纏われる。
【Ｉ⊠ｍ　ａ　仮面ライダー！】
白く機械的な手足に、胸に備わるＨＰゲージ、そしてマゼンタカラーの逆立った髪を持つゴーグルの顔。
ゆるキャラのごとき奇妙な戦士が、どんと仁王立ちしてそこに現れていた。
「「「「……は？」」」」
ウィルスに侵されていたプレイヤーも、まだそうでないプレイヤーも、誰もが突然現れた場違いな存在に目を点にする。
キリトもキバオウもエギルも、戦闘中であることも忘れて、変わり果てたユウキを呆然と凝視している。
「…かわいい」
そんな中で唯一、頬を赤くして呟くアスナのことに、誰も気づかなかった。

―8―　I☒m　a　仮面ライダー！②

しんと静まり返ったフロアで、ユウキはキョロキョロと辺りを見渡す。

なにやら騒がしい音とともに、自分の体が何かに包まれた気がしたが、残念なことに手鏡もないいまは自分の姿を確認することもできない。

「…ん？　え⁉？　アレ⁉？　なっ、なんじゃこりゃあああああ⁉？」

ややあってから、自分の手や足元を見て、そして全身が奇妙な鎧？に包まれていることに気がつき、ユウキは絶叫した。

何かものすごいアイテムでも出てくるのかと思えば、全く予想しない展開で完全に平静を失っていた。

「ユウキ……お前なんだよ、その着ぐるみは」

「いや、オレにだって何が何だか……あ」

じとりと呆れた視線を向けてくるキリトに、ユウキは慌てて自分も予想外であったことを弁明する。

しかし詳しい話をする暇もなく、コボルトロードがユウキとキリトの方へと突っ込んできた。

「うおっ⁉？」

「あわわわわわ⁉？」

キリトはすぐさま跳びのき、ユウキは樽のような体型からは想像もつかない俊敏さで跳躍し、コボルトロードを躱す。

コボルトロードは標的をユウキに定めたのか、異様に膨れ上がった腕を槌のように振り回し、執拗に彼女を追い立て始めた。

「ひやっ⁉？　ほぁっ⁉？　わひゃあ⁉？」

狙われるユウキは、生身の時よりもはるかに機敏な動きで飛び回り、コボルトロードを翻弄する。

声こそ危なっかしい響きであったが、ユウキにコボルトロードの魔の手が届く気配は微塵も見られなかった。

「……あれ？　これイケる？」

逃げ回るだけだったユウキは、鎧が思った以上に動きやすいことに気づいて目を瞬かせる。
そして少しだけ覚悟を決めると、周囲の壁や突起物を足場にしてコボルトロードに挑みかかった。
「ほっ、はっ、とぅっ！」
先ほどのような、敵の攻撃を引きつけたりキャンセルさせたりするのではなく、向かってくる攻撃を紙一重でかわして反撃の蹴りを放つ。
その戦法は、彼女が戦い方のモデルにしている２Ｄアクションゲーム『マイティアクション』と全く同じものであった。
「どりゃあああ‼？」
空中に配置されたブロックを足場に勢いをつけると、ユウキは真下のコボルトロードの脳天を踏みつける。
べこっと一瞬平たくなったコボルトロードは、明らかにダメージを受けている反応を見せていた。
「やりぃ！」
手応えを感じたユウキが拳を突き上げると、それを見ていた他のプレイヤーたちの表情も徐々に明るさを取り戻していく。
なにが起こっているかはわからない。ただ、少なくともいい方向に向かっていることは感じ取れていた。
「す、すごい…」
「あいつ……なんか性格変わってないか？」
アスナはただ純粋にユウキの戦いに、キリトはいつの以上のハイテンションを見せるユウキに言葉をなくす。
立ち尽くす今の彼らに、戦いに介入する余裕はほぼなかった。
「いいじゃんいいじゃん！　このまま一気に決めちゃうぜぇ‼？」
【ガシャコンブレイカー！】
調子に乗り始めたユウキの周りに、突如光がともり新たなアイテムが現れる。
二つのボタンがついた、オモチャのようなハンマーを掴むと、ユウキは近くにあったブロックを叩き割った。

【高速化！】
　すると、砕けたブロックの中にあった、メダルのようなアイテムがユウキの体に吸い込まれ、ユウキのステータスの一部を一時的に上昇させた。
「ひゃっほう！　アイテムゲットだぜ！」
　ゲーム内のすばやさを意味するＡＧＩが急上昇し、ユウキはコボルトロードに向かって目にも留まらぬ疾走を開始する。
　凄まじい速度で迫ったユウキが手にしたハンマーで何度も殴られ、コボルトロードは衝撃で大きくよろめいた。
「おっとっと⁉？」
　一方、コボルトロードに攻撃を加えたタイミングで高速化の効果が切れたらしく、通常速度になったユウキがたたらを踏む。
　そこへ衝撃から立ち直ったコボルトロードが、ギラリと目を光らせて片腕を振り上げた。
「〔＃＜％〃？；％＊＋〃〔％⊠＊‼？」
「ヤバ……！」
　攻撃直後の硬直の瞬間を狙われ、ユウキは顔を引きつらせて目を見開く。
　しかしコボルトロードの拳が、無防備な少女を狙い放たれようとした時、それを横から弾く二人の剣士の姿があった。
「大丈夫…⁉？」
「一人で戦うなよ、ユウキ！」
　体にノイズを走らせたアスナとキリトが、目を丸くするユウキをかばうようにコボルトロードと相対する。
　再びコボルトロードが腕を振り上げた時、その腹に更に思い攻撃が加えられた。
「うぉおおおおおおおお！」
「わっ⁉？」
　横から割って入った巨漢のプレイヤーと盾役たちにより、コボルトロードが思い切り弾かれ、唸り声を上げながら後ずさる。
　驚きで声をあげるユウキを背にし、エギルは不敵な笑みを浮かべ

た。
「あんたらが奴をどうにかするまで、俺達が支える。ダメージディーラーにいつまでもタンクやられちゃ、立場ないからな」
ユウキがその言葉に呆然としていると、それまで聞こえていなかった関の声が耳に届いた。
目を向ければ、恐怖ですくみあがっていたプレイヤーたちの何人かが、再び剣を持ってコボルト達に立ち向かっていた。
「おらあ‼？　やったらんかいお前らぁ‼？」
「「うおおおおおおおおお‼？」」
キバオウを筆頭に、コボルトロードに攻撃が加えられ、ターゲットがユウキから彼らに替わる。
ユウキは頼もしさに笑みを浮かべ、ハンマーを構え直した。
「よし…！　じゃあいくよ‼？」
エギルや盾役達が押さえている間に、ユウキはもう一度コボルトロードに向かって駆け出した。
走るユウキの前に立ったキリトが、アニールブレードを跳躍したユウキの足場にし、思いっきり跳ね上げた。
「やあああああ‼？」
空中に飛び出したユウキが、真下のコボルトロードの脳天に向けて勢いよくハンマーを振り下ろす。
バコンッ！とコボルトロードの頭が凹み、苦悶の咆哮を放ちながら後ずさった。
「イェイ！」
スタッと華麗に着地したユウキが、背後のキリト達にVサインを見せる。
見事な着地であったが、どう見てもゆるキャラが愛嬌を振りまいているようにしか見えず、キリトは複雑な心境で笑みを返した。
「おい！　あれ見ろ！」
その時、沈黙したコボルトロードを監視していたプレイヤーの一人が、ボスに起きた異変に声をあげる。
コボルトロードの全身に発生していた腫瘍が形を変えて、青い仮装

のようなものを形成し始めたのだ。
そして現れたシルエットに、キリトは大きく目を見開いて驚愕をあらわにした。
「…あれは、まさかソルティ伯爵…⁉？」
青く染まった体に、黒いハットとマントを纏ったその格好は、キリトが現実世界で何度か見たことのあるキャラクターのもの。
まるでファンタジーのキャラクターがゲームのキャラクターの装いをしているかのような違和感が、キリト達に戸惑いを抱かせた。
「あなた、あれを知ってるの⁉？」
「あ、ああ…マイティアクションXに出てくるボスキャラだ……ってなんで別のゲームのキャラのコスプレしてるんだよ、あのボスキャラは⁉？」
ゲームに詳しくないアスナが問いかけるが、キリトにもなぜ敵があのような格好になったのか検討もつかない。
絶句するプレイヤー達に向けて、豹変したコボルトロードは、何処と無くナメクジに似た目を向けて口元を歪めた。
『レベル1のお前など、相手にもならん…！』
「⁉？　喋った…⁉？」
単なる敵キャラでしかないはずのコボルトロード…否、ソルティ伯爵が意思を持っているかのように口を聞いたことで、プレイヤー達はより一層混乱する。
そんな彼らにソルティ伯爵は、奇妙な左腕の籠手を構えて嘲笑の声を上げた。
『フフフフ…』
「ふぅ～ん…なんだかよくわかんないけど、あいつを倒せば万事解決しそうだね。よし…じゃあ本気出すか！」
明らかに敵が強化されたことにも構わず、ユウキは不敵な態度を崩さない。
そして彼女は、ビシッと左腕を斜め上に向け、右手でベルトのレバーをつかみ、反対側へと勢いよく倒した。
その直後、ユウキはさらなる変身をその場にいた全員に見せつけ

た。
「大、変、身！」
【ガッチャーン！　レベルアップ！】
最初の変身の時と少し異なるスクリーンが出現し、ユウキの体と重なる。
するとユウキが力強く跳躍し、ブロックを足場にしながら宙に舞うと、纏っていた装甲が弾け飛んだ。
【マイティジャンプ！　マイティキック！　マイティ・マイティアクションX‼？】
重い装甲を脱ぎ捨てたユウキが、くるくると宙を舞って着地する。
マゼンタカラーのインナーに、ＨＰゲージとボタンを備えた胸当とメカニカルな四肢のアーマー。
黒いラインの入った腰布を翻し、ユウキは右手を胸の前に、左手を後ろに伸ばして膝をつく。
そして、アニメチックな目の入ったゴーグルを光らせ、顔をあげたユウキが片手を掲げて立ち上がった。
「ノーコンティニューで……クリアしてやるぜ！」
勇ましく宣言したその姿は、まさに彼女が戦いのお手本としていたアクションゲームのキャラクター、マイティに酷似していた。
『しょっぱいことをしてくれる…！』
身軽になったユウキを目の当たりにし、ソルティ伯爵は片手を掲げる。すると、あたりで他のプレイヤー達を相手にしていたコボルト達がユウキの方に顔を向けた。
腫瘍に侵されていたコボルト達は、その顔をオレンジ色の気味の悪い形状に変えると、一斉にユウキに向かってなだれ込んで行った。
『フハハハハ‼？』
嘲笑の声をあげるソルティ伯爵を睨みつけ、ユウキはもう一度ハンマーを構える。
そして向かってくるコボルト達を、片っ端から殴り倒していった。
「どりゃあああ‼？」
他のプレイヤーには目もくれず、ユウキを一番の脅威と認めた彼ら

は、おびただしい数でユウキに襲いかかる。
しかしユウキはそれを物ともせず、全身走行時よりも格段に上がった機動力で、コボルト達を圧倒していった。
【ジャ・キーン！】
「いっくぜぇ！」
ユウキはハンマーに備わったボタンの片方を押し、ハンマーから刃を突出させる。
一振りの剣へと形を変えた得物で、ユウキは迫り来るコボルト達を次から次へと薙ぎ倒していった。
「やあああ‼？」
最後の一体を斬り捨てると、コボルト達はバタバタと倒れこみ、炎を噴き上げて爆散していった。
ポリゴンのかけらさえも消滅し、跡形もなくなったところで、怒り心頭といった様子のソルティ伯爵が駆け出した。
『ぐぬぅぅぅ…！　おのれ！』
ソルティ伯爵の籠手が雷電を纏い、ユウキを狙って突き出される。
ユウキはまるで攻撃を予測していたように軽々とそれを躱し、反対に懐に入って巨体の腹を思い切り斬りつけた。
「せいっ！」
『ぐぬぅっ！』
ソルティ伯爵は続けて何度もユウキに雷電を浴びせかけようとするが、ユウキは縦横無尽に周囲を飛び回り、容易にソルティ伯爵を近づかせない。
ソルティ伯爵はまともな一撃一つ入れられず、ユウキから食らった斬撃により大きく後退させられたのだった。
『ぐはぁっ‼？』
「さぁ、フィニッシュは必殺技で決まりだ！」
【ガシャット！　キメワザ！】
膝をつくソルティ伯爵をひと睨みし、ユウキはベルトのカセットを引き抜くとフッと息を吹きかける。
それをベルトの右側に装着されたスロットに差し込むと、ユウキの

右脚にアニメチックな電流のエフェクトが発生し始めた。
【マイティ・クリティカルストライク!!?】
高密度のエネルギーを纏い、ユウキはグリグリと足首を回して準備を整える。
トントンと軽く跳ねると、ユウキは不敵な笑みを浮かべたまま、力強く空中に飛び出した。
「いやあああああああああ!!?」
立ち上がろうともがくソルティ伯爵に、ユウキの強烈な飛び蹴りが炸裂する。
一発だけではなく、二発三発と猛烈な勢いで蹴りを食らわされ、ソルティ伯爵は火花を散らしながらそれを受け止めるばかりであった。
『ぐあああああああああああ!!?』
【会心の一発ぅ!!?】
断末魔の叫びをあげたソルティ伯爵が、次の瞬間爆炎に包まれて体を四散させる。
その姿が消えると、後に残されたのは元の姿に戻ったコボルトロードが一体のみであった。
「キリト！　ラスト一発、叩きこめぇ!!?」
着地したユウキに呼ばれ、目を奪われていたキリトはハッと我に返る。
コボルトロードは、フロアボスはまだ倒されてはいない。まだ第一層の攻略は、ディアベルの悲願は果たされてはいないのだ。
「う……ぅおおおおおお!!?」
覚悟を決め、雄叫びをあげたキリトが剣を振り上げ、硬直状態にあるコボルトロードに向かって突撃を開始する。
振るわれた斬撃が、コボルトロードの体に深い裂傷のエフェクトを刻むと、コボルトロードは一瞬その体を膨れ上がらせ、ポリゴンのかけらとなって砕け散った。
【ＧＡＭＥ　ＣＬＥＡＲ】
【Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ】
そして、フロアボスの最後の悲鳴が響き渡る迷宮最奥に、二つのア

ナウンスが表示されたのだった。

―9― I☒m a 仮面ライダー！③

オレンジ色の腫瘍に苦しんでいたプレイヤー達は、それがみるみるうちに消えて行くと困惑の表情を浮かべる。
あまりにも唐突に苦痛から解放されたために、理解が追いついていないようだ。
「な…治っ…た……？」
一人が自分の体を確かめ、なんの異変もない元の状態に戻ったことを知ると、ようやく全員が歓声を上げ始めた。
「う……うおぉぉぉぉぉ‼？」
「勝った‼？　勝ったんだぁ‼？」
「やった！　やったぁぁぁぁ‼？」
その場にいたプレイヤー達は皆、隣に立つものと抱き合ったり手を叩いたりし、生還できた喜びを分かち合う。
他者との距離感などもはや気にしない、思い思いにはしゃぎまくっていた。
【ガッシューン】
ユウキがベルトからカセットを引き抜くと、鎧が消え去って元の姿に戻る。
小さく息をつくユウキの元に、若干疲労した様子のキリトが近寄ってきた。
「お疲れ様」
「あぁ……ユウキもな」
互いの無事を確認しあい、ユウキとキリトは互いに拳をコツンとぶつける。
わけも分からない状況に巻き込まれはしたものの、今はどうにか解決することができたことを喜びたかった。
「しかし……なんだったんだあれ？」
「なんなんだろうね……」
しかしやはり、何が起こっていたのかは気になり、キリトは訝しげに腕を組んで考え込んでしまう。

ユウキもメニュー欄を閲覧し、先ほどまで使っていた二つのアイテムを確認してみた。
「一応いつでも使えるようにはなってるみたいだけど、特に詳しい表記があるわけでもないし、謎のまんまだね」
「そうか…まぁ、でも俺たちは勝った。今はそれでいいだろう」
「うん……そうだね」
フロアボスの豹変や謎の状態異常と、色々と引っかかるものはあるが、とにかく乗り切ることはできたのだ。
今後はさらなる注意が必要なのだと気を改めていると、二人の元へアスナが近づいて来た。
「あなたたち、大丈夫だった？」
「ああ…あんたこそ大丈夫か？　見ていてヒヤヒヤしてたぜ」
「余計なお世話よ。まったく…」
「あはははは…」
あいかわらずのアスナの固さにユウキが苦笑していると、他のプレイヤーも何人かぞろぞろと近づいてくる。
その中のエギルが、いかつい顔を破顔させて二人の英雄をたたえた。
「見事な指揮、それ以上に見事な剣技だった。Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ！　この勝利はあんたらのものだ！」
エギルや他のプレイヤー達の賞賛の眼差しに、ユウキもキリトも思わず顔を赤らめて照れる。
戦いが一つ収束した、穏やかな空気が流れる、と思われたが。
「なんでだよ‼？」
突如として響き渡った、悲鳴のような怒号がその空気を粉々に破壊した。
何事かと思い振り返ってみれば、声をあげたのはフロアボスと相対していた班の、ディアベルの指揮下のプレイヤーの一人だった。
「なんで……ディアベルさんを見殺しにした奴を讃えてんだよ⁉？」
彼の放った言葉に、ユウキやアスナは困惑の表情を浮かべるが、キリトは一瞬で顔色を青く染める。

黙り込んだキリトに代わって、ユウキが戸惑いながら尋ねた。
「見殺し……？」
「だってそうじゃないか‼？　お前はボスの使うスキルを知ってたじゃないか‼？　その情報を前もって伝えてればディアベルさんは死なずに済んだんだ‼？」
興奮し、半ば我を失いかけているプレイヤーは、続いてユウキをキッと睨みつける。
得体の知れないアイテムを使い、プレイヤー達を苦しめたバグったフロアボスを、一方的に蹂躙したプレイヤーを。
「あの変なアイテムも、あんなのがあるのに出し渋ってただろ⁉？　自分たちだけ助かろうって……そういうことだったんだろう⁉？」
いまの彼では無理かもしれないが、まともな思考であればその言葉がどんなに無茶なことかはわかるろう。
だが他のプレイヤー達の中にも多少なりとも同じような考えのものがいたのか、徐々にキリト達に険しい視線が集まっていく。
「お、俺知ってる‼？　こいつは元βテスターだ‼？　だからボスのスキルや、ウマイ狩り場やクエストとか知ってたんだ！　知ってて隠してたんだ‼？」
「待ってください！　配布されている本の情報はβ時代のものを参考にしているわ。もし彼が元テスターならその知識は本と同じなはずよ⁉？　それに本には製品版では変更点があるかもしれないって注意書きが書いてあったじゃない！　それに…実際に想定外のことも起こったわ！」
「そ、それは……」
いまにも飛びかかってきそうな彼をなだめるつもりで、アスナは正論で返す。
このままキリトが責められ続ければ、今後も彼は理不尽な罵倒に晒され続けることになる。
だがその想いは、激昂し正しい判断を失った彼には届かなかった。
「あの攻略本が嘘だったんだ。βテスターがただで情報を流すなんてありえなかったんだ‼？」

この場にはいないアルゴのことまでも罵り始め、ユウキが思わず一歩踏み出しかける。
だが、プレイヤーはむしろその視線を真っ向から否定するように、ユウキに矛先を向けた。
「お前のさっきのアイテムだって、そのβテスターに渡されたものだろ⁉？　自分たちだけテスターに贔屓されて、確実に生き残れるように媚び売ってたんだろ⁉？　じゃなきゃあんな化け物、簡単に倒せるわけないじゃないか⁉？」
「なっ…ボ、ボクだってこんなアイテムのことは知らなくて……！」
根も葉もない、勝手な考えで責められ、ユウキも懸命に反論を続ける。
しかしユウキやキリトに向けられる疑惑の目はみるみるうちに濃く強くなっていき、この場のプレイヤーのほとんどが敵になっているようにも感じられてきた。
「お前らはグルになって……俺たちを騙して、ラストアタックをとるためだけにディアベルさんを見殺しにしたんだ⁉？」
理不尽に追い詰められ、徐々に弱々しくなっていくユウキに、プレイヤーは畳み掛けるように言い放った。
「お前らがディアベルさんを殺したんだ⁉？」
ドクン、と。
それを耳にしたユウキの鼓動が激しく打たれる。
胸の奥底、ユウキという存在を構成する核に深く刻まれた記憶の一部が、黒いシミのように蘇ってくる。
配置された無数の機械、真っ白な照明、あちこちから伸びるケーブル、そしてベッドの上に横たわる数人の人影。
それが……分厚いガラスの向こう側に見える。
ーーーボク、一人が。
薄いかさぶたでふさがった傷跡が、ぐちゅりと再び血をにじませるような錯覚を感じる。
呆然と立ち尽くすユウキの目が、虚ろな闇のように光を失いかけたその時だった。

「ククッ……ははははははははは!?」
背後から聞こえてきた、バカにするような響きの笑い声に、ユウキはハッと我に返る。
戸惑い気味に振り向いたユウキは、そしてアスナやエギルは、呆れたような冷たい目で見つめてくるキリトの姿に言葉を失った。
「冗談だろ？　そいつらを贔屓してるって？　正真正銘のビギナーにそんなことするわけないだろ」
別人のような、明らかに蔑み挑発する響きで、キリトは暴言を吐き続けたプレイヤーを睥睨する。
その目は次に、目を見開くユウキたちにも向けられた。
「困るなァ、ビギナーさん。そう懐かれたら仲間だと思われちゃうだろ？」
「え……？」
「これだから世間知らずのユートーセーは。自分が利用されているなんて、これっぽっちも思いやしない」
くつくつと腹立たしさを感じさせる含み笑いで、キリトはユウキを押しのけてプレイヤーたちの前に出た。
「お前らもバカばっかだよな。たかがアイテム一つ足りないだけで大騒ぎしやがって……そんなんでこの先、生き残れると本気で思っているのか？」
ヘラヘラと笑うキリトにプレイヤーたちはぽかんと呆けていたが、やがて顔を真っ赤にして怒りをあらわにしていく。
恐ろしい勢いで敵意を集めながら、キリトはなおもあざ笑うような口調を貫いた。
「元βテスターだって？　俺をあんな素人連中と一緒にしないでくれないか？」
「な、なんだと……」
「考えてみろ？　ＳＡＯのクローズド・βテストはとんでもない倍率の抽選だったんだ。受かった１０００人のうち、何人本物のゲーマーがいたと思う？　ほとんどはレベリングも知らない初心者だったよ、今のあんたらの方がまだマシさ！　……だが、俺はあんな奴等とは違

う……」
伏せられた顔からわずかに見える口元が、ニヤリと三日月のように歪められる。
それは調子に乗った愚者の虚栄ではなく、確固たる勝機に基づいた余裕の笑みだった。
「俺はβテスト中、他の誰も到達できない層まで登った！　ボスの刀スキルを知ってたのは、上の層で散々そいつらと戦ったからだ‼？　他にも色々知ってるぜ？　情報屋なんか問題にならないくらいな‼？」
自信満々にキリトが口にした事実に、プレイヤーたちは驚愕で目を見開き、口を開けて固まってしまう。
多くのプレイヤーが恨んでいたβテスターさえも歯牙にも掛けない、本物のズル賢い卑怯者の宣言だった。
「な……なんだよそれ……そんなのただのチートだ‼？」
一人が口にすると、他のプレイヤーたちも口々に蔑みの言葉をこぼしていく。
明確な敵意を宿したそれらの声は、嵐が運ぶ風のように不気味な響きを迷宮内にもたらしていった。
「最低のチート野郎だ・・・・・・」
「ベータテスターどころじゃねえ」
「ベータ上がりのチーターなんて最悪じゃねぇか……」
ところどころから聞こえるささやきが重なり、二つの単語が一つにまとまっていく。
そうして出来上がった『ビーター』という単語に、キリトはやがて満足げな冷笑を浮かべた。
「ビーターか……いいなそれ。そうだ、俺はビーターだ！　これからは元テスター如きと一緒にしないでくれ」
キリトはフンと鼻で笑うと、メニューを開いて今回のラストアタックの報酬であるアイテム、真っ黒なコートを身に纏った。
そして、プレイヤーたちに背を向けて歩き始めたキリトに、プレイヤーの一人が慌てて待ったをかけた。

「ど、どこに行く気だ⁉？」
「二層の転移門は俺が有効化アクティベートしておいてやる。主街区まで少し歩く事になるから、初見のＭｏｂに殺される覚悟のある奴はついてこい」
　度胸を試すようなキリトに、プレイヤーは頭に血を昇らせるが、今回の惨劇を思い出してつい二の足を踏んでしまう。
　誰もついてこないことに、呆れたため息をついたキリトがたった一人で立ち去っていく姿を、ユウキは不機嫌そうな目で見送っていた。
「……キリトのバカ」
　小さく呟いたユウキは、やれやれと肩をすくめるとムン、と眉間にしわを寄せて歩き出した。
　その小さな背中を見送っていたエギルが、ユウキと同じような表情を浮かべるアスナに耳打ちをした。
「アレが本心じゃないことくらい――――……」
「言われなくても、わかってます」
「じゃあ、アイツに伝言。頼めるよな？」
　アスナはやや驚きの表情を見せ、すぐに破顔してエギルの頼みを受け入れる。
　すぐにユウキの後を追おうとした時、アスナを呼び止めるまた別の声があった。
「……ちょい待ちぃ」
「キバオウ……」
　振り抜いたアスナは、攻略中からキリトに対して辛辣な態度をとっていたキバオウに疑うような目を向ける。
　しかしキバオウは、居心地悪そうに頭をかくと、意を決したようにアスナを、そしてユウキを見つめた。
「ワイは……伝言。ワイからも……頼むわ」

―10― I☒m a 仮面ライダー!・④

第二階層最初のエリアは、夕暮れに照らされて美しく輝く草原が広がっていた。
高く伸びた木々も岩場もない、ただただ平原が広がるその場所は、キリトの心境を表しているかのように静かだった。
「キリト!」
だがそこに、聞こえるはずのない声が聞こえてくる。
まさか、と目を見開いたキリトは、不満げに腰に手を当てて睨んでくるユウキの姿に、思わずため息をついていた。
「…来るなって、言ったのに」
「言ってないわよ。死ぬ覚悟があるなら来い、って言ったんじゃない」
「…そうだったか、ごめん」
続いて顔を見せたアスナに言われ、キリトは困ったように頬をかく。
その態度に、先ほどのような最低な人間の面影は微塵も感じられない。完全に、元のキリトに戻っていた。
「ボクらは伝言を伝えに来たんだ。二人分ね」
「伝言?」
「エギルさんとキバオウからね。エギルさんは『また一緒にボス戦をやろう』って。キバオウさんは『今回は助けてもらたけど、ワイはやっぱジブンのこと認められん。ワイはワイのやり方でクリアを目指す』…ですって」
キリトは言葉を失い、伝言を預かってくれた二人を凝視する。
エギルが気を遣ってくれたのはもちろん嬉しいが、意外だったのはキバオウもキリトの意図に気づいていたことだ。
言葉こそぶっきらぼうだが、彼なりの励ましに心が温かくなった。
「…そっか。伝えてくれて、ありがとう」
遠い目で立ち尽くすキリトの儚さに、ユウキは深いため息をつく。
相談も何もせずに、勝手に損な役回りを引き受けた相棒に、ユウキは思わず呆れた口調でつぶやいていた。

「君は、嘘つきだよね」
キリトは訝しげに、半目で睨んでくるユウキを見つめ返す。
ユウキは腰に手を当て、肩をすくめてキリトへの不満を表していた。
「何も悪くないのに悪ぶって、みんなの嫌悪を自分一人に集めて、他のβテスターに向けられないようにして…平気で他人を蹴落とすわる～いプレイヤーを作り出した」
スケープゴート。
悪意を別の箇所に向けるために用意された生贄、新たな敵。
自分がそうなることで、他のβテスターが苦しまないように選択したキリトを、ユウキは厳しい目で咎めていた。
「……そして、苦しいくせに自分で自分に嘘ついて、誰にも心配かけないようにしてる」
もしユウキがβテスターだったとしても、そんな解決方法は望まない。
アルゴもディアベルもきっと望むことはないだろうと、ユウキは不器用なキリトを見て困ったように苦笑を浮かべていた。
「そういう生き方はさ、すごく辛いし苦しいよ」
「……わかってる。覚悟はしてるよ」
「わかってない。わかってないからそういう道を選んじゃったんだよ、君は」
すでに苦しげに視線をそらすキリトだが、ユウキはその覚悟を否定する。
ただの普通の少年に、周りの人間から悪意を持たれ続ける苦しみを背負えるだろうか。ユウキはとてもそうは思えなかった。
「苦しみとか悲しみとか、全部自分一人でまとめて抱え込もうとしたらね、いつか絶対パンクしちゃうよ。…ボクらにぐらい、少しだけでも重荷を背負わせてくれてもいいんじゃないかな？」
目を見開き、ユウキを凝視するキリトに、ユウキだけでなくアスナも困り顔で微笑みを見せる。
少なくともここに、キリトの敵は一人もいなかった。

「前に言ってたじゃない？　…また一緒に冒険しようって」
「……ああ、そう、だな。そう……だったな」
最初に出会い、そして無捨てようとした時のセリフをもう一度聞かされ、キリトは熱くなる目を隠すように目をそらす。
涙がこぼれそうになるのを必死に耐え、キリトはどうにか絞り出すように告げる。
「じゃあな……お前たちも、生き残れるように頑張れ」
「うん！」
「またどこかで……会いましょう」
望む答えを聞けたことで、ユウキは嬉しそうに、アスナは安堵したように笑みを浮かべる。
キリトはわずかに肩を震わせ、次なる街に向かって歩き出していった。
「……行っちゃった」
「……そうね」
小さくなっていく黒衣の少年の背中を見送り、ユウキとアスナは少し寂しげに言葉を交わす。
また会おうという言葉が、どれほど頼りになるかはわからない。しかしそれでも、一度くらいはまた顔を合わせたいと思っていた。
「…ちょっと意外だったわ」
「ん？」
「あなたのことよ」
さて自分はどうしようかと考えていたユウキは、不意にアスナにそう言われて首をかしげる。
やや間抜けな表情で固まっている彼女に吹き出しながら、アスナは先ほどの戦闘中のことを思い出していた。
「あなたって、ゲームでノってくると性格変わるのね。驚いたわ。急に自分のこと『俺』なんて呼び出すんだもの」
「…へ？」
「下に戻るわ。……またいつか会いましょう、ユウキ」
指摘された事実に、ユウキはぽかんとした様子で立ち尽くす。

そんなユウキに気づかず、アスナは軽く手を振ると一旦下の階層で出直すために、ユウキに背を向けて去っていってしまった。
残されたユウキはアスナに言われたことを考え、戦闘中のことを思い出そうとする。
しかしすぐに諦め、首を傾げながら自分のメニューを再び確認した。
「とりあえずはこれで、最初の関門をクリア……ってわけにもいかないよね」
ユウキの目に映っているのは、メニュー欄の中で異様な存在感を放つ二つのアイテム。
そして脳裏に蘇るのは、βテスターでさえ見覚えのない、理不尽とも思えるフロアボスの変貌と戦闘パターンの変化。
「豹変した敵…キリトも知らないゲーム展開…世界観に合わないアイテム……わかんないことだらけで正直理解ができないけど、コイツとは…長い付き合いになりそうだな」
アイテムを見つめるユウキの目が、厳しく細められる。
敵は未知、状況は先を読めず、次の瞬間にも何か事件が起こるかもしれない。
だがそれでも、ユウキは現実から逃げるという選択肢を選ぶつもりは、毛頭なかった。
「……でもこれ、プレゼントって出てたけど、一体誰から送られてきた物なんだろうなぁ？」
ユウキのふとした疑問に答える者は、まだどこにもいなかった。

―11―　ＢＬＡＣＫ　ＣＡＴと孤独の剣士

「我ら、月夜の黒猫団に乾杯！」
「乾杯‼？」
カンッ、と音を立て、五つの盃がぶつけられる。
示し合わせたように、同じタイミングで五人の声が重なり、続いて笑い声が響く。
「そして、命の恩人キリトさんに……乾杯！」
「乾杯‼？」
「かんぱーい！」
「か、乾杯…」
背の高い少年の音頭で、五人とは別の二人が紹介され、また歓迎の声が響く。
それに対し、一人はやや遠慮がちに、もう一人は元気よく杯を掲げて声を上げ、歓迎を受け取った。
彼らは少数ギルド『月夜の黒猫団』。
同じサークルで仲良くなった五人で、一緒にこのデスゲームに参加してしまい、チームとして活動しているのである。
そこになぜ別の二人、キリトとユウキが参加しているのか。
それはすなわち、レベリング中に窮地に陥った『月夜の黒猫団』に、加勢に入ったからだ。
「ありがとう……凄い怖かったから……助けに来てくれた時、凄くうれしかった……」
「い、いや……」
「気にしないでよ。あのままほっといたら後味悪くなってただろうからさ」
どもるキリトに代わり、ユウキが親しげに話しかける。
妙に居心地悪そうに目を逸らす彼をフォローしつつ、ユウキは好ましい雰囲気の黒猫団との会話を楽しんでいた。
「あの…キリトさん、ユウキさん。失礼ですけど……Ｌｖはいくつくらいですか？」

「に、にじゅう…」
「４４だよ」
「……４５だ」
「はぁ～……！　やっぱり高レベルになると格が違うってわかるんですねぇ」
「…正直言えば、あまり褒められた立場じゃないんだがな」
キリトの呟きに、ユウキもサッと目を知らして苦笑をこぼした。
高レベルプレイヤーが、レベルの低いモンスターのポップする場所、いわば初心者のエリアに居座ることは、ゲームの使用上敬遠される行為である。
ユウキとキリトが黒猫団の近くを通りかかった理由もこれで、善意による行為ではないことから、二人とも罰が悪い気持ちになっているのだ。
「…ケイタ、敬語はやめにしよう。それに、ソロは常に一匹を狙っての狩りだから効率は悪い」
「キリトってば誘ってもなかなか頷いてくれなくてさ～。ほんっと根っからのボッチなんだから」
「……やめろ」
「そ、そうか…じゃあ、タメ口でいいかな？」
話題を変えると、黒猫団のリーダーであるケイタは素直に頷き、口調を変えて話しかける。
罪悪感から気を遣う関係が続かずに済んで、キリトはホッと安堵の息をついた。
「本当は勧誘したかったんだけどそこまで差があるんじゃな……」
「勧誘？　ギルドに？」
「ああ…」
聞こえた呟きの内容が気になり、ユウキが訝しげにケイタを見つめる。
やや難しい表情で腕を組んだケイタは、他の黒猫団のメンバー、ダッカー、テツオ、ササマルに目を向けた。
「前衛が出来るのはメイス使いのテツオだけでさぁ。こいつ、サチっ

て言うんだけど……盾持ちの片手剣士に転向してもらおうと思ってるんだ。でも勝手が解らないみたいでさ。ちょっとコーチしてやってほしかったんだ」
「なによ、人を味噌っかすみたいに」
「ん？」
「だって、いきなり前に出て戦えなんて……おっかないよ……」
唇を尖らせ、不安気に目を逸らすサチ。
そうしなければならないとわかっているが、元より戦う事に恐怖感があるのだろう。プレッシャーに潰されかけているような印象を受ける。
「うちのギルド、現実では皆同じ高校のパソコン研究会のメンバーなんだよね」
「もともと仲良しだったわけか…いいね、そういうの」
自分の背負うとある事情から、長年の付き合いという者が羨ましく、ユウキはケイタ達にきらきらと輝く眼差しを向ける。
切とも似たような目を向け、しかしすぐに暗い表情で目を逸らした。
「悪い……ギルドには入れない…。でも、手伝いくらいならしてもかまわないけど……」
「そうか……じゃあ、お願いするよ」
必要以上に迫ることなく、ケイタは引き下がる。
そして五人と二人は、さっそく自分達の実力を引き上げようと、フィールドへと躍り出るのであった。

そして、始まったレベリングとサチの戦闘訓練だったのだが。
それは、お世辞にも巧いとは言えず、そして今後巧くなるとも思えないものであった。
「サチ！　目を閉じちゃダメだよ！　仲間に当たっちゃったらどうするの⁉？」
「ご、ごめんなさいっ」
カマキリの姿をした敵を前に、サチは槍と盾を握りしめたまま後退

る。怯えて身を縮めた様は、甲羅に首を引っ込める亀のようだ。
それをみたキリトは思わず、思った以上に酷いという感想を抱いてしまった。
その後も何度か戦闘を繰り返すものの、サチの恐怖感は拭いきれないまま。
着々とレベルを上げていく中も、サチが自ら前に出る機会は、一度も訪れずに終わってしまった。

「なぁ、キリト。僕らと攻略組なにが違うんだろう？」
何度かの戦闘を終え、休憩である草原の岩に腰を下ろしたケイタが、キリトにそう尋ねる。
問われたキリトは考えこみ、自分なりの考えを口にする。
「そうだな……情報力の差かな。あいつらは効率のいい狩り場とか独占してるから……」
それは、自分にも当てはまる事なのだが。
そんな罪悪感を胸の奥に隠し、まだまだ前線には追い付けないであろうビギナー達にレクチャーを続ける。
するとそこで、ケイタが腕を組みながら首を傾げた。
「うーん、それもあるだろうけど……僕は意志の力だと思うんだ」
「意志？」
「仲間を守り、生きて全プレイヤーを助け出そうっていう意志の力みたいなさ。もちろん仲間の命は大事だけど、いつか僕らも攻略組の仲間入りしたいんだ」
「そうか……あぁ、きっとそうだな」
熱血と言おうか、根性論と言おうか。根拠のない理想で、大きな夢を抱いているケイタに、キリトは苦笑交じりに応える。
「ん～…ボク、思うんだけどさぁ」
そこで不意に、ユウキが半目になりながら振り向く。
彼女の視線の先にいたサチは、びくりと肩を震わせ、首を竦めてしまう。
今日この日の戦闘で、全く役に立てなかった罪悪感からか、ユウキ

に叱られるのを恐れているようだ。
「何だ？」
「やっぱサチ、前衛向いてないと思うんだよ。技術的にとか経験的にとかいう問題じゃなく」
ズバッ、と言いづらくて黙っていた一言を平然と告げたユウキに、キリトが思わず頬を引きつらせる。
対するサチはぐうの音も出せず項垂れ、しかしおずおずと居心地の悪そうな目を向けた。
「で、でも、私がやらないとみんなが困っちゃうし…」
「向いてるってことできるってことは違うよ。それに戦いへの意志だって、自分自身が自由にするべきものだよ」
ずいっ、と前のめりになり、サチの目を覗き込むユウキ。
その目に言い表しがたい圧を感じ、息を呑み黙り込むサチに、ユウキは彼女を心から想う眼差しを向け、語った。
「……誰かのために戦うんじゃない、自分のために戦わなきゃ」
有無を言わさない、強く響く言葉に、サチだけではなくケイタ達も黙り込んでしまう。
心、と静かになってしまった彼らに冷や汗を垂らし、キリトが場の空気を換えようと、その場にわざと音を立てて立ち上がる。
「じゃあ、この辺で終わりにしよう。　明日もあるんだし」
「そうだな……みんな、帰ろうか」
キリトに促され、ケイタが若干ありがたそうに応える。
未だに不安気な表情を浮かべるサチ、難しい顔で視線を逸らしている月夜の黒猫団の面々をそのままに。
デスゲームからの脱出を願う少年少女達は、街へ戻っていった。
☒
その夜、とある階層にて。
数体の狼が他のモンスターと戦う、赤い甲冑の一団がいた。
赤いバンダナを頭に巻いた、野武士面の男と、彼の仲間らしき侍の装束の五人。
幾度かの剣戟の後、狼達を青いポリゴンの欠片に変えた彼らは、刀

を鞘に納めてフッと息をつく。
その時、赤いバンダナの男がふと、近くで見覚えのある二人が戦っていることに気付いた。
「おう、キリの字、ユウキ。　久しぶりだなァ」
「クライン！　いつぶりかな？」
丁度相手をポリゴンの欠片に変え、剣を鞘に収めたユウキが、バンダナの男――クラインに気付き、パッと顔を輝かせて走り寄る。
その傍にいたキリトもクラインに気付き、こちらは気まずげな様子で顔をしかめた。
「…久しぶりだな。　レベリングか？」
「おうよ。　近い内オレのギルドも、攻略組に仲間入りするからなァ。
やっとキリの字たちに追いついたぜぇ」
「そうか……じゃあ、頑張れよ」
ぐっ、と力瘤を作る仕草を見せるクラインに、キリトは目を逸らしたまま答える。
そのまま一度も目を合わせずに去っていく彼に、クラインは呆れた様子で、クラインの仲間達は胡乱気な視線を送る。
「あんにゃろー、まぁ～だ気にしてんのか」
ため息交じりに呟き、目を細めるクライン。
久しぶりに会い、お互いに生き残っていたことを知れたというのに、すごすごと勝手に逃げられてしまった。
勝手に壁を作られて、流石に一言二言言いたい気分になっていた。
「…む～」
彼と同じように、ユウキもまた頬を膨らませ、去っていくキリトに不満げな眼差しを送るのだった。
「……って感じでさぁ、ずーっと気にしてるみたいなんだよね。キリトってば、ほっ！」
ギャリン！と二振りの剣が互いに噛みつき、薄暗い建物の中で火花を散らす。
片方は白いレイピア、片方は黒い細剣。

栗色の髪を揺らすアスナと、暗い夜空の色の髪を揺らしてユウキが、最近日課となっているスパーリングを行っていた。
「ふっ……！　あの状況なら、そんな決断に至ってもしょうがなかったように思えるけど…はっ！　一度は一緒に行こうって誘ったんでしょう？」
「そーなんだけどさぁ？　結局は置いていったのを、自分は人を見捨てた最低野郎だーって悔やんでるみたいでさぁ…やっ！」
「難しい人ね……気持ちは、ふっ！　わからないでもないけどっ！」
「キー坊はナー、そう言うコミュ力が悲しいほどにないからナー」
二人の剣戟を眺め、そう呆れた声を漏らすのは、偶然近くに寄ったという鼠のアルゴ。
かれこれ数分は続いている戦いに、彼女は時折気の抜けた感嘆の声を上げ、双方に応援の声を送っていた。
「やぁっ！」
「うっ……！」
やがて、アスナとユウキのスパーリングが決着する。
ユウキの剣がアスナの剣を弾き、体勢を崩した彼女の喉元に剣の切先を突き付ける。それを見て、アスナはがっくりと肩を落とした。
「参りました…」
「いぇい！」
「…やっぱり強いネ、ユウちゃんは。やっぱ現実世界でも何かスポーツやってたのカ？」
「ん～ん、むしろ結構長い間入院してたぐらいだよ。ゲームぐらいしかやることなくってさ～」
それぞれで剣を鞘に納め、健闘を称える。
いつの頃からか初めて、高齢になりつつある県の鍛錬で勝ち越しているユウキは、アルゴに誇らしげに胸を張る。
「…それで？」
「ん？」
「あなた達のこれからよ」
心地よい疲労に浸りつつ、息をついていたアスナは、不意にユウキ

に問いかける。
何のことか、と首を傾げる少女に呆れつつ、アスナはじろりと咎めるような視線を向ける。
「ずっとそれぞれソロのまま行くつもりなの？　流石にそれは限界があるってわかってるでしょ？」
「うあー…痛いところを」
第一層の攻略から幾日、プレイヤー達はそれぞれ力をつけ、いくつかギルドが発足し始めた。
アスナも〝血盟騎士団〟という名のギルドに名を連ね、副団長として日々、攻略のために精力的に活動している。
故に、いつまでも二人だけで組み、時に一人だけでフィールドに出るユウキとキリトの事を心配していた。
「そりゃあさ？　ボクもいつかはギルドに入ったり仲間を作ったりはしないととは思うんだよ？　キリトは……まぁ、人見知りだから時間かかるだろうけど」
「…そうね」
「でもボクは、ちょっと事情が変わってきちゃうからさ」
苦笑交じりに頭を掻くユウキは、よくつるんでいる少年の事を思い出し。
そして、自分のアイテムボックスに眠っているある者の事を思い出し、遠い目で虚空を見やる。
アスナとアルゴも、少年の難儀さと目の前の少女が持つ不安の種の事を思い、何とも言えない表情になった。
「ああ、例のアレかイ？」
「そうだったわね……ごめんなさい、余計なこと聞いて」
「いーのいーの、アスナが気を遣ってくれるの嬉しいから。…にしてもこのアイテム、謎なんだよねぇ」
メニューを開き、アイテムの欄を眺めていけば、一番下にそれが名を連ねているのが見える。
《ゲーマドライバー》と《マイティアクションXガシャット》。
謎しか呼ばないこの二つのアイテムの存在感に、ユウキは思わず眉

間にしわを寄せてしまっていた。
「いつの間に送られてきたのか、そもそもこれ見た目の世界観が違いすぎて、ＳＡＯの正式なアイテムなのかすらも怪しいんだよね」
「……ＧＭ、でいいのかしら？　茅場晶彦も想定していない未知のアイテムってこと？」
「あんにゃろうの考えまではボクもわかんないけど、おそらくね」
リアルを追求したゲームであるのに、露わになったこのアイテムの力はその理念から乖離していた。
謂わば、ＲＰＧゲームで格闘ゲームのキャラクターや、レースゲームの車が登場するようなものだ。
これを紛れ込ませた者は、ＳＡＯを作った物とは全く異なる人物である可能性が高い。
「あの時、敵キャラやプレイヤーのみんなに起こった異常といい、タイミングよく使えるようになってたことといい、不確定要素が多すぎる。……こいつをどうにかしないと、ボクは他のプレイヤーとは関われそうにないよ」
「そうね…本当に気味の悪い話だわ」
現に二つのアイテムを使用し、異常が起きたボスモンスターを討伐したユウキにも、疑いの目が向けられた。
キリトがその視線を肩代わりしてくれたものの、また同じような事態が起きれば、自分は再びこれらを使用しなければならないだろう。
ただでさえデスゲーム中なのに、どうしてこんな厄介事が起きるのか、と悩むユウキ。
腕を組んで唸る彼女に、アスナが近づき耳に口を寄せた。
「…実はねユウキ、スパーリングに誘ったのは、相談したいことがあったからなの」
「え？」
何だろうか、と聞き返した時。
ユウキの脳裏にピコン、と聞きなれた通知音が鳴り響いた。
「ん？　あ、ちょっと待って。キリトからメッセージだ…」
アスナに手を合わせ、頭を下げたユウキはすぐにメッセージの欄を

開く。
こんな夜中に何の用事だろうか…と訝しみながら、ユウキは送られてきた内容に目を通す。
そして、そこに書かれた内容に、ギョッと目を瞠った。
［Ｆｒｏｍ：Ｋｉｒｉｔｏ　サチがいなくなった］

―12―　ＢＬＡＣＫ　ＣＡＴと孤独の剣士②

月夜が照らす、町中を流れる川。
穏やかな流れが夜の静寂を彩り、水面に映った月光がゆらゆらと輝き、揺蕩う。
その輝きを覆うように渡された橋、その下に少女はいた。
「サチ」
膝を抱え、項垂れていたサチは、自分を追ってやってきた二人、ユウキとキリトの方にのろのろと顔を上げる。
「キリト…ユウキ…」
「皆心配してるよ？」
彼女の浮かべる悲痛な表情に唇を噛みながら、ユウキは平静を装って語り掛ける。
しかし、サチは膝を抱えて小さくなったまま、その場から動こうとしない。
ユウキとキリトはサチの左右に腰かけ、それ以上急かす事なく無言で佇む。
するとやがて、サチがか細い声をこぼした。
「ねぇ、キリト……私、逃げたい」
「な、なにから？」
「……この街から……モンスターから……黒猫団の皆から……ソードアート・オンラインから」
左右からサチの顔を覗き込み、案じる眼差しを送るユウキ達。
抱え続けていた暗い気持ちが止まらなくなったのか、サチはぽろぽろと涙をこぼし、想いの吐露を続けた。
「どうしてここから出られないの？　なんでＨＰがなくなると死んじゃうの？　こんな事に……何の意味があるの？」
その問いに、二人とも答えられない。
一万人もの人間をゲーム世界に閉じ込め、ゲームでの死を現実での死と結び付けた犯人は、この場にいない。
その意志を問う事は、今この場にいる誰にもできはしないのだ。

「多分……意味なんてない……と思う」
「私……死ぬのが怖い……怖くて、この頃あまり眠れないの……」
それは、この世界に閉じ込められた人間ならば、誰もが抱くはずの想いだ。
現実世界での生活、謳歌しきれていない人生、家族や友人、不安な事が数えきれないほどにある。
暗い思考の渦に嵌りつつあるサチに、不意にキリトが笑みを携えて向き合った。
「大丈夫、君は死なないよ。黒猫団は十分強いギルドだ。安全マージンも取れてるし、嫌なら無理に前に出る必要もないよ。俺からも皆に言うからさ」
サチの肩を掴み、真正面から目を覗く。
本心ではない。戦闘時のサチの怯える癖は改善されておらず、お世辞にも安心できるとは言えない。
しかし、気持ちで負ける事こそ本当の敗北だと、キリトはサチの気持ちを奮い立たせようとしていた。
その想いが通じたのか、サチは縋るような目でキリトを見つめ返した。
「ホントに私は死なずに済むの？　いつか現実に帰れるの？」
「ああ、君は死なない」
ほんの少しの嘘を見破られないよう、力強く頷くキリト。
その隣でユウキも、サチの手を引いて優しい笑みを浮かべていた。
「最後まで、一緒に戦おうよ。ね？」
一人ではないのだと伝えるように、サチの手をしっかりと握る。
そうしてようやく、サチの表情はフッと柔らかく――まるで親を見つけた迷子のように、安堵を浮かべるのだった。
☒
ユウキとキリトが月夜の黒猫団の手伝いに入ってから数日後。
きちんとした拠点を得るために、団員で集めた金銭を使ってホームを購入しようと、ケイタが一時仲間の元を後にした時だった。
「ケイタが帰ってくるまでに迷宮区で金を稼いで、新しい家具を全部

揃えちまおうよ」
リーダーがいない間に、大きなプレゼントをしてやろう、そんな悪戯っぽい気持ちで提案が上がる。
メンバーはそれに賛同し、すぐに迷宮へ向かう用意を始める。
「で、何処の迷宮区で金を稼ぐんだ？」
「えっと、第二七層の迷宮区にしようと思っているんだ」
自分達のレベルでいえば、妥当という難易度の迷宮。
さして困った事態にもならないだろう、と高を括る彼らに、ユウキ達は思わず待ったをかけていた。
「いや、でも、やめた方がいいと思うぞ……」
「うん、キリトの言う通り、やめた方がいいかも……」
「この一週間でレベルもかなり上がったし、大丈夫だよ」
心配そうな表情で止めに入る二人だが、全員あまり気に留める様子がない。
キリトとユウキ、二人の高レベルプレイヤーの助けにより、実力が上がったと油断していることは明白である。
しかし、こうもやる気に満ちているようでは止められそうになかった。
「…どうする？」
「仕方がない。何があってもいいように、常に近くにいることを心がけておこう。よほど無茶をしない限りは安全なはずだ」
「おっけー」
こっそり耳打ちし合い、自分達の方針を決めると、渋々ユウキ達も同意する。
テツオを除くメンバーはそれに喜び、意気揚々と歩き出す。もうすでに彼らは、手にした金銭で何を買うか、想像に耽っているようだ。
それを見て、ユウキとキリトはまた一段と不安になっていた。
「…大丈夫だよね」
「ああ、そのはずだ…もしもの時の転移結晶もあるしな」
「…まあ、そうだけど」
何か起これば、即座に街に転移してしまえば危険はないだろう。

いざとなったら、自分達が彼らを守るのだと気を引き締め、ユウキ達は黒猫団の後についていった。

「ちぇすと―!」

ザンッ!と、ユウキが振り下ろした刃が、ゴブリンを真っ二つに切り裂く。

ポリゴンの欠片に砕ける様を見届けてから、ユウキはフゥ吐息をつく。

汗を拭う仕草をしてみれば、既に数体の敵を倒している彼女に、ササマルが呆れた目を向けてくる。

「おいユウキ、こっちの獲物まで狩るつもりじゃないだろうな?」

「あはは~ゴメンゴメン。でもこう……迷宮ってなんかワクワクしない?」

「言いたいことはわかる」

「同じく!」

石造りの壁や天井が続く空間を見渡して、ユウキがそんな事を語ると、キリトを含む男子陣が苦笑と共に頷きを返す。

しかし、サチだけが困り顔で首を傾げていた。

「ごめん…私はちょっとわからないかな」

「えっ…⁉?」

「気にするなサチ。ユウキの感性が男子寄りなだけだからな」

「ひどくない⁉?」

秘密基地や洞窟に反応する男子と同じ反応だと暗に言われているようで、ユウキが思わず泣き顔になる。

「そんなこと言うなら先行っちゃうぞ! 置いてってやるぞ!」

「悪かったよ。まぁ…この程度のレベルが相手ならサチたちだけでも……いや、楽観視はダメだな」

頬を膨らませて、目を吊り上げるユウキを宥めながら、彼女の後についていくキリトと黒猫団。

しばらく歩いているうちに、一向は何やら違和感のある壁を見つける。

いろいろといじっているうちに、壁の一部がガコンと動き、ゆっくりと開き始めた。
「お、隠し扉！」
「ホントだ！」
「お宝があるかもな」
迷宮らしいギミックに興奮気味の声を上げるテツオ達。
ぞろぞろと、四人が中に入っていく姿を見つめていたユウキとキリトは、次第に険しい表情になって行った。
「迷宮区で隠し扉か～…そこはかとなく嫌な予感がするね」
「止めるか」
「うん。みんな、ちょっと待っ――――」
騙しや奇襲、罠は迷宮の十八番。
下手をしたら、一瞬で全員が死亡する可能性もあると、安易に謎の部屋に足を踏み入れる事はあまりに危険である。
そう思い、ユウキが中に向かったテツオ達を呼び止めようとした時。
突如、ユウキの足元に円陣が現れ、眩しい光が迸った。
「強制転移…⁉？　ユウキ⁉？」
「ヤバ…⁉？」
乗った者を一瞬で別の場所に移動させてしまう罠、それを踏んでしまったのだと気付いた時には既に遅く。
ユウキはキリト達の目の前から、一瞬で消え失せてしまっていた。
「やられた…！　ここはどこだ⁉？　まだ迷宮区内⁉？」
周囲を見渡し、ユウキは戦慄の表情を浮かべる。
壁や天井、置かれたモニュメントを見る限り、通ってきた途中のどこでもない。完全に知らない場所に転移させられている事を思い知る。
「マップは……肝心なときに役に立たないなぁ！」
転移されたせいで、自分が今いる空間しか表示されていないマップに悪態をつき、ユウキは思考を巡らせる。

一刻も早くキリトの元に戻らなければ、サチ達の身に何が起こるかわからない。こんな罠があるくらいだ、もっと危険な代物があってもおかしくはない。

急ぎ、手探りでも仲間の居場所を突き止め、助けに戻らなければ、と走り出そうとした時だった。

聞き覚えのある、今この時には絶対に聞きたくなかった声が、ユウキの耳に届いた。

『^ #} > 〃 ^ <} #+<#|!*|:;^ 』

『>}:}☒+$> {#%>*#<| {:;?:} <』

気味の悪い鳴き声と共に向かってくる、ノイズが全身に走るモンスター達。

ゴブリンの胴体に、オレンジ色の頭部を乗せた、明らかにバグとしか思えない見た目の敵キャラクターが、再び徒党を組んでユウキに近づいてきていた。

「こいつら…！　こんなとこにまで、しかもこのタイミングで出てくるなんて！」

第1層のボス戦で現れたバグ、本来のボスキャラを乗っ取るような形で現れた謎多きそれらが、今度は騎士のような格好をしてじりじりと迫り来る。

ユウキは歯噛みしながらそれらを睨みつけ、アイテムボックスを表示する。

「……やるっきゃないか」

【マイティアクションX！】

取り出したアイテム――ゲーマドライバーとガシャットを手にし、ユウキは改めて敵と相対する。

ドライバーを腰に巻き、ガシャットのボタンを押す。

そしてガシャットの持ち手を逆手に持ち、ドライバーの左側に開いた穴の一つに、勢いよく差し入れる。

「大変身！」

【ガッチャーン！　ＬＥＶＥＬ　ＵＰ！】

最後にドライバーの右側のレバーをひっくり返し、叫ぶ。

直後、周囲に現れた複数のスクリーンのうちの一つを押し、広がったそれと身を重ねる。
一瞬のうちに、ユウキの格好は件のマゼンタカラーの衣装に変化し、腰布が大きくはためいた。
【マイティジャンプ！　マイティキック！　マイティマイティアクションX！】
「どりゃあああああああ!!?」
【ガシャコンブレイカー！】
手元に現れたハンマーを振るい、バグを起こしたキャラクター達を叩き伏せる。雄叫びと共に、片っ端から邪魔者達を吹っ飛ばしていく。
しかし、倒しても倒しても次々にバグは現れ、ユウキは徐々に押され始めていく。
「ああもう…！　こいつらの相手してる場合じゃないのに！」
言いながらもハンマーを振るうが、やはり数は一向に減らない。それどころか、分裂でもしているのか増えているようにさえ見える。
焦りが生じ、ハンマーを振るう手に動揺が伝わりだす。ついにユウキが、壁際まで追いつめられようとした時だ。
とある一人の剣士が、まるで閃光のような速さで剣を振るい、ユウキを囲んでいたバグ達を吹き飛ばしてみせた。
「――ユウキ！　大丈夫!?」
ざっ、とどよめくバグ達を前に立ちはだかり、背を向けるその剣士――アスナを目にし、ユウキははっと目を見開いた。
「アスナ!?　なんでここに!?」
「あなたこそ……どこから入ったの!?　入口の方ではすれ違わなかったはずよ!?」
「黒猫団と迷宮区に入ったら、オレだけ転移トラップくらっちゃったんだ！　そしたらこいつらと出くわしてこのざま！」
アスナに問われ、同じくハンマーを構えて応えるユウキ。
大体の事情を察したアスナは、再びお目にかかったバグ達を前に眉間にしわを寄せ、何かを躊躇うような素振りを見せる。

「…！　だったら…！」
　するとアスナは、唐突に剣を鞘に納めたと思うと、アイテムボックスをいじり始める。そして、とある二つのアイテムを顕現させる。
　彼女の手の上に現れたもの――――ゲーマドライバーと水色のガシャットを目の当たりにし、ユウキは目を丸くする。
「アスナ、それ…！」
【タドルクエスト！】
　絶句するユウキの前で、アスナはガシャットのボタンを押し、ゲーマドライバーを腰に巻きつける。
　アスナはガシャットを見つめ、逡巡するような険しい表情を浮かべていたが、やがてキッと鋭くバグ達を睨みつける。
「…どうしてこれが私の元にまで現れたのかはわからない。でも、ユウキのように、これが力になるのなら…！　変身！」
【ガシャット！　レッツゲーム！　メッチャゲーム！　ムッチャゲーム！　ワッチャネーム⁉？　Ｉ，ｍ　ａ　仮面ライダー！】
　ガシャットをドライバーに突き刺し、直後に現れる幾つものスクリーン。
　アスナはそのうちの一つ、ユウキが選んだものとは異なるものを押し、広がったそれを己の身に纏う。
　一瞬のうちに、アスナは騎士をデフォルメしたような、に刀身の格好に変化していた。
「さぁ……行くわよ！」
【ガシャコンソード！】
「お、おう！」
　着ぐるみのような姿で、どこからともなく現れた炎のような刀身を持つ剣――――ユウキのものと似た、ゲームのボタンがついた武器を握るアスナ。
　ユウキは一瞬呆けるも、すぐさま我に返ってアスナに追従する。
　姿の変わったアスナに臆することなく、バグ達は槍を構えて突撃してくる。隊列を組み、一糸乱れぬその動きは、軍隊のそれに相違なかった。

「はぁぁぁぁ‼？」
しかし、今のアスナにそれらは通用しなかった。
二頭身の身体でありながら、変身する前よりも鋭く速い剣捌きで、バグ達を斬り裂いていく。
果敢に挑みかかるバグ達だが、突き出された槍の穂先を尽く切断され、無防備になった胴体を薙ぎ払われていく。
「やぁぁぁ！」
【カッチーン！】
雄叫びと共に、オレンジ色の刀身が炎を纏う。
凄まじい熱を放つそれが振るわれると、騎士のバグ達は一瞬で胴を断たれ、真っ二つになって宙を舞う。
【コッチーン！】
「ふっ‼？」
アスナが剣の鍔部分に備わったボタンを押すと、刀身部分がひっくり返り、水色の刀身が露わになる。
冷気を放つそれを振るえば、剣圧の直線状にいたバグ達が纏めて凍りつき、氷の彫像となって地面に縫い付けられてしまう。
「一掃するわ！　躱して！」
「え⁉？」
【ガッチャーン！　キメワザ！】
別の場所でハンマーを振るっていたユウキに告げてから、アスナは一度ドライバーのガシャットを抜き取る。
それを、剣に備わったスロットに差し込み、柄部分のトリガーを絞る。その瞬間。
【タドル・クリティカルフィニッシュ！】
凄まじい炎が刀身に宿り、轟々と嵐のように吹き荒れる。
アスナは剣を両手で構え、全身でゆっくりと振りかぶり、力を溜めていく。
そして、キッと眼光を鋭くし、視界に映る全てのバグ達に向けて、刃を振り抜く。
「はぁぁぁぁぁぁ‼？」

「おわ――――っ⁉？」
ゴウッ！と放たれる業火の一閃。
空気さえ焼き焦がすような勢いの一撃が、バグの全てを一直線に焼き切ろうと宙を行く。
間一髪、慌てて背中をのけぞらせたユウキの真上を炎の刃は進み、バグ達の胴体に食らいつき、あっと言う間に両断する。
【会心の一発！】
バグ達は斬り裂かれると、直後に爆発し粉々に砕け散る。
視界に映る敵全てが、今の攻撃で粉砕され、迷宮の一室は静寂に包まれる。
自分とユウキ以外に何もいなくなった事を確認すると、アスナは構えを解き、ガシャットを剣から取り外した。
「フゥ…」
「ちょっとアスナ！　今のものすごい危なかったんだけど⁉？　かすったよチッて！」
「ごめんなさい…でもそれどころじゃないでしょう⁉？」
「ってそうだった！」
変身を解除し、息をつくアスナのもとに、危うくまとめて排除されかけたユウキが猛抗議に向かう。
が、アスナの一言で我に返り、同じく変身を解除し猛然と駆け出す。
どこもかしこも同じように見える迷宮内を、微かな記憶を頼りに走り、ユウキは仲間の元へ急いだ。
「急げ…もっと早く！　早く！」
冷や汗を流し、呼吸を荒くし、ユウキは急ぐ。
胸中で渦巻く嫌な予感を無理矢理に無視し、一刻も早く辿り着こうと、必死に前を目指して走る。
そしてようやく、見覚えのある個所へと辿り着いた。
「キリト！　サチ！　みんな！」
開きっぱなしになっている隠し扉を見つけ、飛び込む。
嫌な予感が外れてほしい。臆病な自分が抱く幻想であってほしい。
そんな願いを抱き、５人の姿を探す。

しかし、開かれたその扉の中にいたのは――――キリト一人だけであった。
「……キリ、ト？　ねぇ、みんなは…どこ…？」
「っ…！　ごめん、ごめん…ユウキ……！」
狭い部屋の中心で膝をつき、項垂れるキリトが、掠れた声を漏らして身を震わせる。
ユウキはふらふらと部屋の中に進み、きょろきょろと辺りを見渡す。
サチも、テツオも、ダッカーも、ササマルも、キリトと共にいた筈の誰も見当たらなかった。
「嘘だよね……冗談にしてはちょっと、タチが悪すぎるよ…？　ドッキリなんでしょ…？　そう、なんでしょ…？」
ユウキの縋るような問いに、キリトは嗚咽の声だけを漏らす。
それが全てを物語っていて、ユウキはがくりとその場に膝をつく。がしがしと頭皮を掻きむしり、自らの心を苛む痛みに、くしゃりと顔を歪ませる。
「うぁあ…！　うあああああ…！」
こぼれ出る、悔恨や怒り、悲しみに満ちた悲鳴。
全身の震えが止まらず、視界が揺れて真面な思考ができなくなる。
響き渡る絶叫を耳にし、少女の後を追ってきた白い女剣士は、痛ましげな表情で目を逸らす事しかできなかった。

―13―　ＢＬＡＣＫ　ＣＡＴと孤独の剣士③

自身の膝を抱えて、ユウキは小さく蹲っていた。
彼女が借りた宿屋の部屋の隅、月明かりも照らしてくれない暗闇の中で、ただ一人じっと丸くなる。
しん、と静かな沈黙を、不意に扉を開く音が遮った。
「…ユウキ、大丈夫？　入っても、いい？」
「……うん」
躊躇いがちに、少しだけ扉を開けたアスナが、真っ暗な部屋の中を覗き込む。
きょろきょろと中を見渡し、項垂れるユウキの姿に気付くと、切なげな表情で彼女の元へと歩み寄っていく。
「…例のあの人達のことは、残念に思うわ。あんなの、冷静でいる方が不可能よ」
「…ボク、何にもできなかったよ。守ってあげるなんて言ったのに、肝心な時にそばにいられなくて……手も伸ばせなくって」
か細い声を漏らし、ユウキはますます小さく身を縮める。

短い間ながらも、確かに言葉を交わし合った、五人の仲間達。
そのうちの四人は迷宮内の悪意によって、もう一人は……ケイタは、生き残った二人の告白に、鬼のような豹変と罵倒を返した。
――――お前らなんかが、俺達と一緒にいる資格なんて最初からなかったんだ‼
仲間を返せよ、人殺し共‼
仲間の中で比べ物にならない力を持っていながら、仲間を誰一人救えなかった役立たず。
頼られる存在だと悦に浸って、何も出来ずに生き延びた人間の屑。
そう、言葉にもできない激情をぶちまけられて、呆然と立ち尽くすユウキ達の前で、ケイタは浮遊する城の縁から身を投げ出した。
魂の抜けた人形のように、力なく遥か真下へと堕ちていった……死を選んだ彼の最期を目の当たりにして、ユウキもキリトも愕然と膝を

つく他になかった。

ユウキはもう、立ち上がる気力も失くしてしまい、食事も睡眠もとらず縮こまる日々を送っていた。

「…あの人は？」

「わかんない。メッセージ送っても返事してくれないし、探しても避けられてるのか見つからないし……どうすればいいのかもう、わかんない」

姿の見えない、黒の装いの少年の行方を尋ねるも、ユウキは覇気のない声で答え、顔を膝に埋める。

まるで、視界に映る全ての者を拒否したがっているようだ。

（今のこの子に、一体何を言えばいいのよ…！）

あまりにも痛々しい姿に、アスナは思わず目を逸らして悲痛に顔を歪める。

安易に気遣いの言葉も吐けず、その場から立ち去る事もできず、ひたすらに重苦しい沈黙が続く。

そんな時だった。

ユウキの元に、聞きなれた通知音が届いたのは。

「……？　アルゴから……？」

誰からの声も聞く気になれなかったユウキは、ふと届いたメッセージが気になり、億劫そうに顔を上げて文面を確認し始める。

つづられた文を読み上げ、内容を理解していくとともに、ユウキの表情は見る見るうちに変貌し始め、ついには勢い良くその場に立ち上がっていた。

「キリトのバカ…！　何考えてるんだ⁉？」

「ユ、ユウキ⁉？」

困惑し、眼を見開くアスナを他所に。

ユウキは必死の形相で、部屋を飛び出し走り出していった。

☒

白い、極寒の風が吹き荒れる。

暗闇に覆われた空、猛吹雪が吹き荒れる森の中を、キリトは一人歩

く。
剣を腰に佩き、風雪にコートをはためかせ、ただ前一点を見つめて進み続ける。
「やっと追い付いたぜ、キリト」
その背に、一人の男の声がかかる。
キリトはゆっくりと振り向き、何処か虚ろな人形のような目を向け、声の主――――赤い武者の姿を視界に映す。
「……クライン、やっぱりお前か」
「事情は全部ユウキちゃんに聞いた。お前、本気で例のクエストに行く気か」
覇気のない声を返すキリトに赤い武者、クラインは厳しい表情で問う。
無言のまま頷きもしない黒の剣士に、クラインと彼の仲間達が顔を歪める。
少年がどれだけ無謀な事をしようとしているか、自分達を捉えているデスゲームの残酷さを知っている以上、見過ごすわけにはいかなかった。
「キリト、俺達とパーティーを組め。そしてボスを一緒に討伐しよう。アイテムはドロップした者の物で良いだろ」
「……なるほどな、だが断る。もしも俺の邪魔するならクライン、お前と言えども斬るぞ」
「それはボクが相手でも?」
腰に佩く県の柄に手をかけ、脅しをかけるキリト。
だがそこへ、険しい表情をしたユウキが肩を怒らせながらやって来る。
「ユウキ…」
「いくら君でも、ボクを相手に通れるとは思ってないでしょ。…一緒に行こう。そうしちゃいけない決まりなんてないはずだよ」
同じ苦しみを抱く少女を前に、自分と同格かそれ以上の強さを誇る少女の説得に、キリトは一瞬躊躇う様子を見せる。
彼女の提案に乗れば、目的の物を手に入れる可能性は確実に跳ね上

がるだろう。
　しかし、ユウキが優しい声と共に手を伸ばすと、きつく歯を食い縛り、鋭い目で少女を睨みつける。
「うるさい！　黙れ！　俺のせいで俺以外全員死んだんだぞ！」
「それは違う！　キリトだけのせいじゃない！　ボクだって何もできなかった…！　君が彼らを見殺しにしたって言うなら、ボクだって同罪なんだ！」
　全てを自らの責任だと叫ぶキリトに、ユウキが必死に首を振り否定する。
　罠に嵌り、敵に遭遇し、助けに向かうのが遅れた。
　彼らを守るべき立場にいたのに、そうできなかった後悔は、ユウキの心にも重く澱みのようにこびりついていた。
「…《背教者ニコラス》の袋の中、死んだ者を生き返らせる事が出来るって言われているアイテム。狙いはそれだろ」
　クラインの問いに、キリトは答えない。だが、沈黙は是だと告げているようなものだった。
　ゲーム内で死亡した……現実世界においても死んだ者を生き返らせる効果があるというアイテム。
　この先に現れる敵を倒す事により、それが手に入るという眉唾物の情報。
　一人、仲間も連れずに雪原を進むキリトは、その情報を信じて敵の下を目指していたのだ。
「あぁ、そうだ」
「ただの噂かも知れないんだぞ」
「それでも構わない」
「ソロで挑める相手じゃないよ！　対象が同じなら、誰がやったって…」
「それじゃ意味ないんだよ…！」
　本当かどうかも怪しい噂を信じ、無謀に強敵に挑もうとしているキリトを止めようと、クラインとユウキが必死に説きかける。
　だが、キリトは悲痛に顔を歪め、決して首を縦に振ろうとはしない。

贖罪に固執する彼は、ユウキ達の元に踏み出そうとしない。
埒が明かない、とユウキがキリトの元へ近づこうとしたその時。
彼らの背後で、いくつもの転移による光が発生し、銀の鎧を纏った複数のプレイヤーが現れた。
「⁉？　聖龍連合…！」
「マズイ……あいつらレアアイテムのためならＰＫ紛いのことも平気でやる連中だぞ！」
ＳＡＯ内で噂になっている、行儀がいいとは言えないプレイヤーの集団の登場に、クライン達は焦燥に目を瞠る。
にやにやと不気味に笑う聖竜連合を凝視していたクラインは、突如自身の刀を抜き、彼らに向けて構えだした。
「キリト、ユウキちゃん！　行け！」
「⁉？　何を言って…」
「ここでうだうだ喋ってたらあいつらに先を越されるだろ！　どっちが手に入れようが、こいつらに美味しいとこ持ってかれてたまるかってんだ！」
キリト達を背に庇い、促すクライン。彼の仲間達も、同じく得物を抜いて続々と聖竜連合と相対していく。
キリトはその光景を呆然と見つめ、やがて彼らに背を向けると、脇目もふらずに節減の先へと走り出した。
「キリト！　…ああもう、勝手にしろ！　ボクも勝手にやってやる！」
放置されたユウキは、走り去っていくキリトとその場に留まるクライン達を交互に見て、苛立たし気に叫んで駆け出す。
遠く吹雪の中に消えていく黒と紫を横目で見やり、クラインはフッと不敵に笑ってみせた。

それは、節減の先に聳え立つ杉の木の下に現れた。
サンタクロースを、醜悪なモンスターとしてデザインし直したような見た目の、巨大な人型のモンスター。
〝背教者ニコラス（Nicholas the Renegade）〟という名がついたその敵が、やって来た剣士達に向けて、不気味に嗤う。

『} #＞｀ ｛｜?｡］?･＜＊＋＝＋%｀ }］［｀ ＊＜｜＞$ ″＋#；』
そして、ニコラスの全身はノイズが走り、頭部がオレンジ色の異形へと変貌していく。
忘れるはずもない、第一階層のボスにも現れた謎の異変が、この敵キャラクターにも起こっていた。
「こいつもか…！　変身！」
【I⊠m　a　仮面ライダー！】
一瞬目を見開くも、ユウキは冷静にアイテム欄を表示し、ベルトとガシャットを手にする。
迷いのない動きでそれらを装着し、ずんぐりとした戦士の姿へと変身した彼女は、隣で背中から剣を抜いて構えるキリトの隣に並び立つ。
「うおおおおおおおおお‼?」
「やあああああああああ‼?」
雄叫びを上げ、走り出すユウキとキリト。
愛用の黒い剣を、白のハンマーを振りかざし、巨大な斧を携えた怪物に向かって挑みかかる。
焦点の合っていない怪物の顔がユウキに狙いを定めた瞬間、ユウキは驚異的な跳躍でニコラスの顔面に接近する。
「やっ！　やっ！　でやあああああ！」
宙を飛び跳ね、ニコラスの巨体を足場にし、目にも止まらぬ速さで攻撃を叩き込んでいく。
ポコポコとコミカルなエフェクトが発生する下では、鬼の形相となったキリトが鋭く斬撃を放ちまくる。
背教者ニコラスも負けじと斧を振り回すが、段違いの速度を見せつける二人には追い付く事ができず、見る見るうちに頭上のゲージが黄色から赤に近づいていく。
「おおおおお！」
『(#$＋＜?_＜，（＿））″#$#、、＆（，＆』
そして、高く彫琢したキリトの斬撃がニコラスの額から顎先までを叩き切ったその直後、ニコラスに走るノイズが強くなる。

大きな一撃を叩き込んだキリトが着地した時には、ノイズがニコラスと異なる形に変わっていき――――。
『…フ、フハハハハ！』
ニコラスの巨体が、赤と白に彩られた、杖を持った道化のような姿になる。
赤い仮面で顔を隠し、魔法使いのローブに似た装いをした敵の姿を視界に映し、ユウキが眉間にしわを寄せる。
「タドルクエストの……アランブラ！」
『よくぞ無謀にも私の前に出てきたな、愚かな人間たちよ！　お前たちの勇気をたたえ、私が完全体となるための糧としてやろう！』
赤い魔法使い、アランブラがそう言い、杖を掲げた瞬間、アランブラの周囲に赤い炎が出現し襲い掛かってくる。
キリトと左右に分かれ、放たれたその攻撃を軽々と躱して、ユウキは新たな敵を睨みつける。
「そんなのは、ごめんだね！　大変身！」
【ＬＥＶＥＬ　ＵＰ！　マイティマイティアクションＸ！】
身に纏っていた白い鎧が弾け飛び、マゼンタカラーのスーツに姿を変える。
拳を天に突き上げる構えを取ると、ハンマーのボタンを押して剣の形状へと変形させ、切っ先をアランブラの顔面に突き付ける。
「キリト、あいつはボクがやる！　その後に解放される〈背教者ニコラス〉を君が…！」
「うおおおおおおおお!!?」
「トドメを…ってちょっと!??」
姿も能力も変化した敵に備えるため、迷うことなく共闘を申し出る。
しかし、ユウキが話し終えるよりも前に、キリトは犬歯を剥き出しにしながら咆哮を上げ、アランブラに飛び掛かっていく。
『愚かな……シビレール！』
アランブラは一切怯まず、キリトに杖を向け、魔法陣を出現させる。
そこから放たれた雷撃を、キリトは勢いよく転がって躱し、剣を振

るって無理矢理体を起こす。
唸り声と共に身を起こすその様は、まるで猛獣のようだった。
「キリト！　今の君のレベルじゃ無茶だって！」
「がああああ！」
ユウキの制止も全く聞かず、獣の叫びとともにアランブラの巨体に飛び掛かる。
アランブラはそれに、雪中から蔦を伸ばし、氷柱を生やし、火炎を放って迎え撃つも、剣士の勢いは速く捉える事ができない。
異様ともいえる気迫と速さに、ユウキもアランブラも思わず圧倒されていた。
「嘘だろ、押してる…！」
『ぐぬ…！　なんたる気迫！　これほどとは予想外だ！』
慄きながら、アランブラは魔法を放つのを止めない。
自身に迫り来る凶刃、自身の首を迷うことなく刈り取りに来る刃を食い止めようと、次から次へと攻撃を放つ。
しかしその尽くを、キリトは最低限の動作で回避し続けた。
「食らえ……うおおおおおおお‼」
『ぬぉっ⁉　よ、よもや…⁉』
ついには、キリトはアランブラの猛攻を抜け、仮面の目と鼻の先にまで跳躍する。
次に放つ、自身の最大の一撃で全てが決まる。失ったものを取り戻せる。
そう勝利を確信し、刃を大きく振りかぶった時だった。

「――――キリト、助けて」

キリトの耳に、弱々しい少女の声が届く。
彼が失った、取り戻したいと願っていた少女の言葉に、キリトの手は止まってしまう。
「⁉？」
次の瞬間、キリトは横から凄まじい一撃を受けて、木の葉のように

呆気なく吹き飛ばされていた。
「キリト！」
『ハハハハハ……！　無様だな、この程度のことで心を揺さぶられようとは！』
「お前……！」
一気に自身のゲージが減少し、危険な黄色の域に達する。
ユウキが慌てて彼の元に駆け寄り、愉快そうに笑うアランブラを睨みつける。
呻き声をあげ、膝をつく黒の剣士を見下し、赤い魔法使いは下卑た声で哄笑してみせる。
『言っておくがこれはただの偽物などではない……消滅したあの少女のデータをもとに私が生み出した複製、いわば残滓だ。それを攻撃すると言うことが……どう言うことかわかるか？』
その言葉に、ユウキとキリトは同時にびくっと肩を揺らす。
アランブラの言葉が本当なら、声の主の少女は――サチはあの怪物の中にいる事になる。
となれば、アランブラを倒す事は、彼女を諸共殺す事になるのではないのか。
もし、先程の一撃が決まっていたら。
そう考えてしまったキリトの手から、剣を握る力がどんどん漏れ出ていく。
『ハハハ！　君にこの少女を傷つけられるかね⁉？　今度こそ君の手で、彼女を殺せるかね⁉？　ハッハッハッハッハ！』
人の命を盾にする、外道とおう言葉さえ物足りない敵に、ユウキはきつく歯を食いしばる。
怒りと悲しみと、何より悔しさが込み上げてきて、剣を握る手にギリギリと力が籠もる……だが、それでも手を出す事ができない。
抗う事も、逃げる事もできなくなった少女達に、アランブラが下衆の笑みを浮かべて杖を向けようとし――
【コッチーン！】
火炎を放つ直前、突如首元に食らいついた炎の斬撃により、赤い魔

法使いの体勢が崩れる。
『ぐわあああああ‼？　な、何だ⁉　誰だ⁉』
ぐらりと巨体が傾き、節減の上で蹈鞴を踏み、どうにか転倒を防ぐことができたものの、その首には確かな亀裂が走っている。
怒りに燃え、自身に傷を負わせた何者かの姿を探すアランブラ。
するとその足元に、バフッと雪を舞い上がらせて、白い騎士が勢いよく降り立った。
「アスナ‼？」
「……まさかとは思ったけど、ここまで馬鹿なことをするなんてね」
ゆっくりと立ち上がり、背後で項垂れるキリトに、仮面の奥から鋭い横目を向けるアスナ。
キンッ、と剣を振るい、装甲を纏ったアスナがアランブラに向き直る。ユウキの目に映るその背中は、明確な怒りに満ちて見えた。
「話は聞いていたわ……あんなのが、本当の事を言っていると思ってるの？　あなた達を動揺させる嘘だって……普通真っ先に考えるでしょう？」
「…それは」
「邪魔を…するな…！」
ぐっ、と正論を突き付けられ、黙り込むユウキ。
不意に、彼女を押し退け、顔を俯かせたキリトがアスナの元へと進み出てくる。
「わかってる……わかってるんだよ、そんな事は…！　あいつは、サチを侮辱したあいつは俺が……俺がやらなきゃいけないんだ…‼？」
「…そう、覚悟は決めていたのね」
荒く息をつき、肩を上下させ、アランブラの身を見据えて前へ出ようとする少年に、アスナは痛ましげに目を細める。
「でも私は、それを認めるわけにはいかない」
そう言い、アスナはキリトの肩を掴んで後ろに引き倒す。
ほとんど抵抗もできないまま、キリトは仰向けに倒れ込み、それ以降起き上がる事もできなくなる。
ギョッとした顔で、キリトと交互に見つめてくるユウキを放置し

……アスナは、自身の腰のベルトに手を伸ばす。
「術式、レベル２」
【ガッチャーン！　ＬＥＶＥＬ　ＵＰ！】
レバーを引き、途端に放たれる電子音声。
直後に現れた幾つものスクリーンのうちの一つを叩き、その身に重ねていく。
【タドルメグル！　タドルメグル！　タドルクエスト！】
そして――――白い装甲が弾け飛び、女騎士の新たな姿が露わとなった。

―14― ＢＬＡＣＫ　ＣＡＴと孤独の剣士④

それは、水色の鎧に身を包んだ西洋の騎士だった。
黒いボディスーツを水色のラインが走り、白いスカートが揺れる女騎士。
胸にはユウキと同じゲーム画面のような甲冑が張り付き、コミカルな目が映り込んだ兜をヘルメットのように被る。
風雪に裾をはためかせ、〝力〟を手に入れたアスナは炎を纏う剣を構えた。
「…はぁあああああ‼?」
雄叫びと共に、剣を振りかざし走る。
ボッ！と足元に積もった雪が爆発したように吹き飛ぶほどの勢いで、嘲笑を向けるアランブラに向けて一直線に向かう。
『小癪な！』
「はっ‼?」
嘲りの声と共に、杖を振るって雷を落とすアランブラ。
ゴロゴロと雷鳴を轟かせ、雨のように降り注ぐ雷の槍を、アスナは目にも止まらに速さで躱していく。
閃光の如き速さで接近した彼女は、一直線に赤い魔法使いの足を斬りつける。
『おのれ小娘が！　ちょこまかと！』
残像を残すほどの凄まじき速さに、アランブラは苛立ちと焦りを抱き始める。
雷だけでなく、炎や風、地面からはったを伸ばしてアスナを追わせるも、攻撃が発動した時にはすでに彼女の姿は消えている。
「すっご……オレもいくぞ！」
かなりの時間、アスナの戦闘にぽかんと呆けていたユウキは、我に返ると慌ててその場から跳躍する。
空中に浮かぶブロックを足場に、アランブラの周囲を縦横無尽に駆け回る。
上にはマゼンタの戦士が、下では水色の騎士が。

二方向から翻弄され、傷を負わされ、しかしアランブラは余裕の態度を崩さなかった。
『ハハハハハ…！　そんな攻撃など効かん！　どれだけ来ようと無駄なことだ‼？』
「…それはどうかしらね」
【カッチーン！】
アランブラの哄笑に、アスナが小さく笑みを浮かべながら呟く。
直後、彼女の持つ剣の刀身が反転し、炎から氷の衣装へと変化する。
アスナがそれを鋭く薙ぎ払えば、アランブラの片足がバキバキと巨大な氷で覆われ、固められ始めた。
『何⁉？』
「足元がお留守よ、魔法使いさん……それに、上もね」
「どっせい‼？」
『ぐおっ⁉？』
さすがに動揺し、眼を見開くアランブラの脳天に、ユウキによるハンマーの一撃が叩き込まれる。
体勢を崩し、よろめくアランブラ。
傾いだ巨体の肩を蹴り、宙を舞ったユウキは、空中のブロックの一つを壊し、中にあったメダルを受け止める。
【高速化！】
「いやぁあああああ‼？」
メダルが体の中に鳩首された瞬間、ユウキの姿が一瞬で掻き消える……いや、凄まじい加速で視界に捉えられなくなる。
移動と同時に振るわれる殴打と斬撃が、上と下で無数に延々と襲い掛かる。
応戦しようとするアランブラだが、彼の魔法は一つも間に合ってくれなかった。
『くっ…ザコが二人も、ちょこざいなぁ……っ⁉？』
忌々し気に吐き捨てる赤い魔法使いは、その声に確かな焦燥を滲ませる。
自身の頭上に表示されたＨＰバーは確実に削られ、次期に危険な域

に達してしまうだろう。
その前に何とかしなければ、そう考えたアランブラの視界に、黒い人影が映る。
『ならば…こうするまでだ！』
悪意に満ちた呟きを残し、軍と勢い良く手を伸ばす。その先で一人項垂れたまま、一歩も動かずにいたキリトに向けて、文字通りアランブラの魔の手が迫る。
この男さえ人質に取ってしまえば、もう手出しは叶うまい。
誇りも何もない下衆の思考で動き、自身の勝利を確信したアランブラが、キリトの目の前にまで迫った時。
「――読めているのよ、そういうのは」
ザンッ！と。
アランブラの視界に一筋の線が走る。
何が起こったのか、アランブラが理解した時には――魔法使いの顔に、左目と頬を一直線に斬り裂く傷跡が刻まれていた。
『ぐぎゃあああ!?』
悲鳴をあげ、凄まじい轟音を立てて倒れ込むアランブラ。
怒りを滲ませた呟きを漏らし、アランブラの目の前に降り立ったアスナは、氷のように冷たい目で魔法使いを睨みつける。
『う、嘘だ！　この私が、こんな失態を⁉？』
「よそ見するなよ！」
『がはぁ‼？』
激痛とノイズが走る顔の傷を押さえ、慄くアランブラの右顔に、今度はユウキのハンマーによる殴打が叩き込まれる。
途端にアランブラの巨体が浮き上がり、俯せから仰向けへと無理矢理転び直された。
「これで終わりよ‼？」
【ガシャット！　キメワザ！】
間髪入れずに攻撃を受け、雪上に倒れた無防備な敵。
アスナは一切の情けをかけず、ベルトから青いガシャットを抜き出すと、剣の鍔部分に差し込み、再び跳躍する。

見る見るうちに、アスナの剣に膨大な量の炎が纏わりつき、どんどん膨れ上がっていく。
「やめろ…！　頼む、やめてくれ！」
アランブラに迫る炎の剣を凝視し、キリトが途切れそうな声で懇願する。
だが、アスナはほんの一瞬切なげに顔を歪めただけで、すぐに険しい鬼の形相となり、剣に備わるトリガーを引き絞った。
【タドルクリティカルフィニッシュ‼？】
「はぁああああっ‼？」
咆哮を上げ、烈火に燃える剣を頭上に振りかぶる。
じりじりと豪雪さえも焼き焦がしそうな一撃が、アランブラの脳天に狙いを定める。
そして……アランブラの上で追撃を行っていたユウキが、迫り来る炎の光にぎょっと目を見開いた。
「…え、ちょっ、アスナ⁉？　待って待ってオレまだ退避してない‼？」
あわあわと手を振り回し、跳んでくるアスナを凝視し叫ぶ。
だが時すでに遅く、必殺の剣を携えたアスナはアランブラの目と鼻の先にまで近づき、剣を振り下ろしていた。
大急ぎで脱出したユウキの背後で、アランブラの顔面が炎の剣で両断された。
『ぐわあああああああああああああああああ‼？』
「またかぁあああああああああああああああああ‼？」
断末魔の悲鳴をあげ、脳天から股下までを綺麗に斬り裂かれる、赤い邪悪な魔法使い。
ＨＰバーが一気に減少し、赤い表示が完全に消え去ると、アランブラの全身でオレンジの火花が弾けだす。
そして次の瞬間、雪原を揺るがすほどの大爆発が発生し、アランブラの巨体は木端微塵に吹き飛んでしまった。
【ＧＡＭＥ　ＣＬＥＡＲ】
【Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ】

火の粉が飛び散り、キラキラと輝く風雪の中、文字が浮かび上がる。
ひゅん、と剣を振り、脱力したアスナは深く長く息を吐く。
数秒か数分か、長い間黙り込んでいた彼女は、ベルトからガシャットを抜き取り、騎士の鎧を脱ぎ去った。
【ガッシューン】
「……」
「ちょっとちょっとアスナ⁉？　今またボクごと斬ろうとしてなかった⁉？　危うくボクまで一刀両断されかけたんだけど⁉？　ねぇってば‼？　なんかボクに恨み持ってんの⁉」
どどどどっ、とそこへユウキが駆け込み、抗議の声を上げるのだが、アスナはそれに何も答えない。
冷たい目で、雪原に転がっていた物体――件の蘇生アイテムであろうそれを拾い上げ、キリトに冷たい目を向けるだけだった。
「……ボスを倒したのは私よ。ドロップアイテムは当然、私が貰っていくわ。そういうものなのでしょう？　ＭＭＯＲＰＧって…」
「っ…くっ…」
「……キリト」
悔し気に歯を食いしばるキリトに、ユウキは痛ましげに顔を歪める。
危険を承知の上で、彼が自身の手での入手に拘ったアイテム。
それを目の前で別の人間に掻っ攫われるなど、どれだけ悔しい事かは想像するに難くない。
「残念だけどさ、クラインがさっき言ってたみたいに獲った者勝ちだよ。悔しいだろうけど、あれはもうアスナの……」
「俺が…！　俺ができるせめてもの償いだったんだよ‼？」
慰めの言葉をかけるユウキに、雪を殴りつけながらキリトが吠える。
ビクッ、と思わず後ずさる少女の前で、悔恨に苛まれたままの少年は何度も雪を叩き、自身の不甲斐なさを恨む。
「俺のせいでサチは死んだ……ダッカーも、テツオも、ササマルも、ケイタも！　俺のせいで死んだんだ！」

「それはちがっ…」
「違わない‼？　俺がちゃんと教えていれば…向き合うことを拒まなければ、あいつらがあんな罠に引っかかることだってなかったんだ‼？」
あの時こうすれば、こうしなければ。
もしもの話をすれば、もう数えきれないほどにやり直したい事が出てくる。
だが、それらは決して叶う事はないのだ。
「…そうやってずっと、悲劇の主人公を気取って俯き続けるつもりなの」
哭く声を漏らすキリトに、不意にアスナがそう告げる。
慰めなどではない、弱り切った男に追い打ちをかけるような、怒りを滲ませる酷く厳しい声だ。
「犯した過ちは消えない。ここはゲームの中だけど、遊びじゃない……現実よ。死に直結するあらゆる可能性を想像できなかったのは、貴方じゃなくてその人達」
「アスナ……」
「貴方がそうして、贖罪を建前にした自殺紛いの行為を繰り返しても、誰も貴方を許さない！　許してくれる人なんていない！　望む人もいない！　無意味なだけよ！」
今の彼にはあまりに辛すぎると、ユウキが制止のつもりで呼びかけるも、アスナの言葉は止まらない。
いつしか、アスナの目にも涙が溜まっている事に気付き、ユウキは何も言えなくなってしまった。
「それでも貴方が罪だと思うなら、好きにしなさい…でも、死ぬことで許されるなんて思わないで！　最後まで生き残って……その罪を記憶に刻み続けなさい！」
自身の罪ばかりを見つめる少年に、今できる限りの叱咤激励を送る。
お願いだから、こんなところで折れないでほしい。
そんな願いを感じさせる、痛々しい掠れた声を張り上げ、アスナは

涙を流して言葉を吐く。
「あなたが私にそうさせたように！　死ぬまであがき続けなさい!!」
キリトは、何も答えない。
アスナもそれ以上は無意味と悟ったのか、悲痛に顔を歪めて踵を返す。
歩き出した彼女の背を追い、ユウキはやや言いづらそうに彼女の耳に口を寄せた。
「…何も、そこまで言わなくても」
「…ユウキ、これ見て」
「え？」
アスナは唐突に立ち止まり、手に入れた蘇生アイテムを見せる。
もともとが眉唾物の代物だからと、期待通りではない事を予想しながら、説明欄を流し見る。
そこにあった「五秒以内ならば蘇生が可能」という文に、ユウキの表情は凍り付く。
「ごっ…」
「こんなもの、彼に見せられないわ……最後にすがろうとした希望がこんなに残酷なものだなんて知ったら、どうなるか」
「…！　うっ…！」
無情すぎる真実に、叫びそうになるのを必死に抑え込む。
恐る恐る振り向けば、キリトは未だ項垂れたままで、アスナの声が聞こえた様子はない。
少しだけ安堵をしながら、それでもやはり、形容しがたい負の感情にユウキの表情は曇ったままであった。

武器を雪原に立て、座り込んだ武士達が肩で息をする。
聖竜連合のプレイヤー達を追い払い、ほっと一安心していたクライン達の元に、三つの人影が近づいてくる。
そのうちの一人、アスナが一つのアイテムを見せると、クラインの眼がはっと見開かれた。
「…アイテムは私が手に入れました。では…失礼します」

ぺこりと頭を下げ、去っていくアスナを呆然と見送ったクラインは、続いてユウキとキリトに目を向ける。
キリトは虚ろな目で覚束ない足取りで、ユウキはそんな彼に対し、痛々しい表情を浮かべて目を逸らしている。
同様に暗い二人の雰囲気、そしてそれぞれの表情の異なりに、クラインは雪原の先で何があったのか、全て理解してしまった。
「ユウキちゃん……」
「…ごめん」
俯き、唇をかみしめるユウキ。
彼女の隣を、キリトが無言のままよろよろと立ち去ろうとする。
そんな彼の袖を、クラインはギュッと握りしめて引き留め、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔で縋りつく。
「キリト……お、お前はぁ、生きろよ！　頼む、生きてくれよ！」
聞いているだけで苦しい、男の懇願。
キリトはそれすら何も反応を返さず、掴まれた袖を振り払って歩き去る。
残されたクラインが崩れ落ちるのを横目に、ユウキもまた虚ろな目を暗い空に向け、深いため息をこぼした。
☒
宿に帰ったユウキは、寝台に寝ころんだままずっと沈黙していた。
何をする気にもなれず、何も感じたくもなく、ただ渦を巻いている心が落ち着くのを待つばかり。
だがある時、顔を手で覆って光を遮断していた彼女の元に、一通の通知が届いた。
「……サチからの、メッセージと…プレゼント？」
メニューを開き、表示された贈り物の欄に目を見開くユウキ。
クリスマス当日に届くように設定されていたのか、と驚きながら、ユウキは怯えた表情でスフィアを見つめる。
サチは何を想ってこれを遺したのか、不安になったユウキはしばらくの間悩み、やがて意を決したように目を瞑り、スフィアを起動させる。

――――そして、その中に遺されていた想いを知り、ひたすら泣き続けた。

メリークリスマス。キリト、ユウキ。

あなた達これを聴いているとき、私はもう死んでいると思います……なんて説明したらいいのかな。

えっとね、ほんとのこと言うと、私…はじまりの町から出たくなかったの。

でもそんな気持ちで戦ってたらきっといつか死んでしまうよね。それは誰のせいでもない私本人の問題です。

キリトもユウキも、あの夜からずっと毎晩毎晩、私に絶対死なないって言ってくれたよね。

だからもし私が死んだらキリトはすごく自分を責めるでしょう。だからこれを残すことにしました。

私よりずっとずっと強い二人が、なんで私達を助けてくれていたのかは、頑張って考えたけどわかりませんでした。

でも二人が一緒にいてくれて、私はすごく安心できたの。

だからもし私が死んでもキリトは頑張って生きてね。

生きてこの世界の最後を見届けて、この世界が生まれた意味、私みたいな弱虫がここに来ちゃった意味、そしてあなた達と私が出会った意味を見つけてください。

じゃあねキリト、ユウキ。あなた達と会えて、一緒にいられて、ほんとによかった。

ありがとう。さよなら。

―15―　Ｎｅｗ　ｃｏｍｅｒは突然に！

冬は終わり、温かな風が吹き抜ける季節へと移る。
このデスゲーム世界へ閉じ込められて、もうじき一年が過ぎてしまうのだ、という感慨にプレイヤーたちが浸りだす頃。
キリトもまた、街中で日差しに照らされながら、一人立ち尽くしていた。
「キ～リトっ！」
そんな彼の肩を、ぽんっと軽く叩く少女が一人。
ぼんやりとしていた彼は、少女が自分の友人である事に気付き、フッと口元を綻ばせた。
「…ユウキか、久しぶりだな。……どうしたんだ」
「うんにゃ、久々に見かけたから声かけただけ。これからレベル上げ？」
「ああ…今日はフィールドに出ようかと思ってな」
「そっかー」
朗らかに話しかけたユウキだったが、会話はそれでぷっつりと途切れてしまう。
開いてしまった間に、顔から冷や汗を噴き出させ、急いで話題を脳内で探す。だが、今の雰囲気を変えられる話題が咄嗟胃思い付かない。
ぎこちない空気に内心あたふたと慌てふためいていた彼女に、キリトは切なげに顔を歪め、背を向けて歩き出した。
「……じゃあな」
「う、うん」
明らかに沈んだ雰囲気を漂わせている少年の背を、黙ってみつめる事しかできない少女。
肩を落とす彼女の元に、白い鎧の少女とフードを被った小柄なプレイヤーが歩み寄る。
「…まだ時間がかかりそうだネ、キー坊の心の傷が癒えるには」

「仕方がないわ。過ごした時間は短くても、顔見知りが死んだんだもの」
深いため息をつくユウキに、アスナとアルゴも切なげにため息をこぼす。
身近な人が死ぬという悲劇。それを体験してしまった人間の心を慰める方法など、人生経験の薄い彼女達には思いつかない。
ふとユウキは、隣に立つアスナの格好に目をやる。
白い鎧と赤い衣服は、最近話題のあるギルドのトレードカラーである事を思い出したからだ。
「――それで、アスナ…どうしたの？　聞いた話だと、ギルドに入ってソロで出てくるのは珍しくなったって聞いたけど…」
「…元々、あまり集団で行動するのには慣れてないのよ。少しの間だけ息抜きの時間をもらったの。ギルドも発足したばかりで、そんなに人が集まってやることが山積みになったわけでもないし」
「ふーん…」
「忙しそうで何よりだヨ、アーちゃん」
以前は一匹狼のようだった彼女が変わったものだ、と内心でユウキは感心する。キリトとの出会いで、多少気持ちに変化が現れたのだろうか、とも。
しかしやはり、三人の注目はキリトに戻ってしまう。
未だに一人で行動し、他人に頼るという事をしたがらない厄介な性分を持った彼を、ユウキ達は困り顔で見送るばかりだ。
「…あれ、やっぱりどうにかすべきだよね。ほっといたらいつまでもあんな感じかもしれないよ？」
「彼には借りもあるし、手助けしてあげたい気持ちもわかるけど、今の私たちに何かできるとは…」
「我ながら不甲斐ないナー、ふとぐらい聞いてやれればいいんだけド」
再びため息をこぼし、肩を落とすユウキ。
ただ、友達が自力で立ち上がる時を待つ事しかできず、不甲斐なさでいっぱいになっていた。
「でも確かに、あんな最悪のコンディションのままっていうのは見過

ごせないわね。…特に今は」
「え？」
小さくこぼれた、アスナの意味深な呟きに、思わずユウキが振り返る。
どういう事なのか、とユウキが尋ねようとしたその時、前を歩いていたキリトがくるりと、眉間にしわを寄せて振り向いた。
「……さっきから何だ？」
「あ、バレてた」
「そりゃあ、ここじゃ特に目立つ二人だからな…」
「え？」
「そうなの？」
首を傾げる二人の少女達に、今度はキリトが肩を落とす。
顔立ちから身体つきまで、そこらの女性とは一線を画す外見をした二人。
しかし本人達は無自覚らしく、周囲の女性プレイヤーからは羨望の眼差しを、男性プレイヤーからはやや下卑た視線が向けられている事が多い。
必然的に、現在最も近くに居るキリトにまで、多数のプレイヤーからの視線が集まってしまうのだ。
「嬉しい事言ってくれるネ、キー坊ったら」
「お前には言ってないんだよ……心配してくれるのは嬉しいけど、できれば今は一人にしておいてほしい」
「うん…ごめん」
色んな意味で注目されたくないと、キリトはユウキ達に断りを入れる。
数ヵ月前の一件で案じられている事も含め、キリトはしばらく、一人で気持ちの整理をつける時間を欲していた。
そのまま立ち去ろうとするキリトを、今度は背にしようとしたユウキとアスナとアルゴ。
だが、ユウキが振り向こうとしたその刹那、彼女はそれに気づいた。
「？　ねえ、みんな」

「何？　どうかしたの？」
「あれ…何だろ」
　思わず三人を呼び止め、それ――――空に現れた何かを指差すユウキ。
　訝し気に立ち止まり、アスナとキリトもアルゴも、ユウキが示す方向を見上げる。
　そこに在った何か――――四角く不規則に点滅する、空というよりも空間の異変に、三人は目を見開く。
「…ノイズ、よね。まさか、ＳＡＯ内で不具合が…⁉」
　現実とほぼ際のない才限度を誇るＶＲ空間、そこに起きた異変（バグ）に、ユウキ達や周りのプレイヤーたちも騒めき始める。
　多くの人々の視線を独占する中、空に現れたノイズが大きくなり。

――――一人の少女を、ノイズの中から吐き出してみせた。

「なっ…！」
「おォ⁉？」
「ひ、人…人が降ってくるわ‼」
「何で⁉」
　突然の事に、一気に騒然となる周囲。
　誰もが棒立ちになる中、いち早く我に返ったユウキが、最も近くにいる男性であるキリトに目を向けた。
「ヤバ…ＧＯ！　キリトＧＯ‼」
「ぐおっ⁉　蹴るなよ、ああもう‼」
　何が何だかわからないが、落ちてくる人がいるのならば受け止めて助けなければ。
　ならば受け止めるのは男の役目だと、キリトの背中を蹴りつけて早く向かうように促す。
　納得がいかない顔をしながら、キリトも即座に少女の真下に向かって思い切り駆け出す。
「間に合えっ…‼」

きちんと物理法則にのっとったらっかっ速度で迫る少女に、キリトは力強く跳んで、何とか少女を横抱きに受け止める。
おぉ…と周囲から感嘆の声が上がるのも気づかず、キリトは腕の中の少女をまじまじと凝視した。
「イエ～イ！　ナイスキャッチ！」
「お前…！　人を足蹴にしといてその態度か！」
「えー、だってこのメンツで落ちてきた女の子を抱きとめるポジっていったらキリトしかいないじゃん？　親方～、とか言ってもいいんだよ？」
「言うか‼」
何処の映画だ、と駆け付けるや否や茶化してくるユウキに吠えるキリト。
同じく近づいてきたアスナも呆れた目を二人に向け、頭が痛いとばかりに額に手をあてて項垂れていた。
「そんなことより！　…この子は、一体何者なんだ？」
「プレイヤー…なのは間違いないっぽいみたいだけど。何で空から…？」
「転移途中でバグに引っかかったとかじゃないのかイ？」
「わからない、本人に聞いてみないことには…」
表情を切り替え、少女を見下ろす三人。
頭の上のカーソルは確かにプレイヤーのもの、格好も自分達が纏っているものと大差ない、ゲームらしい装いだ。
一体何者なのか、と三人の視線が少女に集中した時だった。
「…ところであなた」
「ん？」
「…いつまでその子を抱きしめているつもりなの？」
不意に、アスナがキリトのじとりと冷たい眼差しを送り始める。
先ほどからずっと、少女はキリトの腕に抱かれたまま。地面に置くなりすればいいのに、ずっとそのままの体勢で跪いていたのだ。
「あ、いや…下ろすタイミングが掴めなくて」
「やだー、キリトくんってば女の子をそんなにベタベタ触っていやら

し～」
「キー坊君のえっち～」
「人聞きの悪いことを言うな！　あんたも引かないでくれ！」
「だったら早く下ろして…」
　ユウキとアルゴにまた囃し立てられながら、キリトはすぐに少女を下ろそうとする。
　だがその直前、それまでずっと気を失ったままでいた少女が身動ぎをし、ゆっくりと瞼を開き始めた。
「……ぅ、ん」
　何度か目を瞬かせ、瞳に飛び込む光に馴染もうとする少女。
　意識もゆっくりと再起動を始め、視界に映るものを認識しようと努める。
　そして、ようやく脳が覚醒を果たしたその時、目と鼻の先から自身の顔を覗き込んでいる少年に気付き、さっと表情を変えた。
「なっ、い、いやぁああ‼」
「ぶへっ⁉」
　即座に、少女の張り手が飛び出し、キリトの顔面に炸裂する。
　吹っ飛ばされる少年の姿に、後ろの少女達が目を見開いた。
「あ、クリティカルヒット」
「厄日ね…」
「…っ！　怒るのもわかるが、少しは俺の言い訳も聞いてくれないか…！」
「あなた…誰なの。ここは…一体私に何をしたの…⁉」
「まごうことなき冤罪だ！」
　痛む頬を抑えて蹲るキリトから、少女は尻餅をついたまま後退る。
　荒く息を吐き、キリトを睨みつける少女を見て、流石に不憫になったユウキが歩き出し、少女の傍にしゃがみ込む。
「落ち着いて、この人全身真っ黒でいかにも怪しく見えるけど、基本は特に害のないヘタレさんだから大丈夫だよ～」
「ええ…女の子を襲うような度胸はないわ」

「キー坊はまぁまぁ無害だから安心しなヨ」
「フォローがフォローになっていない…！　俺は受け止めただけだ！」
キリトを指差し、けらけらと笑うユウキとアルゴ、それと頷くアスナ。
キリト本人がもの言いたげな顔になっている事を無視し、ユウキは少女に敵意がない事を示す快活な笑みを浮かべてみせる。
それを見て、少女は徐々にユウキ達に対する警戒をわずかにだが緩めていった。
だが少女は、不意にユウキ達の頭上を見やると、困惑の表情を浮かべ始めた。
「……何なの、あなた達の頭のそれ…？　というか、ここはどこなの…？　私、私は……どうしてこんな所に」
「……頭の上？　カーソルの事？　あと、ここは《アインクラッド》第二十二層南南東の村《コラル》だけど」
頭を抑え、困惑の声をこぼす少女に、ユウキが訝しげに首を傾げて応える。
やはり転移の失敗で、何処かもわからないような場所に転移してしまったのだろうか、とそう考えて。
しかし、少女が返した返答は、ユウキの想像を遥かに超えたものだった。
「かーそる？　あいんくらっど？　だいにじゅうにそう？　それ何の事？」
「ん？」
「え？」
眉を寄せ、本気でわからないと言った様子で聞き返してくる少女。
ユウキだけではなく、キリトやアスナも目を丸くし、座り込んだままの少女をまじまじと凝視してしまう。
「…一応確認するけど、ＳＡＯって聞いたことある？　正式には、ソードアート・オンラインのことなんだけど」
「…入ったらもう出られない、ＶＲのゲームのことでしょう？

ニュースでやってたのは見たわ」
「ソレがココだね」
「……え？」
少女の戸惑いの表情が、徐々に引き攣り恐怖に歪んでいく。
少女は慌てた様子で辺りを見渡し、次いで自分の格好を見下ろし、やがて呆然と肩を落としてしまう。
「ここが…ＶＲ…⁉　私の服まで変わってる⁉」
「えっとさ…こっちもいろいろ確認させてほしいんだけど、いいかな？」
信じられない、といった様子で固まる少女に、ユウキもまた困った様子で尋ねる。
多くの人々の注目を浴びながら、ユウキはひとまず彼女を自分が借りている宿に連れていく事に決め、彼女を伴って歩き出した。
――それを人混みの中から見つめる怪しい人物に、誰も気付く事はなく。

―16―　Ｎｅｗ　ｃｏｍｅｒは突然に！②

「記憶喪失…だネェ」
　ベッドの上に腰かけさせた少女を前に、アルゴが呟く。
　急遽借りた宿の一室にて、少女を囲んで四人の少年少女が険しい表情を浮かべる。少女自身も、告げられた言葉を反芻しながら眉間にしわを寄せていた。
「何があったのかはわからないケド…脳に何らかの衝撃が加わっテ、記憶が混濁しちゃってるんだろうネ。何かこう、ＶＲ関連デ」
「…正直記憶喪失とか、マンガとかアニメでしか見たことがないな」
「私も…」
　少女――――シノンという名がカーソルに表れている彼女を凝視し、キリトとアスナが呆然とした様子で呟く。
　創作上では数多く目にする状態異常だが、実際に目にするとは夢にも思わなかったため、どうしても無遠慮に本人を見つめてしまう。
　少女もまた、自身の頭上のカーソルを見上げたまま、唖然とした声を漏らしていた。
「まだ信じられないわ…私があのデスゲームの中にいるなんて」
「直前に何やってたかも覚えてないのかイ？」
「ええ…何も思い出せないわ」
「う～ん…」
　さすがに世界的ニュースについての記憶は残っていたらしく、少しの怯えを滲ませながらシノンが顔を伏せる。
　不安げな彼女をじっと見つめ、考え込んでいたユウキは、一度シノンの頭上のカーソルを見上げ、口を開いた。
「名前とかはシノンであってる？」
「いいえ、私の名前は浅田詩乃で……」
「ああ、うん！　この世界で本名はやめとこうか！　取り敢えず上に出てるシノンって名乗っとこう！　ね⁉」
　案の定、ネットマナーについて理解できていない事がわかり、慌てて止めるユウキ。こんな危うい立場の少女の個人情報の流出など、許

すわけにはいかない。
　ユウキは強く息を吐くと、落ち着かなさそうに目を伏せるシノンの肩を叩き、にっとやさしい笑みを浮かべてみせる。
「とりあえずはここで落ち着くまで待ってなよ。何かあったら力になるから」
「…そう、ありがとう…」
「キリト、しばらく隣にいてあげて。ボク、ちょっとアスナ達と話してくるから」
「⁉　よりによって俺がかよ……」
　アスナとアルゴの肩を叩き、部屋の出入り口に向かうユウキに頼まれ、キリトがぎょっと目を見開く。
　片や不埒者と勘違いして殴った側、片や置換扱いされて殴られた側と、気まずい関係になってしまった二人が、恐る恐る視線を絡ませる。
　ぎこちない雰囲気に陥った部屋を後にし、ユウキはアスナとアルゴに険しい顔で向き合った。
「…今はあの子を一人にさせるほうが危ないわ。しばらく様子を見ましょう」
「うん…あのままじゃいつ敵キャラにやられちゃうかわかったもんじゃないもんね」
「それもだケドネ…」
　いきなりデスゲーム世界に閉じ込められ、右も左もわからない少女を放っておくわけにもいくまい、とアスナの言葉にユウキが頷く。
　だが、アルゴはまた異なる理由で少女の事を案じていたらしく、首を横に売ると辺りを気にし、やがてユウキの耳元に口を寄せ出した。
「ユウちゃんは知ってるかイ……〝レッドプレイヤー〟の噂」
「⁉」
　はっ、とユウキは顔色を変え、アルゴを凝視する。
　プレイヤーを示すカーソルは、ある要因で色を変える仕組みになっている。
　すなわち、殺人や強盗等の犯罪を犯したか否かである。
　誰とも争った事のないプレーヤーのカーソルは緑のまま、罪を犯し

た経験のある者はオレンジに変色する。
そして好んで殺人を犯すプレイヤーは、レッドと呼称され恐れられていた。
「レッドって…『殺人』を犯したプレイヤーってこと⁉　本当に⁉」
「確かな筋で事実だと確認済みだヨ。確実に一人、同じプレイヤーの手によって殺されてル…モンスターやトラップに殺されたわけじゃなイ、悪意を持った人間に殺されたんダ」
「そんな…！」
あまりにも聞き捨てならない話に、ユウキは怒りと共に悲しみを抱く。
本当ならば、多くの人々が一丸となってゲームクリアの為に戦うべきなのに、それを妨害するような悪意を振りまく者がいるのかと。
「ここは間違いなく現実なのに…何でそんなこと…！」
「ある種の現実逃避か…それとも何かのきっかけでタガが外れたのか…少なくとも、私たちには理解できない思考よ」
拳を握りしめるユウキに、アスナは首を振って肩を竦める。
彼女もレッドプレイヤーに対する義憤を抱いているようで、誰もいない虚空を睨みつけている。
しかし、今この場で彼女達にできる事は何もない。
危険な思考の持ち主達が、この世界に確実に存在しているという事実を認識し、注意する事しかできない。
悔しさが滲み出て、少女達は荒いため息をついて目を伏せる。
「とにかく…あの子を一人にさせないことね。精神的にも今、不安定になってるみたいだし。私もなるべくサポートするわ」
「オイラも話ぐらいは聞くヨ」
「うん、ありがと、アスナ」
アスナとアルゴの提案に頷き、ユウキは部屋の扉に向き直る。
なるべく、先程の怒りがまた顔に出てこないように気を付け、平静を取り繕いながら再び入室する。
「おっまたせー！」
気分を切り替えるため、わざと元気よく声をかけて中に入ると、キ

リトがあからさまにホッとした様子で肩を落とした。
狭い部屋に訳ありの少女と二人きりにされて、相当落ち着かなくなっていたらしい。
ひらひらと手を振って詫びつつ、ユウキは再びシノンの前で椅子に腰かけ、向かい合った。
「さっき、あの人と何の話してたの？」
「君の今後について。ぶっちゃけ今の君、ゲーム世界で序盤と中盤の段階にレベル1状態で放り込まれた上に、マニュアルも読めてない縛りゲー状態なんだよね……な、の、で」
そう言って、にやりとユウキが笑い身を乗り出す。
ずいっと鼻先が当たりそうな距離まで顔を寄せてきた少女に目を丸くし、シノンが息を呑む前で、ユウキはある提案を口にした。
「しばらくボク＆キリトと一緒に行動するのはどうでしょうか！……っていう話さ！」
「はぁ⁉」
ユウキの誘いに、シノンではなくキリトが声を上げて腰を浮かす。
非力な、覚悟が何もできていない少女を放っておけないと思っていたのは彼も同じだったが、しかし一緒に行動するとは一言も言っていない。
勝手に人を勧誘し出すユウキに苛立ちを覚え、キリトは思わず鋭い目を向けて迫る。
「おい、何で俺まで……！」
「君もさー、いい加減ソロで行くのはきついでしょ。意地はってないでパーティー組もうよ、ね？」
「意地なんてはって…」
「はいはい、ぼっちさんはちょっと黙っててねー」
「おまっ……！」
ぼやくキリトを押しやり、無理矢理黙らせるユウキ。隣でアスナが呆れた目を向け、アルゴが肩をすくめている事を知りながら、なおも一人でこの世界を生き抜こうとしている少年に咎めるような目を向ける。

先程のアスナ達の話を聞いて、彼を放置する事などユウキにはできなかったのだ。
そんなユウキ達のやり取りを、ぽかんと呆けた顔で眺めていたシノン。
だが、彼女は胸のあたりを抑えたかと思うと、悲しげに目を逸らしてしまった。
「…ごめんなさい。それは、できない」
シノンの返答に、言い合っていたユウキ達ははたと固まって、シノンをじっと凝視する。
何故、と言わんばかりの表情で見てくる彼女達から、申し訳なさそうに目を逸らし、シノンはグッと唇を噛んで俯く。
「あなた達がいい人だってことはわかるわ…けど、全部を預けるのは、むり…」
はっきりとした拒絶、というよりも見えない壁を作っているように見えるシノン。手を取りたいという考えはあるようだが、今一つ一歩踏み出せない様子に見える。
不安げに身を縮こまらせるシノンを見つめていたユウキは、やがて小さくため息をついた。
「…何か、あったんだね」
「ごめんなさい、たくさん助けてもらっておいて…」
「いーよいーよ、気にしないで」
険しい顔で頭を下げるシノンに、ユウキは両手を振って笑顔を返す。
キリトもアスナもそれはそうだ、というようにしつこく誘う事はせず、しかしやはり心配そうな視線を彼女に向ける。
大丈夫なのだろうか、と表情を曇らせる二人を背にし……ユウキが不意に小さく呟いた。
「……人に話したくないことってさ、結構あるからさ」
その場の誰にも届かないような、小さくか細い声。
しかし、少女の様子がほんの少し変わった気がして、キリトが訝しげな視線を向ける。

だが、しばらくするとユウキは顔を上げ、いつもの変わらない陽気な笑顔を浮かべて、シノンの肩をぽんぽんと軽く叩く。
「まー、それならあれだ。困ったことがあったらそっちから好きなときに連絡入れてよ。すぐ助けに行くからさ！」
「…あなた、ものすごく強引よね」
「いつもこんなんだぞ」
「それがユウちゃんの魅力だと思うけどネ」
関わるのが不安だから距離を取ろうとしていたシノンに対し、やはり助ける事を諦めないでいるユウキ。
シノンだけでなくキリト達も呆れた目を向ける中、シノンはふっと、安堵したような笑みを浮かべた。
「…そうね、覚えておくわ」
少しだけ、シノンの作っていた壁が薄くなったような気がして、ユウキもホッと息を吐く。
そこでふと、ユウキがぽんっと掌を叩き、キリトとアスナ、アルゴに振り向いた。
「あ、そうだ！　チュートリアルだけでもボクらでやってあげようよ。多分だけどシノン、メニューの開き方もわかってないよね？」
「メニュー？」
「ほら、初歩の初歩からつまづいてるもん」
「…確かに、ここで生きる上での最低限の知識は必要そうだな」
首を傾げるシノンを見て、ユウキのいう事にも一理あるとキリトが頬引き攣らせる。
ゲームにおける、基礎の動きだけでも教えておかなければ、生き残るどころか何一つすることができない。
キリトの同意を得たと受け止めたユウキは突如、呆けた顔で座っていたシノンの手を引っ張り始めた。
「んじゃ、早速フィールド行こっか！　何事も実践あるのみ、ってね！」
「え？　え⁉？」
「待って待って、待ちなさいユウキ。いきなり本番って、どれだけスパ

ルタな指導をするつもりなのよ」
本人の同意も得ないまま、ユウキがシノンを外に連れ出そうとする。
さすがに速すぎるのではないか、とアスナが止めに入るも、やる気になったユウキは聞き入れる様子がない。
その様子に、シノンを見つめて考え込んでいたキリトが、ユウキの身を案じて囁きかける。
「ユウキ、同情する気持ちはわかるが、あまりのめり込むのは…」
「いーのいーの。……キリトだって、放っとくつもりはないでしょ？」
自分一人が生き残るだけでも難しい様な世界で、他人の今後まで背負えるのか、とキリトが忠告する。
だがユウキはそれに、真剣な表情で首を振り、キリトに囁き返す。
途中で投げ出す事を考えていない、真剣な少女の眼差しに、天を仰いだキリトは神を掻きむしり、ため息とともに肩を落とす。
「あー…わかった！　俺も付き合ってやる！　だからあんまり無茶させるな」
「キリトならそう言ってくれると思ってたよ。やったねシノン！　コーチが増えたよ！」
「頑張れヨ、キー坊」
ユウキ達を案じたキリトも渋々付き合う事を決め、狙い通りだと笑うユウキにアルゴがやれやれと肩を竦める。
シノンはそれを、不思議そうに見つめるばかりだった。
へらへらと目尻を下げ、一切気負っていない様子のユウキを見て、困惑の眼差しを向ける。
「……どうして、私にそこまで」
「ん？　んー、なんていうかさ……」
見ず知らずの他人の為に、どうしてそこまでできるのか。
あたり前の質問をぶつけられたユウキは、顎に手をあてて考え込み、しばらくして得意気に肩眉を上げてみせる。
「助けられる人は、なるべく助けておきたいな…って、思っててさ」
そんな、子供っぽい正義感のような、偽善と捉えられかねない言葉

を平然と吐くユウキに、シノンはまた絶句する。
自分の質問の答えになっていない気がして、真意を探ろうと目の前の少女の瞳を覗き込もうとする。
だが、ユウキは急に咳ばらいをし、シノンの視線から目を逸らしてしまった。
「んんっ！　さーさー考えるのは後にして！　とっととフィールドに行こう！　この近くならビギナー向けの敵キャラが何種類かいるはずだしね！」
「だから待て待て！　はやまるな！　まず説明からだってさっき言ったばかりで……」
「ちょ、ちょっと！　私まだ行くって言ってないんだけど⁉？」
返事も聞かず、ぐいぐいとシノンとなぜかキリトの手も引っ張って、宿屋を飛び出していく。
二人から抗議の声が上がるのも気にせず、一番近く、危険が少ない草原に向けて思い切り走る。
幼い、元気いっぱいの子供のような姿を見せるユウキに、一人老いていかれたアスナは、やれやれと腰に手をあててため息を吐く。
「まったく……騒がしい子達なんだから」
「行ってらっしゃ～イ」
そんな、母親のような一言をこぼしながら、アスナも彼女達の後を追い、小走りでフィールドへと向かっていく。
忙しく駆け出していった彼女達を、アルゴはひらひらと手を振り、にこやかに見送るのだった。

―17― Ｎｅｗ ｃｏｍｅｒは突然に！③

「ふぅっ…んっ！」
気の抜けた掛け声とともに、振り上げた剣が空を切る。
刃はへろへろと頼りない軌跡を描き、目前の青い猪に迫るも、容易く躱されザクッと地面にぶつかるだけで終わる。
それだけではなく、攻撃された猪は鼻息荒く振り返り、剣の持ち主である少女に向かって突進を始めた。
「ブルッ…！　ブキィィッ!!」
「ひぃっ!?」
砲弾のような勢いで迫り来る青い猪に、シノンは悲鳴をあげて思わず尻餅をついてしまう。
避ける事も逃げる事もできなくなってしまったシノンに向け、猪が容赦なく牙を振り上げ、無防備な腹に強烈な一撃を叩き込もうとする。
「あらよっと」
「ピギィッ!?」
しかし、その寸前で割り込んだ紫の影が剣を一閃し、猪の胴を叩き斬る。
猪は甲高い悲鳴をあげてのけぞり、やがて青いポリゴンの欠片となって砕け散る。
キラキラと宙に溶けていく青い欠片を見上げ、剣を肩に担ぐと、ユウキはシノンに意地の悪い笑みを浮かべてみせた。
「いやー、いやいや……見事なへっぴりごしだったね～」
「ぐっ……」
自分でもかなり情けない姿を見せたと自覚があり、シノンは頬を赤く染めて目を逸らす。
腰が引け、力も入っていない剣撃など、子供でも避けられるだろう。
わかっているからこそ、他人に言われるのは無性に気になった。
「仕方ないじゃない！　剣や斧を振り回すなんて事、生まれてこのかたやった事がないのに！」

「そりゃそうだ」
「…こっちの人達は、ほとんどみんな体で覚えちゃってるんだけどね」
恥ずかしさを誤魔化すように抗議の声を上げるシノンに対し、ユウキはけらけらと気楽に笑う。
キリトとアスナだけが、シノンに同情の視線を向け、どうしたものかと頭を回らせている。
そもそもが刀槍剣戟の世界で戦うゲームなど、しようとさえ考えなかった初心者だ。十分に戦えるようになるまで、どれだけかかるか。
「この辺の敵キャラは大抵がスライムレベルだし、初心者のシノンには妥当だと思ったんだけど……道は長くて険しそうだねぇ」
「言い出しっぺはお前なんだから、しっかり最後まで面倒見ろよ」
「そんなペットじゃないんだから……」
他人事のように語るユウキに、巻き込まれた立場にあるキリトがじろりと冷たい目を向ける。
注意勧告のつもりで口にした彼の言葉には、今度はアスナがやや困った顔で待ったをかける。本人を目の前にしてのこの言い草は、流石に見逃せなかった。
息を整えている間に言われ放題だったシノンは、ムッとした様子でユウキ達を睨み、やがて挑発的に笑ってみせる。
「だったら、じっくりレッスンしてもらえるかしら？　そこまで言うんだったら、さぞ素晴らしい剣技をお持ちなんでしょうね？」
「あたぼうよ！　じっくり教えてやるからしっかり見ててよ？」
あからさまな誘いに、ユウキは喜んで剣を抜き、手頃な獲物を探しに向かう。
それをふんと鼻を鳴らしながら眺めるシノンに、キリトが遠慮がちに話しかけに行く。
「……あの、考え直した方が」
「？　何よ、手本ぐらいないとわからないじゃな――」
何を止めようとしているのか、とシノンが振り向きかけたその時。
ゴウッ！と。
ある一体の青い猪を前にしたユウキが、凄まじい速度で刺突を繰り

出し、相手の全身に赤い跡を刻みつけていく。
目にも止まらぬ、流星のような連撃を受けた青い猪は、苦悶の様子を残して粉々に砕け散る。
一連の戦闘、一度の瞬きとほぼ変わらない速さで終わったそれを目の当たりにし、シノンは呆然と立ち尽くしてしまった。
「……言うだけあって、速いわね」
「ああ、そうなんだよ……やる分には凄いんだ」
「？　どういう事？」
素直に感嘆の言葉を吐くシノンに、キリトが何とも言えない難しい顔で呟く。
訝しげに振り向いた彼女の元に、剣を鞘に収めたユウキが戻ってきて、得意げな顔で喋り始める。
「えっと今のはね、こう…ズバッとやって、ズザザッ！って感じで剣を突き出して、そのあとしゅぱってして引っ込んで――――」
身振り手振りを交えて、一生懸命に自分の剣技について語り出すユウキ。
しかし、語られる内容は擬音語ばかりで要領を掴めず、動きは独自の物ばかりで理解がしづらい。
真剣に話を聞こうとしていたシノンは、すぐに困惑の表情に変わった。
「…え？　え？　何？　もう一回言って？」
「わかっただろ……ユウキはな、なまじ物事を身体で覚えるもんだから、説明がどヘタクソなんだ」
「ウソでしょう…!?」
この特別指導の責任者たる人物が、指導能力が壊滅的だと知り、シノンは愕然と目を見開き棒立ちになる。
キリトもアスナも申し訳なさそうに目を逸らすだけで、身内の恥を晒す事となり、それ以上何も言えなくなってしまう。
三人が固まったまま黙り込む様に気付く事なく、一通りの説明を終えたユウキが満面の笑みを浮かべて振り向く。
「――――って感じ！　わかった？」

「「わかるか‼」」
直後、多くの青い猪が寛ぐ草原に、シノンたちの怒号が響き渡るのだった。

「むー、なんで誰もボクの説明で理解できないのさー！」
「……あれで理解しろって方がむずかしいわよ、ユウキ」
頬を膨らませ、半目で友人達を睨むユウキ。
自身の指導能力の欠如を自覚していない彼女に、若干信じられないものを見る目でアスナが告げる。
しかし、ここまで言っても尚、彼女は自身の血管に気付いている様子はなく、アスナは深いため息を吐くばかりであった。
「剣はダメみたいだな……身体が振り回される。慣れればなんとか行けるかもしれないが、それじゃ遅い」
「……重ね重ねご迷惑を」
「いいって、気にするな。…あとで何か適した武器を探すといい」
始終、うまく武器を扱う事ができなかった事を思い出し、自身を情けなく思う気持ちを募らせるシノン。
そんな彼女の肩を叩き、キリトが慰めの言葉をかける。
βテストで経験を積んだ自分とは異なり、彼女は初心者も初心者。急に自分達と同じくらいうまくできるはずがないのだ、と。
「こうなったらさ、もう銃とか弓とかあったらよかったのにね！　それなら多分、力とかいらないんじゃない？」
「…お前、舐めすぎだろ。警察の訓練とか何だと思ってるんだ」
「あれはあれで、相当な訓練がなければ使いこなせないと思うわよ？」
「えー、そうかな？」
自分の思い付きを自慢げに語るユウキに、キリトとアスナからこの日何度目かの冷めた目が向けられる。
提案を即座に否定されたユウキは、唇を尖らせ不満をあらわにしていたが、不意にシノンの方を向いて声をかける。
「シノンもそう思わない？　こっちの方がいいって……パーン！　ってね！」

人差し指を立て、銃に見立ててから撃つ動作をしてみせる。
彼女にしてみれば、友達同士でやるような軽い冗談の仕草であり、新たな友人の気持ちをほぐすつもりでやってみせた行為だ。
だが、ユウキがそれを行った直後、シノンは顔色を真っ青に変え、ぶるぶると身体を震わせ始める。
ぎょっと目を見開くユウキ達の前で、シノンはその場に膝をついてしまう。
「……え、あれ!? ちょ……シノン、大丈夫!?」
「どうした…? しっかりしろ!」
「…! ご、ごめんなさい……ちょっと疲れが出ちゃっただけみたいだから」
駆け寄るアスナに、荒い呼吸を繰り返しながらシノンが首を振る。
明らかな異常を無視する事などできず、肩を何度も上下させるシノンの背中を優しく撫でる。
急な事態に呆然となっていたキリトは、やがて隣のユウキに咎めるような目を向けた。
「おい、ユウキ…」
「え、いや……ボクの所為かなこれ!? ご……ごめーん!」
慌てるユウキだが、自分が話した直後にこのような事態になったのだから、まず彼女の所為である可能性が高いと、キリトがじとりと睨みつける。
すぐさま手を合わせ、シノンの深々と頭を下げるうユウキを横目に、シノンは震える自身の手を見下ろし目を細める。
「……やっぱり、ここにきてもダメなのかしら……?」
小さくこぼれた呟きは、その場の誰の耳にも届く事はなかった。

やがて日は暮れて、多くのプレイヤーたちが借りた宿屋に戻る頃合になり。
ユウキ達も約半日を使った指導を一旦終え、その日の疲れを取りに宿に戻ろうとしていた。
だが、四人は無言で町を歩き、何処か気まずげな空気が漂っている。

明らかに何か間違ったことを察したユウキは、頬を引きつらせて小さく呟いた。
「……なんか、全然役に立てなかった気がする。なんで？」
虚空を見上げ、自分の行為が他人を助けるどころか心に負担を重ねた気がすると、自身への不甲斐なさで思わず天を仰ぐ。
そんな彼女に、心底疲れた様子を見せるキリトが、深いため息とともに言葉を吐いた。
「結局、俺とアスナで教えたし……言い出しっぺのくせして何してんだよ」
「だからさー、ズバッとやってズザザッ！でしゅぱっ！なんだってば」
「とりあえずその擬音語使った説明はやめろ」
何度聞いても理解ができない説明に、げんなりと肩を落とすキリト。
本人が一生懸命に技術を教えようとしているのはわかっているのだが、わからなければ意味がない。
あまり厳しいことを言いたくはないのだが、止めなければ彼女一人が満足する結果にしかならなそうだった
「なんか……あんまり力になれなくて悪かったな」
「ううん、気にしないで。こうして付き合ってもらってるだけで、随分助けられてるから」
不甲斐なさそうに頭を下げるキリトに、シノンはうっすらと笑みを浮かべて首を横に振る。
そうしてから、シノンは自分の腰に佩いた剣を見下ろし、不満げに眉間にしわを寄せると、小さくため息をこぼす。
「だけどやっぱり、剣は苦手だわ……短剣とかなら、多少はマシだけど」
「今度、シノンの手に馴染む武器でも探しに行こうか。あ！　お金はボクが出すから気にしないでね⁉？　二人は出さなくていいからね⁉？」
小さな呟きを微塵も聞き逃さず、シノンのすぐそばに駆け寄るユウキ。

驚いて後退る彼女の方にぐいぐいと詰め寄り、必死の形相で腕まくりをしてみせる。引かれているのも気づいておらず、眼がぐるぐると渦を巻いているように見えた。
煩く喋り続ける紫の少女を見やりつつ、キリトとアスナは同時に肩を落とした。
「…ほぼ役に立たなかった事、気にしてるみたいだな」
「必死ね…」
滑稽に見えるどころか、いっそ憐れみさえ誘う姿を晒すユウキに、キリトとアスナが切なげに目を細める。
それに気づき、はっと目を見開いたユウキは居住いを正し、わざとらしく咳払いをしてみせる。
「んんっ……まぁとにかく！　シノンの今後はしっかり考えよう。色々マジで危ないせかいだから、きちんと考えなきゃいけない。いいね？」
「ああ、わかった」
未だ生温かい眼差しを向けてくるキリトとアスナに確認し、期待通りの返事が返ってきたことで満足げに頷く。
やがて、一同は目的地に、シノンの為に借りた宿に到着し、部屋の入り口前で一旦立ち止まる。
鍵を手にドアに手をかけるシノンに、ユウキが手を振りにっと笑う。
「じゃあシノン、おやすみ！　ここの宿はボクの奢りだからね！　また明日レッスンするからね！」
「ええ…わかったわ。あと、アルゴさんにもよろしく」
「ああ……あいつ先に帰ったらしいから、礼を伝えておくよ」
まだ少し不安気に、しかし最初のころよりはマシな顔になった師のんが頷き、ドアにカギを翳して解錠する。
入室するシノンを見送り、肩を竦めたユウキ達は、踵を返し自分達の宿に向かって歩き出す。
その時、閉じられようとした扉が再び開き、シノンがもう一度顔を出した。

「キリト！　アスナ！　…ユウキ！」
「ん？」
「何だ？」
　立ち止まったユウキ達に、口を開いたシノンははたと止まる。
　もじもじと落ち着かない様子で、ドアの陰に隠れながら視線をあちこちに彷徨わせ、その後何度も深呼吸をする。
　そして、頬を真っ赤に染めて、小さな声で告げた。
「その…えっと…あ、ありがとう」
「……ああ、そうだな…どういたしまして」
　素直になれない女の子そのままの姿で礼を言う少女に、キリトはぎこちなく頷き、急ぎ踵を返し歩き出す。
　彼の態度を見ていたユウキとアスナは、やれやれというように肩を竦め、キリトの隣に追いつくと横腹をつつき始めた。
「キリトってば、本当にコミュ力ひっくいんだからもー」
「うるさいっての…！　言われ慣れてないんだよ……こういうのは」
「うん、やっぱりあなたはぼっちね」
「やめろっての！」
　左右から投げつけられる揶揄いの言葉に、目を吊り上げて声を荒げる。しかし照れを示す淡く染まった頬のせいで、殆ど迫力というものがなくなっている。
　わいわいと騒ぎながら、夕日の街の中に溶けていく三人の姿を見送りながら、シノンはフッと呆れた様子のため息をついた。
「本当……お人好しばかりなんだから」
　そう呟きながら、しかし胸の内に宿る温かいものを自覚しつつ、宿屋の部屋に入る。
　明日も指導に付き合う、というユウキ達の誘いにほんの少しだけ期待を抱き、やわらかな笑みを湛えて寝具に横たわるのだった。

　……しかしそんな彼女を、物陰から覗く二つの人影があった事に、シノンは気づかないでいた。
『さぁ、始めようか…！』

「――Ｉｔ☒ｓ　ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ．」
不気味に響く、二つの男の声。
悍ましく、大きな悪意のこもった言葉を残し、謎の人影は夜に近づく町の闇の中に消えていった。
☒
――あくる朝の、ある宿屋の一室にて。
ベッドの上で心地よさそうに寝息を立てていたユウキは、不意に聞こえてきた笛のような音に薄く瞼を開いた。
「んんん……？」
眼に差し込んでくる朝の光に、唸りながら眉間にしわを寄せ、断続的に鳴り続ける音の正体を探ろうとする。
そしてやがて、メッセージが届いた時になるように設定してある通知音である事に気付く。
「なんだよ、うるさいなぁ……って、ああそうだ。今日はシノンのレッスンするって約束してたんだった。ヤバいヤバい…」
おそらくは、自分が寝過ごさないようキリト達がメッセージの通知音を目覚まし時計代わりにしているのだろう。
寝ぼけ眼で起き上がり、メニューを開いてメッセージを返そうとする。
しかし、徐々に覚醒し始めた彼女の脳は、寝坊寸前の自分を起こすには過剰な程のメッセージの量を訝しむ。
ここまで信用されていないのか、と思いながらメッセージの一つを開き、内容を確認する。
「…ん？『起きろ』『早くして』『ぐずぐずするな』『急いで、お願い』……何だこの内容――はぁ⁉」
ずらりと並ぶ大量のメッセージに顔をしかめつつ、短い文の下の方に埋まっている一番最初のメッセージを探す。
そしてようやくそれを見つけ、中身を確認したユウキは、ガバッとベッドの上で立ち上がり、眼を見開いた。
「シノンが攫われたぁ⁉」

―18― Ｎｅｗ ｃｏｍｅｒは突然に！④

ユウキ達が宿を借りている町の中心、十字路の隅でキリトとアスナが佇んでいた。
キリトは肩を組んで建物の壁に寄りかかり、アスナは辺りを見渡して、二人と持ちつかない様子を見せる。
なかなか現れない待ち人に苛立ちながら、呼び出した少女の到着を待つ。
そして、ようやく慌てた様子で駆け込んでくる待ち人の姿に、二人は同時にため息をこぼした。
「…やっと来たのか」
「ちょっとキリトにアスナ！　シノンが攫われたってどういう事なのさ⁉」
「言葉の通りよ……完全にしてやられたわ」
血相を変えて詰め寄るユウキに、アスナが腹立たしくて仕方がないといった様子で応える。
彼女はおもむろにメニューを開くと、アイテムの欄からあるものを取り出し、ユウキに見せる。示された八面体のそれに、ユウキは訝しげに首を傾げた。
「部屋に行っても誰もいなかった……代わりにこれが残されていた」
「スフィア？」
困惑の眼差しを向けるユウキに、アスナは無言でスフィアをつつき、起動させる。
【――よぉ、真面目な偽善者プレイヤーの諸君……】
スフィアが光を放ち、次いで聞き覚えのない男の含み笑いが聞こえてくる。
あからさまに人を馬鹿にしたような、悪意のたっぷり詰まったその声に、自然とユウキの表情が険しくなる。
【残念だが、お前さん方のお友達は俺達が預かってるぜ。なに、まだ死んじゃいないが……時間の問題かもなぁ】
挑発的な言葉に、意味がない事だとわかっていても、ついスフィア

に向かって一歩踏み出してしまうユウキ。
それを片手で制すキリトだが、彼女の顔も嫌悪で歪んでいて、声の主に対する怒りを堪えている事がわかり、ユウキは渋々引き下がる。
興奮する二人を横目に、アスナはただ黙ってスフィアを睨み、発せられる男の声に耳を澄ましていた。
【こうしてわざわざ置き手紙を残したのは、ちょっとしたゲームを提案したかったからさ】
「ゲームだと…⁉」
【ルールは簡単だ……この階層のどこかに隠れている俺達を探し出し、お友達を救い出せばお前さん方の勝ち。制限時間内に見つけられなければ、お前さん方の負け……お友達はポリゴンの破片になってＴｈｅ　ｅｎｄだ】
声を聞くだけでも、送り主の醜悪な笑顔が視界に浮かび上がるかのようで、アスナの表情も険しくなっていく。
ぎり、と歯を軋ませながら、顔の見えない狂人に怒りを燃やす。この、ただでさえ命が死と近くなりやすい世界において、あまりにも凶悪過ぎる思考の持ち主だ。
「何がゲームだ……本気で人殺しをするつもりか⁉」
【はっ、何でこんな事を？　って聞きたげな視線を感じるな……理由はそうさな、その方が楽しそうだからだ。わかりやすいだろう？　Ｂｏｙｓ　ａｎｄ　ｇｉｒｌｓ.】
声の主はまるで、ユウキ達がどんな顔をしているのかわかって録音をしているかのようで、それがますますユウキ達を苛立たせる。
しかし、この場にいない相手を殴り飛ばすことなど不可能であり、ただ力のこもった拳を握りしめる事しかできずにいた。
【午後６時まで、せいぜい地獄を楽しむがいいぜ。フクロウが鳴き始めないうちにな……Ｉｔ☒ｓ　ｓｈｏｗ　ｔｉｍｅ.】
そんな、意味の分からない言葉を最後に、スフィアは光を失い、アスナの手元に戻る。
しん、と静まり返る中、がんっ！と音が響く。
目を吊り上げたユウキが、荒れ狂う自身の感情を抑えきれなくな

り、手近にあった建物の壁を殴りつけたのだ。
「くそっ！　何を考えているんだ、こいつは⁉」
「ここまで堂々と挑発してくるなんて……真っ当な精神の持ち主じゃないわ。だけど……こいつの事は後回しでいいわ」
怒り狂うユウキを他所に、アスナは比較的冷静に思考する。
音声の送り主の狂いぶりは勿論の事だが、今は何よりも攫われたシノンの行方について考えるべきである。
だが、このような相手がどこに友人を隠すかなど、アスナには想像する事もできなかった。
「どうしたらいいの…⁉　こんな広大な世界で手掛かりも無しに、それも日が暮れるまでに一人の女の子を探すなんて…‼」
このままでは、知り合ったばかりの友人まで魔の手に掛かり、帰らぬものとなってしまうかもしれない。
一刻も早く、助けに行かなければならないのに、居場所が全く見当がつかない。
どうすればいいのか、と頭を抱え、深く悩むアスナの耳に、はっと息を呑む少女の声が届いた。
「……いや、そこまで悲観する事はないようだ」
「え…？」
「ゲームをするというのは本気らしい……あいつ、一言だけヒントを残していったんだ」
確信を持った表情で、頷くキリト。
キッと引き締まった表情で、ユウキとアスナを見つめる彼に、二人は困惑しながらも微かな希望を抱いた。
☒
暗い、夕日が全く差し込まないような深い森の中。
高く聳え立つ木が万人のように周囲を取り囲んでいる空間の中心で、ぎしぎしと音が響く。
両手と腰を纏めて縄で縛られ、身動きの取れなくなったシノンが、藻掻きながらちっと舌打ちをこぼした。
「くっ……！　まさか、ゲームの中で誘拐されるなんて、思いもよらな

かったわね」
「そりゃまた災難だったなぁ、Ｇｉｒｌ？」
悔しげに虚空を睨む少女の元に、一人の男が不気味に嗤いながら近づいていく。
ぼろぼろのポンチョコートで全身を隠した、年齢も顔立ちも不明な謎の男。
シノンを攫い、ゲームと称してメッセージを残したその男は、にやにやと口角を上げてシノンの顔を覗き込む。
「どうだい、気分は……いいわけがねぇけどな、ハハハ！」
じろり、と鋭く見つめ返すシノンに、男は気を悪くするどころか愉しげに声を上げて笑う。
会って一日も経っていない相手だが、シノンはこの男が非常に危険で、関わるべきではない人間であることを察していた。
この状況も含めて当然の話ではあるが、デスゲームの所為で気が狂ったわけでも、追い詰められた者というわけでもないのだと、そう感じ取っていた。
「……一体あなたは、何がしたいのかしら。こんな事、正気の沙汰じゃないと思うんだけど…？」
「Ｈａ……ゲームだよ。ただしプレイヤーは俺で、これからここへ来る奴らこそが駒（キャラクター）だがな」
上機嫌に話しかけてくる男から、シノンは少しでも距離を取ろうと身をよじる。
だが、そうした瞬間男はシノンに手を伸ばし、アイテム欄から取り出した鉈のような凶器を首元に突き付けてくる。
「動かねぇ方がいいぜ。下手に動けばお前さんを殺す……お前さんは待ってるだけでいい。なんせゲームの景品だからな」
「…勝手に人の命を賭けないでもらえるかしら…！」
机上に言い返すシノンだが、冷や汗は吹き出し、肩は震え、怯えが全身に表れてしまう。
あと少し、男が力を入れれば容易く首を刈り取ってしまう。そしてＨＰが全損し、ポリゴンの欠片となって、現実世界でも死を迎えてし

まうのだ。
目前に迫っている〝死〟を恐れながら、シノンはなおも男を睨みつける。
生死を握られていようとも、ただ怯え徹されるがままになる事は、彼女の矜持が許さなかった。
「イかれてるの…⁉　ここで死んだら現実世界でも死ぬのよ！　それをまだ信じていないっていう――」
相手がふざけている、あるいは現実から目を逸らしているものと考え、正気に戻そうと声を荒げる。
だが、そんな彼女に男が返したのは。
「知ってるよ。だからいいんじゃねぇか」
という、正気でありながら根本的に狂った、悍ましい一言だった。
ごくりと息を呑み、引き攣った顔で黙り込むシノン。
その時、森の奥から草木が擦れ合う音が響き、次いで三つの人影が飛び出し、シノンと男の元に姿を現した。
「――よぉ、よく来たなぁ。お友達はここだぜ」
「シノン…！　無事⁉」
「そう見えるかしら…！」
ユウキとキリト、アスナの登場に、男はまた笑みを浮かべ、身を案じられたシノンは皮肉を口にしつつも、内心で安堵の息を吐く。
ユウキは五体満足でいるシノンにホッと安堵し、すぐさま彼女の傍で凶器を構えている男を睨みつけ、剣を抜く。
「よくここが分かったと、褒めてやろうなかなかのタイムだったな」
「……お前が言っていた、〝フクロウ〟ってのが気になってね」
心にもない賛辞を口にする男に、キリトは険しい表情のまま答える。
音声を録音していたスフィアを取り出し、男の元に放り投げ、耐久限界を迎えて砕ける様を見せる。
「この階層の有名なクエストの名は……〈森の賢者の騒乱〉。フクロウ

型モンスターが守る秘薬を取りに行くって内容だ。だからそのクエストをこなすエリア……つまりボスの巣に近いこの場所しかないって思ったんだ。…そうだろ、Ｐｏｈ」
「Ｇｒｅａｔ…！　正解だ、Ｂｏｙ　ａｎｄ　ｇｉｒｌｓ．」
辿り着いた答えについて語り終えると、男――――Ｐｏｈは手を叩きながら少年少女達の健闘を称える。
本気でこの状況を愉しみ、面白がっている様を見て、ユウキ達の怒りはさらに燃え上がる。命を賭けの代償にした狂ったゲームに付き合わされ、苛立ちはとっくに限界に達していた。
「おい、お前！　こんなことやるなんて何考えてんだ！　拉致監禁なんて完全に違反行為どころか犯罪だぞ！　わかってんのか⁉」
「ククッ……当たり前じゃねぇか、Ｌｉｔｔｌｅ　ｇｉｒｌ．」
「……え？」
声を荒げて怒りを見せつけるユウキに、Ｐｏｈは小馬鹿にするような態度でかえし、少女達を困惑させる。
Ｐｏｈは気にすることなく、まるで部隊役者のように大仰に手を広げたまま、シノンの周りを歩き回る。
その間もちらちらと凶器が掠り、シノンがびくびくと身体を震わせる。その様すら、狂人は心の底から愉しんでいた。
「こんな面白ぇ遊び場があるってのに、わざわざお行儀よく遊ぶなんてもったいねぇと思わねぇか？　何だってできるオモチャなんだからよ…！」
「……お前、何を言ってるんだ」
「せっかくわざわざ来てやったんだ。楽しませて貰わなきゃ損じゃねぇか‼」
意味深な一言に、キリトがぎょっと目を見開く。
「さてはお前だな…！　殺人《レッド》プレイヤーってのは‼？　Ｐｏｈとかいうお前！」
「ご明察……人殺しが楽しくて仕方がないわる～い大人達だよ」

Ｐｏｈは鉈を横に薙ぎ、シノンの頬に一筋の赤い筋を刻んでみせた。
「ひっ……キャアアアア!!」
「シノン！」
顔を刃が走ったという事実に、シノンが目に涙を溜めて悲鳴をあげる。
痛みはなく、少しＨＰが減っただけだが、着実に近付きつつある死を前に落ち着いていられるはずもなく、縛られたまま暴れ出す。
どうにか狂人から離れようとして、まったく動けずないで恐慌状態に陥る少女を見下ろし、Ｐｏｈは悪魔のように顔を歪め、ユウキ達向けて叫んだ。
「さぁ、第2ゲームの開始だ。ここまで来て俺からこいつを取り返してみろ……残り3分までにできなきゃ、こいつは死ぬ。お前らの負けだ……Ｈａ！」
「野郎…ふざけんな!!　お望み通りそっちに言ってぶん殴ってや――――」
友人に、それも女の顔に傷をつけられるという最低な行為を目の当たりにしたユウキは、怒りに思考を支配され迷わず前に進む。
隣でキリトとアスナが呼び止める声が聞こえても構わず、ずんずんと荒々しい足取りでＰｏｈの方へ踏み出したその瞬間。
凄まじい轟音と共に、近くに生えていた木が吹き飛ばされ、ユウキに向かって降り注いだ。
「おわーっ!?」
「何だ!?」
慌てて飛び退るユウキの目の前で、半ばからへし折られた気がポリゴンの欠片に砕けて消えていく。
そして、大きく開けられた森の隙間から、大きく翼を羽搏かせる怪物が姿を現した。
見上げる程の巨体に、体格の倍以上の大きさを誇る翼。正面を向いた顔には、猛禽類の目が備わっている、フクロウのモンスターだ。
「こいつは……〈森の賢者の騒乱〉のボスキャラ!?」

「ゲームクリアまでには、妨害がお約束だろう？　そいつを退けてここへ来られりゃ、ゲームクリアだぜ……！」
フクロウ型モンスターの顔を見れば、見慣れたノイズが走り、オレンジ色の異形の顔が形成され始めている。
その上、眷属らしき小型の蝙蝠たちが飛び出してきて、ユウキ達を取り囲んでくる。
厄介な毒性を持つウィルスの再登場に、ユウキ達は険しい顔で身構える。
「まさかこいつもアレに感染するなんて……いや、問題はそこじゃない！」
「さぁ、ゲームの始まりだ……俺様を退屈させてくれるなよ？　ほら……あと２分３０秒だぜ」
『@＜；％＾］〔＋？＾＋＄〔］・＊＄――！』
にやにや笑うＰｏｈがそう呟いた途端、フクロウ型モンスターは大きく翼を羽搏かせ、ユウキ達に襲い掛かる。
四方八方から眷属が爪を振るい、隙を見せた途端にボスが飛び掛かってくる。一体を攻撃すれば他の者が攻撃してくるという、意地の悪い陣形が作られる。
だが、それだけ激しい害意を持った敵というのに、一体たりともＰｏｈに向かう個体はいなかった。
「なんだこいつ…⁉？　あいつに操られてるのか⁉？」
「そんなバカな…！」
まるで、狂気を抱いたあの男に汚染され、従っているかのようで、ユウキもキリトも背筋に怖気が走る。
何度目かの眷属達の攻撃を潜り抜け、周囲を慌ただしく飛び回る襲撃者達を睨みつけたユウキとアスナが、覚悟を決めた表情でアイテム欄を開く。
「こうなったら相手になってやる！　変身！」
「変身！」
【Ｉ，ｍ　ａ　仮面ライダー！】
ベルトを巻き、ガシャットを差し込んでスクリーンを抜け、コミカ

ルなキャラクターの鎧を纏うユウキとアスナ。
突然の変貌にシノンがぎょっと目を見開くのを他所に、ハンマーを手にしたユウキがキグルミ姿のままポーズを決める。
「ノーコンティニューで、クリアして……！」
「おおおお!!」
「…!?　ってちょっとキリト！　君は行っちゃダメなんだって！」
……が、決め台詞を言いきるより前に、雄叫びと共にキリトが飛び出してしまい、慌てて彼の後を追いかける。
剣を振るい、フクロウに斬りかかるキリトであったが、フクロウたちは軽快に宙を舞い、振るわれる斬撃を躱し続ける。
挙句、ボスモンスターに決して軽くない一撃を喰らわされてしまい、キリトは大きく吹き飛ばされる羽目になった。
「ぐはっ……！」
「だから言ったのに…あーもう!!」
ＨＰを欠損させられながら、草木の向こう側に消えるキリトを案じつつ、ユウキは苛立った様子で敵と向き合う。
すると、姿を変えたユウキ達に危機感を覚えたのか、ボスと眷属たちは二人から距離を取り始める。
そして、遠く離れた空中から翼を振るい、鋭利に尖った羽根を矢のように射出し始めた。
「うわわわわ！　わわっ!!　遠距離攻撃とかずるいぞコラァ！　オレの武器こんなんしかないのに！」
「ぼやいてる場合じゃないでしょ……！　いくわよ！」
飛んでくる羽根をハンマーで防ぎ、弾き飛ばし、身を守るユウキが抗議の声を上げると、アスナが同じく攻撃を防ぎながら声を荒げる。
彼女は剣のボタンを押し、回転させて氷の刃に換えると、ベルトから抜いたガシャットを柄部分に差し込む。
【タドル・クリティカルフィニッシュ！】
「はぁぁぁ!!?」
気合いの裂帛と共に放たれた冷気の斬撃が、飛来する羽根の刃ごと眷属達を凍てつかせ、空中に磔にしていく。

しぶとく飛び回り、逃げようとする相手もいたが、森の中という狭い空間の中では十分に距離を稼げない。
あっという間に、アスナたちを囲んでいたフクロウたちはまとめて氷漬けにされ、格好の的へと成り下がった。
「こんにゃろめぇ！」
【マイティ・クリティカルフィニッシュ！】
動きを止めた眷属達に目掛け、ハンマーにガシャットを装填したユウキが飛び、思い切り振りかぶる。
渾身の力で放たれた一撃は、固まった眷属達に強烈に炸裂し、一瞬にして粉々に砕け散ってしまう。
「ふっ……どんなもんだい」
キラキラと飛び散る氷の破片に背を向け、着地したユウキは満足そうにハンマーを肩に担ぐ。
これであのポンチョ男の鼻を明かしてやれた、と気分を良くしたユウキが、余裕綽々と言った態度で鼻を鳴らしていると。

『――――調子に乗るなよ……！』

不意に聞こえたその声に、ハッと我に返り振り向く。
アスナも共に目を見開き、剣を構え直すも既に時は遅く。
木々の間から覗いた黒い穴から、眩いオレンジの光が迸り、ユウキとアスナの身体を貫いていた。

―19― New comerは突然に！⑤

「うわあああ⁉？」
「きゃああ⁉？」
宙を舞ったユウキとアスナが、樹々をへし折りながら地面に落下する。
強烈な一撃を受け、二人の胸のHPバーが大きく減少し、危険を示すオレンジに達してしまう。
シノンは唖然としながら、吹き飛ばされた二人と、彼女達を撃った敵――鋼色の装甲に身を包んだ、ロボットのような異形の兵士を見上げる。
「何よあいつ…⁉　あれ……フクロウじゃなかったの…⁉」
『クックックック…！　ようやく出て来れたぞ……』
右腕と合体した銃をさすり、フクロウの姿から変化した異形の兵がそう呟き、金属音を響かせて歩き出す。
その進行方向上に転がったユウキは、姿を現した敵に目を見開き、慌てて体を起こして身構える。
「あれは…！　たしか、バンバンシューティングの敵キャラ……リボル隊長…！　今度はシューティングゲームか……！」
『さぁ……戦争を始めようか、ふんっ‼』
愉しげに告げると、異形の兵は右腕を構え、凄まじい連射で銃弾を発射しユウキ達を襲う。
ユウキとアスナはすぐさま左右に飛び退き、銃弾の嵐を躱す。そして走り出し、双方向から異形の兵に向かう。
だが、異形の兵は一切怯む事なく、それぞれに同じ数だけ発砲し、二人が攻撃できる一定範囲への侵入を許さない。
「うわわわわわわ⁉？」
「くっ…近づけない！」
『我が銃に隙などない！　諦めて蜂の巣になるがいい！』
異形の兵は高々と嗤いながら、右腕の銃口から火花を散らし、教団を次々に撃ち出す。

何とか接近しようと、樹々を盾に身を隠すユウキとアスナだが、異形の兵の感知能力は凄まじく、武器を振る隙さえ与えてはくれない。
その上、樹々は次々に破壊され、見る見るうちに隠れる場所がなくなっていった。
「ユウキ！　アスナ！」
「ほらほら……お友達が危ないぜ、ハッハッハ！」
攻撃を避け、逃げ回る事しかできない二人を案じる声を上げるシノン。
そんな彼女を嘲笑い、戦いの様子を愉しげに眺めるＰｏｈのいやらしい声が、戦闘中の二人にも届き冷静さを失わせる。
このまま、全員されるがまでしかいられないのか、とシノンの表情が曇ったその時だった。
「――――脇がガラ空きだぜ、レッドプレイヤー」
不意に、シノンの背後で聞きなれた声が響き、続いて突然Ｐｏｈが真横に跳び退る。
はっと目を見開き、振り向けば、草叢から飛び出したキリトが剣を振るい、Ｐｏｈに襲い掛かる姿が目に映った。
「キ、キリト…⁉？」
「悪い…！　遅くなった」
困惑するシノンを背に庇い、キリトは不敵に笑ってから、再び剣を構える。
キリトの間合いから離れたＰｏｈはちっと舌打ちをこぼし、キリトを見やってなおも口角を上げる。
しかし、フードの下から覗く目は憎々し気に歪んでおり、不意を打たれた事への焦りと悔しさが滲んで表れていた。
「チッ…！　不意打ちとはやるじゃねぇか、ぶっ飛ばされたのはわざとか？」
「ああ…！　油断してくれると思ってな！　ありがとよ‼」
「ほざけ‼？」
激昂の声を上げ、Ｐｏｈが鉈を振りかざしてキリトに迫る。
キリトは迷わず前に出て、剣で鉈を受け止め鍔迫り合いに持ち込

む。何度も刃を合わせ、火花を散らし、狂人をその場に留めさせる。
衝撃に顔をしかめながら、ぶつかり合う刃を間に挟み、目の前の男を鋭く睨みつける。
「俺にはお前の考えが理解できないよ、Ｐｏｈ…！　人を殺して何が楽しい…！　人の命を危険に晒させて何が面白い！　こんな世界に閉じ込められて……お前はおかしくなったのか……⁉？」
「……考えがガキ臭いんだよ、Ｂｏｙ。」
普通ならば考えられない凶行、至らないはずの思考、目の前にいるのが本当に人間なのかと疑うほどに、キリトの理解が及ばない。
そんな彼に向けて、鉈を押し付けたまま、Ｐｏｈはにたりと深く笑みを浮かべ、はっきりと告げてみせる。
「俺は元からこうで……殺戮を楽しむためにこの世界に入ったんだよ…！」
「⁉？」
ぎょっと目を見開き、言葉の意味を受け止めかねるキリト。
彼の手が緩み、危うく鉈が彼の顔面を掠りかけ、慌てて剣を盾に持ち直そうとした刹那。
バンッ、と彼らの足元に銃弾が炸裂し、激しい爆発が生じた。
『無視するなよ……お前も的だって事を忘れるな！』
「ぐはっ…！」
「あぐっ⁉？」
爆発を間近に受け、キリトとシノンが一緒くたに吹き飛ばされる。ゴロゴロと地面を転がり、ＨＰを削られながら、樹の幹に激突して彼らはようやく止まる。
Ｐｏｈもまたその衝撃を受け、体勢を崩していたが、大した傷を受ける事なく、その場に留まっていた。
「ちっ、あのデカブツめ……俺を巻き込んでんじゃねぇよ」
哄笑をあげ、好き勝手に銃弾を撃ちまくる異形の兵に向け、Ｐｏｈは忌々しげに顔を歪める。
だがすぐに不気味な笑顔に戻ると、直撃を避けようと奮闘するユウキとアスナ、頭上を飛ぶ銃弾に身を伏せるキリトとシノンを見やる。

「まぁいい……せいぜいそいつらで遊んでいてくれよ。ハッハッハッハッハ！」
「お前…！　待て……！」
　凶弾に狙われる少年少女達を置き去りに、闇の中に消えていくＰｏｈにキリトが声を上げるが、目の前に銃弾が炸裂し、また吹き飛ばされる。
　呻きながら顔を上げ、狂人の姿を探すも、既に跡形もなく悔しさに拳を地面に叩きつけるばかり。
　そんな彼に、異形の兵による銃弾の嵐は容赦なく襲い掛かった。
「くぅっ…！」
「シノン！　この……どけよお前‼？」
　何とか助けに行こうと藻掻くユウキとアスナだが、敵は森の中に身を潜め、姿を見せず近付く事も許さない。
　真向からの戦闘を拒絶する戦い方に翻弄され、身を守る事だけで精一杯になってしまっていた。
『フハハ…！　哀れ、実に哀れ！　せめて痛みなく、あの世へ送ってやろう！』
「…ただでやられてなんて、やらないんだから…！」
　爆風を腕で防ぎ、耳障りな嘲笑に顔をしかめさせていたシノンは、物陰に身を潜めて憎々し気に呟く。
　せめて少しでも、一矢報いる方法があれば、と最近物を入れたばかりのアイテムボックスの中を探る。
　破砕音と衝撃に震えながら、トラウマに苛まれながら、必死の思いで文字を流し見ていた彼女は、やがてあるものを発見する。
「……コレって」
　見つけたのは、なんとなく武器の名前とわかる名前が並ぶ中、違和感を覚える名称を持った二つのアイテム。
　すがる思いでそれらを実体化させ、手にしてみた途端、暗くなりかけていたシノンの視界が、ぱっと青天のように晴れた気になった。
「シノン！　早く逃げろ！　…シノン？」
「……相変わらず意味がわからない世界だけど、たった一つだけわか

ることがあるわ」
　同じく気を盾に身を潜めていたキリトが声を上げ、様子の変わったシノンに困惑の声を上げる。
　シノンはまるで、何かに背中を押されるように立ち上がり、盾にしていた木の影から姿を晒す。
　そして――――手にしたベルトを腰に巻き、紺色のガシャットを片手に構えた。
「え…ガ、ガシャット⁉」
「私は――――これなら怖くない」
【バンバンシューティング！】
　銃のように持ったガシャットのボタンを押した途端、響き渡る電子音声。
　シノンはそれをくるりと回し、持ち手を上にすると、今も尚銃を乱射する異形の兵を見据える。
　そして誰に教えられたわけでもなく、その言葉を口にした。
「変身」
【レッツゲーム！　メッチャゲーム！　ムッチャゲーム！　ワッチャネーム！　Ｉ⊠ｍ　ａ　仮面ライダー！】
　周囲に浮かび上がる幾つものスクリーン。
　シノンはそのうちの一つを手で押し、巨大化したそれと身を重ねる。
　あっと言う間にシノンの全身は、白い装甲に身を包んだライトイエローの前髪が目立つ、ゆるキャラのような姿に変化した。
「なっ…えええええ⁉」
　思わぬ事態に、ユウキが何度もシノンを見ては目を擦る事を繰り返し、遂には盛大に混乱した声を上げる。
　アスナやキリトも同じく絶句し、世界観を凌駕した姿を見せるシノンを凝視し、固まってしまう。
「ミッション…スタート」
　周囲から向けられる視線を丸ごと無視し、シノンは片手を掲げて告げる。

その途端、シノンの周囲を光の塊が回り始め、彼女がそれを掴んだ途端、藍色の銃へと変化した。
【ガシャコンマグナム！】
「…不思議ね。持っても動悸が激しくなったりしないし、何より――――手に馴染むわ」
銃を何処か不思議そうに見つめ、表面を撫でて触り心地を確かめていたシノンは、突如表情を引き締め、異形の兵に向けて引き金を引く。
放たれた銃弾が森の中を進み、慌てて身を翻した異形の兵の真横を抜けて、樹々を粉砕する。
倒れていく気の残骸を見やり、異形の兵が苛立たしげに声を漏らす。
『虚仮脅しが……図に乗るな！』
「うるさいのよ…！　その口閉じてあげるわ！」
【バ・キューン！】
今度はほぼ同時に銃弾が放たれ、互いに跳び退ってそれを躱す。
一人と一体が走り出し、それぞれで障害物に身を潜めながら森の中を走り回り、発砲し合う。
一進一退の銃撃戦に思われたが、シノンは相手の狙撃を全て躱し、己の銃弾を何発も異形の兵に食らわせていく。
何度も攻撃を受け、異形の兵も次第に焦りを見せ始めた。
『こ、このっ……小娘の分際で！　なめるなといっている！』
「くらいなさい……はぁぁぁ！」
焦った異形の兵が障害物の陰を飛び出し、右腕の銃を構えたその瞬間。
シノンは彼よりも早く前に飛び出し、自身を砲弾に換えて、異形の兵の懐に突っ込んでいく。
シノンの砲弾が炸裂し、異形の兵は火花を散らし、その場から大きく吹き飛ばされた。
「うっわ、すっご…！」
「倒したのか…⁉」
『…！　この程度で……倒れるものか…！』

驚愕の目を向けるユウキとキリトの前で、俺薪の破片を払い除け、異形の兵はしぶとく立ち上がる。
自身に傷をつけたシノンに対し、凄まじい怒気を燃やし、ばらばらと薬きょうを撒き散らしていきり立つ。
それを冷めた目で眺めていたシノンが、口元をにやりと歪め、鼻を鳴らしてみせた。
「上等よ…！　あんたのほうこそ、蜂の巣にしてあげるわ……第弐戦術」
【ガッチャーン！　ＬＥＶＥＬ　ＵＰ！　ババンバン！　バンバンバン！　バンバンシューティング！】
ベルトのレバーをひっくり返し、電子音声を響かせる。
すると、シノンの全身を覆っていた白い装甲が弾け飛び、第弐の姿が露わになる。
藍色の生地にライトイエローの迷彩柄が刻まれた衣服を身に纏う、ゴーグルをつけた傭兵に似た姿。
身軽な姿へと変貌を果たしたシノンは、再び始まる銃撃の寸前、銃に備わったボタンの片方を押す。
「頭がガラ空きよ…！」
【ズ・キューン！】
すると、銃の前身が蓋のように展開し、ライフルへ変形する。
形を変えた銃を両手で構え、シノンは異形の兵の頭部に照準を定め、彼が発砲するよりも前に引き金を引く。
放たれた銃弾は異形の兵の眉間に刺さり、彼の銃弾はあらぬ方向へと飛び散ってしまった。
『くっ、調子にのるなよ、小娘…！』
憎々しげに吐き捨てた異形の兵の姿が、みるみる透明になっていく。
完全に姿を消した異形の兵に、ユウキ達がハッと息を呑み、辺りを見渡すも、敵は完全に痕跡を消してしまっていた。
「姿が消えた…⁉？　ステルスか！」
「無駄な努力ね、見えなくたって……私には丸わかりなのよ」

何処から向かって来るのか、と武器を手に身構えるユウキ達に、シノンが呆れた口調で呟き、額のゴーグルを目に被せる。
あらゆる光を捕らえる高度なゴーグルは、光を湾曲させ、姿を消した異形の兵の姿を正確にとらえ、居場所をシノンに伝える。
シノンはにやりと不敵に笑い、敵の位置を見据えたまま、ベルトからガシャットを抜き取り、銃に差し込む。
【ガシャット！　バンバン・クリティカルフィニッシュ！】
シノンの中にエネルギーが蓄積し、銃口から光が溢れ出す。
バチバチとカートゥーンチックな雷光が迸り、暗い森の中を照らし出し、ずしりと重い銃が構え直され、そして。
容赦なく引き金が引かれ、放たれた必殺の銃弾が、闇に身を潜める異形の兵士の胸を真っ直ぐに貫いた。
『ぐあああああああああああああ‼？』
異形の兵の胸に大きな穴が刻まれ、そこを中心に装甲に罅が広がっていく。やがて装甲の隙間から光が漏れ出し、バキバキと嫌な音が鳴り始めたと思うと。
次の瞬間、異形の兵は断末魔の悲鳴をあげ、真っ赤な炎を噴き上げて爆発四散する。
闇を照らす大きな光の中、ユウキ達は困惑の表情のまま、ホッと安堵の息を吐き、しかしやはりシノンをじっと凝視する。
「ミッション……コンプリート」
仕留めて木の最期を見届けたシノンは、そう満足げに呟き、炎に背を向けて佇んだのだった。
☒
「結局……Ｐｏｈは逃げちゃったね」
「あいつが何者だったのか……そしてどうやってあれを操っていたのか、まるでわからない事だらけだ」
夜が明けたフィールドを、ユウキ達が一塊になって歩いていく。
丸一晩かかってしまった騒動を終え、大きな謎を残したまま宿への帰路に就きながら、姿を消した狂人の事を思い浮かべる。
あの男の目的は、いまだにわからない。しかしこれだけで終わると

はとても思えず、何故か再び退治するような気がして、落ち着かないでいた。
「にしても凄かったよね～、シノンの変身！　人が変わったみたいだったよ」
「ホント、誰かさんみたいにね」
「そーそー……ん？　それは一体どういう意味かな？」
感心した声を漏らすユウキにぼそりと呟いたアスナに、一瞬固まったユウキからじろりと胡乱気な目が向けられる。
二人のやり取りに苦笑を浮かべていたシノンは、しばらくして自分のアイテムメニューの中に表示された二つのアイテムを見下ろし、眉を顰める。
ユウキとアスナ、二人の下に表れたアイテムと全く同じアイテムは、文字欄の中でも異様な存在感を放っていた。
「これは結局、なんなのかしら？」
「さぁね。ボクやアスナもそれを持ってるけど、誰かから送られてきたものだって事しかわからないんだ。差出人へ不明のまま」
「…あなたたち、よくそんなもの使い続けているわね」
得体の知れない代物を躊躇いなく使い続けている二人に、シノンは思わず戦慄の目を向ける。
これがあったおかげで助かったのは事実だが、疑わずにはいられない自分がおかしいのかとも思ってしまうが、キリトの表情を見る限りそうではないらしい。
「ボスキャラ達に起こる異変……謎のアイテム……ＰＫ……これも全部、茅場晶彦の目論見なんだろうか」
「この世界に来たばかりの私には、到底想像もつかないわね。でも――」
危険が蔓延る世界。それはゲームのシステムだけではなく、巻き込まれた人間にも含まれている事がよくわかった。
明日への希望など、まだ全く持てないままであるが、シノンの表情は何処か明るく、気楽そうに見えた。
「これがあれば多分…やっていけると思う。ホント、どうしてそう思

うのかはわからないんだけどね」
ふっ、と微笑み、シノンが三人に向かい合う。
これまでの不安さが薄れた、何となくではあるが信頼を得た表情で、自身を助け、導いてくれた彼女達を見つめる。
「世話になっちゃったわね。この借りはいつか必ず返すわ……じゃあね」
「！　え、どこ行くの⁉」
「もうこれ、何故だか使えなくなっちゃってるもの。また使えるようになるまで、これに頼り切らないようにレベル上げでもしてくるわ」
アイテムメニューを指差し、苦笑を浮かべるシノンに驚きつつ、ユウキは肩を竦め、安堵の顔を見せる。
ずっと傍で付きっきりになる事も考えたが、彼女の様子を見る限り大丈夫そうだ。少なくとも、絶望して自ら命を絶つ様な精神状態には陥っていない。
その事に心の底から安心しつつ、ユウキは心配の眼差しをシノンに向け、尋ねる。
「一緒に行かなくて大丈夫？」
「…大丈夫よ。そうね、そのうち――あなた達よりも強くなってみようかしら？」
「……シノン、ほんとに変わったね」
「あなた達のおかげよ。…じゃあ、またいつか、どこかで会いましょう」
わざと不敵に答え、案じるユウキ達を宥めたシノンが背を向け、街に向かって歩き出す。
その背が見えなくなるまで、大きく手を振り見送り続ける。
近いうちにまた会えると確信しながら、ユウキ達は新たな友人の門出を祝うのだった。

――ある少年を除いて。

「……変われていないのは、俺だけか」
そんな呟きを残し、ただ一人キリトは、何も出来ずに終わった自身の手を見下ろしていた。

―２０―　頼れるアイツはＬｏｎｅｌｙ　ｂｏｙ

「あんたはそのトカゲが回復してくれるんだから、回復結晶なんていらないでしょう？」

その言葉は、少女シリカの頭にあっという間に血を昇らせた。

とあるパーティーに混じってのクエストの終わり。

戦利品を分け合うタイミングに、メンバーの一人である女プレイヤー・ロザリアが、シリカに嘲り交じりにそう吐き捨てたのである。

「ロザリアさんこそ、ろくに前衛に出ないのに、回復結晶が必要なんですか！」

「もちろんよ。お子様アイドルのシリカちゃんみたいに、男たちが回復してくれるわけじゃないもの？」

シリカは、珍しいモンスター・フェザーリドラをテイムした事で、〝竜使い〟と呼ばれ多くのパーティーに誘われるようになった。

そんな彼女に嫉妬したのか、それとも単に気に入らないのか、ロザリアは豊満な肉体を見せつけるようにして告げる。

身長も身体つきも幼く、多少のコンプレックスを抱いているシリカはその態度に顔をしかめさせ、フンッと鼻を鳴らして踵を返した。

「わかりました！　アイテムなんて要りません！　もう貴女とは絶対に組まない！　私を欲しいっていうパーティーは山ほどあるんですからね‼？」

もう顔すら見たくないと、森の真ん中近くであるにもかかわらず、一人でロザリア達の傍を離れていく。

オロオロと戸惑う男達すら無視し、さっさと町へ帰ろうと速足で歩く。

その選択を――――少女は後にずっと後悔する羽目になる。

☒

「ピ……ピナ！！」

悲劇は、突然に起こった。

まっすぐ町へ帰るはずが、見た事もない道に迷い込み彷徨う羽目になり……挙句敵モンスターに取り囲まれてしまった。

応戦した結果、フェザーリドラのピナが致命傷を受けてしまったのだ。
「ピナ…あたしを独りにしないでよ…ピナぁぁ…！」
泣きじゃくり、光に包まれるピナを抱きかかえるシリカ。
そんな彼女を弱々しく見上げ、小首を傾げたピナは――――次の瞬間、青いポリゴンの欠片となって砕け散った。
たった一枚の羽根だけを残して消えた唯一無二の友達の最期に、シリカは愕然と項垂れ、ただ涙を流すほかになくなる。
親友を失ったショックで、生への渇望すらもが消失した彼女に、猿型モンスター達の魔の手が迫る――――。
「うおりゃあああああ!!」
しかし、少女の命が奪われようとした直前、凄まじい勢いで乱入した少女の雄叫びがその場に響き渡る。
黒髪を靡かせた紫の少女は細剣を振るい、猿型モンスター達に襲い掛かる。
その後を黒い装いの少年が続き、少女を守るようにして、猿型モンスター達に向けて黒い剣を振り回した。
「キリト！　そっちはよろしく！」
「ああ！」
一体、二体、三体と、モンスター達が次々に屠られ、ポリゴンの欠片となって消滅する。
敵が一体もいなくなったその場で、剣を収めた少女と少年が、項垂れるシリカの元に歩み寄っていく。
「君はビーストテイマーだったのか。ごめん…君の友達を助けられなくて」
「いいんです…あたしが馬鹿だったんです。一人で森を抜けようとしたから……」
少年――――キリトがシリカを見下ろし、申し訳なさそうに顔を歪める。
掌の上の羽根を見下ろし、嗚咽をこぼすシリカ。
どうしてあんな挑発に乗ってしまったのだろう、どうして意地を

張ってしまったのだろう……そんなたくさんの後悔が、シリカの心を苛む。
自分の浅はかさが大切な友達を死なせてしまったのだと、少女はただ心の闇に呑まれるばかりになっていた。
「…その羽根さ、アイテム名設定されてる？」
そんな時、黙り込んでしま多少女の顔を覗き込み、紫の少女――ユウキが問いかける。
シリカは言われた通り、メニューを開いてアイテムを確認してみる。
そして――〈ピナの心〉という名のアイテムが新たに追加されている事に気付き、ぐっと溢れ出す涙を堪える。
「あー！　泣かないで泣かないで！」
「こ、心アイテムがあれば使い魔を蘇生できるかもしれない」
迂闊な慰めでさらに悲しませる結果になり、慌てたキリトとユウキはきちんとした説明を行う。
シリカは泣くのをやめ、咳ばらいを一つこぼす二人を見つめ、耳を傾けた。
「最近わかった事なんだけど、４７層のフィールドダンジョンの『思い出の丘』に使い魔の主人が行けば蘇生用のアイテムが入手できるらしいんだ」
「４７層…」
希望の光が灯った気がしたシリカは、語られた内容にまた表情を曇らせる。
自分の今のレベルでは、到底行きつけない危険な階層である。
また泣きそうになったが、どうにか耐えて立ち上がり、自分を助けてくれた二人に頭を下げる。
「ありがとう、ございます…今は無理でも頑張ってレベル上げすれば…」
「…蘇生できるのは死んでから3日以内なんだ」
言いづらそうにユウキに告げられ、尻かの顔がまた絶望に染まる。
友達を蘇らせられないと言われているも同然で、絶句する彼女に、

キリトがおもむろにメニューを操作し始める。
すると、シリカの元にいくつかの装備が――――それも、自分には分不相応なものが贈られてきた。
「これなら5、6Lvは底上げできる。俺も一緒に行くし、こいつにも協力してもらうからなんとかなる筈だ」
「こいつとはなにさこいつとは」
隣に立つ紫の少女の頭を小突き、冷たい目を向けられる黒の少年。
シリカは彼らを見つめ、疑わしげな眼差しを送る。
デスゲームと化したこの世界。そんな場所で、誰かに無償で恩を売る者がいるとも思えない……何か裏があると、疑ってしまっていた。
「どうして…そこまでしてくれるんですか?」
「…笑わないって約束するなら、言うよ」
「笑いません」
頬をかき、照れくさそうに呟くキリトに、シリカは真剣な表情で首を横に振る。
一体どんな理由があって、自分を助けるのか。
そんな少女の疑問に、黒の少年は視線を逸らし、小さな声で応えてみせた。
「君が…妹に似てるから……」
キョトン、と。
思わぬ答えが返ってきた事に、シリカは目を丸くして塊――――やがて、ぷっ、と噴き出してしまった。
「あはははははは……あ、ごめんなさい」
「いや、いい。俺もおかしなこと言ったってわかってるから…」
「あっひゃっひゃっひゃっひゃ!!」
「お前は黙れ!」
気恥ずかしそうにしていたキリトだが、隣でユウキがゲラゲラと思いっきり笑う事は許さず、怒号を放つ。
そんな二人のやり取りにまた笑ってしまったシリカは、落ち着くと再びアイテムメニューを表示し、自分の所持金を全てキリト達に差し出した。

「これ、足りないかもしれないけど…」
「お金はいいよ。俺の目的と被らないでもないし……」
金貨の入った袋を差し出すシリカに首を振り、押し返すキリト。
最後に小さく、何かを呟いていたようだが、シリカには聞き取る事ができず、訝しげに首を傾げる。
そしてやがて、はっと大事なある事を思い出し、慌てて居住いを正した。
「あっ……あたし、シリカって言います」
「ボクはユウキ！」
「俺はキリトだ、しばらくの間よろしくな」
シリカが差し出した手を握り、改めて自己紹介を交わすユウキとキリト。
二人の姿を、シリカは月のように眩しいもののように、じっと見つめ続けるのだった。
☒
がやがやと喧騒に包まれる、夜の街――――ミーシェ。
今後の事を話そうと宿屋を目指していたユウキ達三人は、途中何度か男性プレイヤーたちのパーティーに絡まれていた。
その理由は、シリカと共に行動する黒い少年が気に入らなかったから、という醜い嫉妬だった。
「君のファンか…君は人気者なんだな」
「違いますよ……マスコット代わりに誘われているだけです。なのに……〝竜使いシリカ〟なんて呼ばれて…いい気になって……」
その所為で過ちを犯したのだと、シリカは暗い顔に戻ってしまう。
俯く少女を見つめるユウキは、唐突に彼女の背中をパシッと軽く叩き、前に立って目を合わせる。
「心配ないよ、必ず間に合うから」
にっ、と快活な笑みを浮かべ、シリカの両頬に手を添えて顔を上げさせる。
目を丸くするシリカに、気持ちは落ち着いたと安堵したユウキは、キリトに目をやり次の行動を相談する。

「今からホーム戻るのも面倒だし…この層で宿でもとって、作戦会議でもしようか」
「そうだな…」
「！　でしたら、私の知ってる宿はどうですか？　そこのチーズスフレが結構イケるんですよ！」
「マジで?!　行く行く!!」
「なら、そこにしようか」
　自分を助けてくれる人たちに、せめて何かお礼がしたいと、シリカは途端に表情を明るくさせる。
　元気よくついてくるユウキを見て、ほっと安堵の息を吐いたシリカが歩き出そうとした時であった。
「あらぁ？　シリカじゃない？」
　ねとり…と、あからさまな嫌みを孕んだ、もう二度と聞きたくないと思っていた声が届き、シリカの足が止まる。
　振り向いた彼女の元に、先程別れたパーティーメンバーと共にいたロザリアが近づいてきて、にやりと意地悪く嗤って見下ろしてくる。
「ロザリアさん……」
「無事に森を抜けられたのねぇ？　よかったじゃない」
　どう見ても、本気でよかったなどとは思っていない表情で、蠱惑的に唇を歪めて話しかけてくる。
　シリカは一刻も早くこの場を去りたいと思いながら、元々の性分からか、わざわざ体ごと向き直り相対する。
「あら？　あのトカゲどうしたのよ？　…もしかしてぇ」
「ピナは死にました…でも、絶対に生き返らせます！」
「へぇ…って事は『思い出の丘』にいくんだぁ？　でも、あんたのＬｖで突破できるのかしら？」
　シリカの実力が足りていない事をわかって、詰るような言葉遣いで問い質してくるロザリア。
　言い返したくとも、事実を突き付けられて何も言葉が思いつかないでいるシリカを見下ろし、ロザリアは実に気分がよさそうに口角を上げる。

そこに一人、紫の影が割って入る。
苛立った表情でロザリアを見上げ、口をへの字に曲げたユウキが、鼻息を荒くしながら口を開いた。
「余計な御世話だよ。オバサン」
「お、オバっ……」
「突破なら出来るさ。そんなに難易度の高いダンジョンじゃないからな」
思わぬ罵倒の言葉に固まるロザリアを放置し、ユウキの隣に出たキリトが告げる。二人に守られるような体勢になり、シリカは思わず頬を赤く染める。
ロザリアはまだ言い足りなさそうな顔をしていたが、やがて三人を鼻で笑うと、心底見下した視線を残して背中を向ける。
「ふぅん？　見たとこそんな強そうじゃないけど……ま、がんばってね」
「…行こう」
ひらひらと手を振って、喧騒の中に混じっていくロザリアを睨みつけ、ユウキはシリカを促し、その場を後にした。

「なんで……あんな意地悪言うのかな？」
宿屋・風見鶏亭の一階にあるレストランの席に着いてから、ふとシリカは疑問を口に出して考える。
相手を怒らせ、人間関係を破綻させる態度に言葉遣い。助け合わなければ生き残れないような世界だというのに、どうして自ら滅びの道を歩もうとするのか。
シリカは本気でわからず、首を傾げるばかりになっていた。
「君は、ＭＭＯはＳＡＯが初めてなのか？」
「はい…」
「…どんなＭＭＯでも人格の変わる奴はいる。進んで悪人を演じるプレイヤーもね」
遠い目で、キリトはため息交じりに呟く。
ユウキも同じく、少し前に起きたとある事件の事を思い出し、深い

ため息と共に肩を落とす。
　あのポンチョ姿の男の思考は、いつまで経っても理解できる気がしなかった。
「自分で進んでレッドになるプレイヤーもいるからねぇ…救えないよまったく」
「…？　あの、レッドって…？」
「ボク達のカーソルはホラ、グリーンでしょ？　これは健全なプレイヤーの証。でも、犯罪を起こしたプレイヤーはカーソルがオレンジになって、オレンジプレイヤーって呼ばれるようになるんだ」
　聞いたことのない単語に、シリカが疑問の声を漏らし、ユウキが自分の頭の上を指差して説明する。
　困惑の表情を浮かべたシリカに同情しながら、信じたくなくても存在する、厄介な思考の持ち主に……いや、枷が外れてしまった者達の事を考える。
「なかでも、それ以上に危険なのがレッド……進んで殺人を犯すプレイヤーがいるんだ」
「そんな…人殺しなんて…」
「従来なら悪を気取って楽しめた。でも、ＳＡＯは訳が違う……ここで死ねば現実でも死んでしまうんだ」
　そう語るキリトの脳裏によみがえるのは――――かつて失った幾つもの命。
　誰かの失態で、自分の失態で、誰かの悪意で、理不尽に奪われた人々の最期の顔が、今でも鮮明によみがえっていた。
「このゲームは遊びじゃないんだ…」
「キリト…」
　重い声で、自分自身に言い聞かせるように呟くキリトを、ユウキが心配そうに見つめる。
　今も尚、ココロに刻まれた傷に苦しめられる友人に、何もしてやれないのかという無力感に苛まれ、ユウキも暗い表情になってくる。
　そんな中、ばんっ、とテーブルを叩き、シリカがキリト達の方へ身を乗り出してくる。そして力強い目で、自身の恩人達を見つめて声を

放つ。
「キリトさんはいい人ですよ！　あたしを助けてくれましたから！
それに、ユウキさんだって!!」
「…ありがとう、シリカ」
「ありがとね」
　慰めるべき相手が、慰められるべき相手に慰められるというややこしい状況に、ユウキが思わず苦笑を浮かべる。
　とにかく、この少女の思い遣りが純粋にうれしくて、キリトとユウキは互いに笑みをこぼす。
「あ、あれぇ！　チーズケーキまだかなぁ!?　すいませーん！」
　一方、シリカは急に自分の言葉が恥ずかしくなったのか、必死にユウキ達から視線を逸らし、顔を赤くするとレストランの店員に呼びかけるのだった。

「――――…意外と早く釣れるかもね」
「そうだな…一応気をつけとけよ」
「あいあいさー」
　そんな、小声での怪しいやり取りが行われていた事に、一切気付かないまま。

―21―　頼れるアイツはＬｏｎｅｌｙ　ｂｏｙ②

風見鶏亭で借りた部屋で、ベッドの上に寝転がったシリカは、ぼんやりと天井を見上げて物思いにふけっていた。
脳裏に浮かんでいるのは、今日初めて出会った二人のプレイヤーの顔だ。
「ユウキさんと……キリトさんか」
見返りも何も求めず、自分を助けようとしてくれている彼らは一体、何者なのだろうか。
確かな実力と、優れた連携を見せた二人――――特にキリトの事を思い浮かべ、シリカは知らない間にをほんのりと赤く染める。
そんな時、部屋の扉が叩かれる音が聞こえ、シリカは思わずびくっと飛び跳ねる。
「は、はいっ!?」
「おーい、僕達だけど。明日の事でいろいろ相談しておこうかなって思ってさー」
ちょうど今考えていた者の声が聞こえ、ハッと我に返ったシリカがベッドから降り扉に向かう。
しかしその寸前――――習慣で、就寝の為に下着だけの姿に泣ている事を思い出し、少女の動きがぴきりと停止した。

それから数秒後、着替えを終えたシリカがユウキとキリトを出迎え、三人でテーブルの周りに着く。
シリカの頬がやや赤くなっていたが、二人とも一切気にする事はなかった。
居心地悪そうに俯くシリカの前に、やがてキリトがアイテムメニューの中から、青い結晶のようなものを取り出した。
「これ、なんですか？」
「ミラージュ・スフィアっていうんだ」
軽い説明をしてから、キリトが目の前に置いたスフィアに触れる。
すると、スフィアが花のように展開し、中心から光を放ったかと思

うと、空中に地図を描き始めた。
ほー、と感嘆の声をこぼすシリカに、キリトは空中の地図の一箇所を指で示す。
「ここが主街区で、ここから南の道を下りて、目的地・思い出の丘に移動する。途中に厄介な敵がいくつか現れるけど、俺達なら何とかなる」
「ボクらと逸れたりしない限り、危ない事はな――――」
にこやかに、シリカを安心させようという意図を感じさせていたユウキとキリト。
その時、二人の動きがピタリと止まり。
次の瞬間にはユウキが勢いよく扉に向かって飛び出し、バタンッと扉を押し開いていた。
「ユウキさん？」
「誰だ!!」
外に向けて、怒号を発するユウキ。
キリトも鋭い目で扉の方を睨み、じっと息を殺して、外にいる誰かの動きを探るような素振りを見せる。
しばらくの間黙り込んでいた彼らは、やがてまとっていた威圧感をぱっと霧散させた。
「…聞かれてたな」
「みたいだね」
視線を合わせる事なく、扉を閉じるユウキにそう確認したキリト。
シリカはその言葉にぎょっと目を見開き、振り向いて信じられないと言った視線を向けた。
「ドア越しの声はノックしないと聞こえないんじゃ……？」
「聞き耳スキルが高い場合は別だ。そんなの上げてる奴、滅多にいないけど……」
「で、でも……どうして立ち聞きなんか……」
こそこそと身を隠し、他のプレイヤーの情報を探る糸がわからず、困惑の声を漏らすシリカ。
自分の目的はピナの蘇生で、それ以外に重要な情報を持っているわ

けでもない。狙われる理由など何も思い付かない。
キリトは何か考え込んでいる様子だったが、そのうちフッと息を吐き、シリカに顔を向けて首を横に振った。
「……考えるのはもうやめだ、今日はもう寝よう。説明は明日の朝、出発前に改めてするから。ユウキ、念のためにシリカと一緒に居てやってくれないか？」
「わかった。今日はこっちの部屋で寝ていい？　シリカ」
「は、はい」
知らない誰かに探られる、などと言う知りたくもない経験をした少女を慮り、ユウキを残してキリトが部屋を後にする。
去っていく背中に手を振り、立ち上がって頭を下げるシリカの背中を眺めていたユウキは、不意に窓の外の月を見やり、小さくため息をついた。
「…明日は少し荒れるかな」
☒
「夢の国みたい！」
明くる朝、ユウキ達三人は第四十七層・フローリアへとやって来ていた。
一面が花畑で彩られた、空気さえもが明るく鮮やかに見えるほどに美しい街。
自分の実力では、当分来る事はできなかったであろうその景色をうっとりと眺め、シリカは心の底から感嘆の声をこぼしていた。
「この層は通称『フラワーガーデン』と呼ばれてて、街だけじゃなくフロア全体が花だらけなんだ」
「いつみても綺麗だよね～」
見慣れた様子のキリトの横で、ユウキは後頭部で手を組んで笑みを浮かべる。
わぁ、と咲き誇る花々を見つめていたシリカは、ふとある事に気付く。
視界に入る人々が、何やら男女一組である確率が非常に高いような……というか、カップルしかこの場に集まっていないような。

その事に気付いたシリカは、無意識のうちに後ろに立つキリトに視線を向けてしまっていた。
「シリカ？」
「い、いえ！　なんでもないです!!」
様子が変わったシリカに、キリトが訝し気に尋ねると、少女は顔を真っ赤にさせて首を横に振る。
納得していない様子ながら、キリトがシリカから視線を外すと、そこへユウキがむずかしそうな表情で近付いてくる。
「シリカはちょっと…チョロそうなのが心配だよ」
「!?　あ、あたしのどこがチョロそうなんですか!?」
「いや、そうやってチラチラキリトを見てるのまるわかりだし…見た目からしてチョロそうだなと」
慌てふためくシリカの横腹を肘でつつき、ユウキは小声で注意を促す。
命の危機を救われた、などと言う鉄板の状況では仕方がないのかもしれないが、惚れるのが速すぎるのではないかと。
背後でひそひそと何やら囁き合う二人に、キリトが再び訝しげな視線を向ける。
「どうかしたのか？」
「い、いえなんでも!!」
「？　まぁ、いいや。思い出の丘に行こうか」
釈然としないまま、踵を返して目的地を目指すキリト。
だがその直前、足を止めたキリトはメニューを開き、一つの青い結晶――転移を行う為の道具を表示させる。
「これを」
「え…？」
キリトはそれを、真剣な表情でシリカに贈る。
少女にしっかりと、何か危険な事態に陥った時にいつでも逃げ出せる道具を持たせ、真っ直ぐに見つめながら言い聞かせる。
「君のＬＶと今の装備なら、ここのモンスターは問題なく対処できると思う。でもフィールドじゃなにが起こるか解らない。俺達が逃げ

ろと言ったらどこでもいいからこれを使って転移するんだ」
「あ……でも…」
「大丈夫だよ、ボク達なら心配ないからさ」
キリト達が使う分がないのではないか、と心配するシリカに、ユウキが不敵な笑みを浮かべてみせる。
自分達であれば何とかなる、それよりも自分の事だけを心配しておけ。
そんな考えを表情に表す相棒を見やり、キリトもにっと、シリカを安心させるために笑う。
「ユウキの言う通りだ。だから、約束してくれ」
シリカはなおも悩む素振りを見せていたが、二人に見つめられてやがてこくりと頷く。
もしもの時の不安材料を片付けたユウキとキリトは、シノンを間に発寒ようにしながら、想い出の丘に向けて颯爽と歩き出した。
「よし、行こうか」

――そして三人の旅は、それなりの障害に立ち向かわされることとなった。
「あわ、きゃぁぁぁぁ!!」
「あー、早速出たか。相変わらず気持ち悪いよねぇ、この辺でポップする奴ら」
悲鳴をあげ、空中を振り回されるシリカを見上げ、ユウキがうへぇ…と嫌そうに顔を歪める。
長く蔦を伸ばす、薔薇のような花を頂点に咲かせた、巨大な植物のモンスター。
花弁の中心に開いた、鋭い牙が並んだ口から呻き声を上げ、捕獲したシリカをぶんぶんと勢いよく振り回す。
「ネバネバの触手で全身まさぐられるわ、どろっとした液体ぶっかけられるわ、アレな本の女騎士みたいな目に遭わされそうで嫌なんだよね～」
「ヒィヤァァァァァ!!!」

想像さえしたくない末路を聞かされ、涙目で悲鳴をあげるシリカ。
どうしてそんな事を知っているのか、そうなってしまった人は最後にどうなったのか、それを聞く勇気すら出てこなかった。
「いや――!! キリトさん助けて!! 見ないで助けて――――!! それかユウキさんが助けて――――!!」
「いや……それ無理」
「キリト? 目ぇ開けちゃ駄目だよ? シリカの名誉のためにも」
頭上を右へ左へいったり来たりさせられるシリカ。
彼女の今の格好は、可愛らしいデザインの鎧とスカートであり、視線を上げると否応なく彼女の下着が見えてしまう。
目を掌で塞ぎつつ、どうしたものかと頭を悩ませるキリトに、ユウキがじとりと冷たい目を向け牽制を行っていた。
「このっ! いい加減に……しろぉ――――――!!」
ついに、シリカの怒りがまんの限界に達し、装備の一つである短剣を鞘から抜き放つ。
そして、装備により加算された能力を駆使し、自身を捕らえる蔦に刃を突き立て、ばらばらに斬り裂いていく。
最後に植物モンスターの中心に刃を突き立て、痙攣したモンスターが青いポリゴンの欠片へと変わる。
キラキラと輝く破片の中心に立ち、シリカはじろりと、キリトに恨みがましげな視線を送った。
「見ました?」
「み、見てない……」
「キリト、そこは『何を?』って聞き返さないと」
「あ…」
墓穴を掘ったキリトを横目に、ユウキは肩を竦めながら、はぁ…と大きなため息を吐くのだった。
そうして、襲い掛かってくる何体ものモンスター達を相手取り、時折危うい目に遭いながら先を目指す。
着々と思での丘へ近づき、三人の気持ちが昂り始めた時だった。

「あの、キリトさん」
「何だい？」
「妹さんの事、聞いていいですか？」
不意に、シリカが隣を歩くキリトに、今とは全く関係がない質問を投げかける。
キリトは困惑気味に首を傾げ、突然の質問を口にした少女をじっと見下ろす。
「何で急に？」
「あたしに似ているって言ったじゃないですか。現実の事を聞くのはマナー違反ですけど……いいですか？」
「ああ、そういえばそんなこと言ってたっけ？　ボクも聞きたいな」
「うーん……まぁ、いいか。いい機会だからユウキにも話すよ。歩きながらでいいか？」
そういえば、出会った最初にそんなことを言ったのだったか、とキリトは気恥ずかしそうに頭を掻く。
はぐらかそうと思いかけたが、二人共興味津々といった顔を向けているため、観念したように肩を竦め、口を開いた。
「妹って言ったけど、本当は従妹なんだ」
「え？」
「生まれた時から一緒に育ったから向こうは知らないけど、その所為かな……俺の方から距離を取っちゃってさ……」
思いのほか重い話が出てきて、ユウキの表情が険しくなる。
それなりに家族愛に溢れたいい話を聞くつもりであったのだが、非常に複雑な関係を切り出させてしまったようである。
当のキリトは自嘲気味に苦笑するだけで、大して気にしていない様子だったのがせめてもの救いであった。
「祖父が厳しい人でね。８歳の時、俺達を近所の剣道場に通わせたんだ。でも俺は二年でやめちゃって……そりゃぁ祖父に殴られたよ」
「うわー、キビシー」
「そしたら妹が『私が二人分頑張るから叩かないで』って俺を庇ったんだ。それからあいつ頑張って、全国大会まで行くようになってさ

……」
「す、すごいじゃないですか!!」
顔も知らないキリトの妹が成した功績に、シリカは目を輝かせて褒め称える。
しかしキリトの表情は翳っており、視線が重く下がっている。この場にいない妹に対する罪悪感が滲み出ているように見えた。
「でも、俺はずっと妹に引け目を感じてたんだ。他にもやりたい事があって、俺を怨んでるんじゃないかって……シリカを助けたくなったのは、妹への罪滅ぼしをしている気になってるのかもしれないな……ごめんな、シリカ」
自分の罪悪感を、本来向けるべき相手ではなく赤の他人に押し付けるような事をしている自分に、キリトは心底嫌悪感を抱く。
そして何より、こんな事で自分が許されるわけがないと、さらに自分を責めている。
すると、無言でキリトを見つめていたユウキがぽんっ、と彼の肩を軽く叩いた。
「キリト。妹さん、きっとキリトの事怨んでなんかないよ」
「ユウキさんの言う通りです！　好きでもないのに頑張れないですよ。きっと、剣道が好きなんですよ！」
キリトの前に出て、鼻息を荒くして訴えるシリカ。
自分を助けてくれた、そしてこれからもう一度助けようとしてくれている恩人が落ち込む姿を見ていられないと、懸命に勇気づける言葉を贈る。
健気な少女の表情に、呆気にとられた顔になっていたキリトは、やがてフッと穏やかに笑みを返した。
「そうか…そうだといいな。二人ともありがとな？」
「はい！　…よ、よーし！　あたしも頑張りますよー！」
笑いかけられ、ハッと我に返った直後、シリカはボッと顔を真っ赤にする。
偉そうに説教をかました自分を恥じ、少女は羞恥を誤魔化すように、花畑を全速力で駆け抜けていく。

その背中を眺めながら、ユウキがにやりと笑みを浮かべ、キリトの脇を肘で小突く。
「キリト。現実に帰ったら、妹さんとちゃんと話してみるといいよ。そうやって決めつけちゃうのが一番ダメだから」
「あぁ…そうするよ」
年下の二人に勇気づけられている事態に苦笑を浮かべ、キリトは先を進むユウキの後に続き、想い出の丘に続く道を昇っていくのだった。
――――彼らの後を追う、いやらしく笑う赤い影があった事に気付きながら。

「あ、あれですか?!」
「そうだよ」
丘を幾つも越え、襲い掛かるモンスター達を倒し、花畑の最奥地に辿り着いたシリカとユウキ、キリト。
彼女達の前に、円形に開けた空間と、その中心に鎮座する台座が現れる。
パッと顔を明るくし、台座へ近づくシリカ。だが、駆け寄った彼女は、途端に表情を曇らせてしまった。
「…花、花がないです…!」
「そんな馬鹿な……」
何も無い台座の上から振り向き、困惑気味にキリトに問いかける。
事前情報が異なっていたのか、と顔色を変えるキリトであったが、同じく台座の元へ駆け寄ったユウキが覗き込むと、にやりと笑みを浮かべる。
「…いや、大丈夫だ。ほら」
シリカにもその笑みを見せ、台座の上を指差すユウキ。
すると、何も無かったはずの平面に、少しずつ変化が現れ出す。
小さな双葉が生え、徐々に茎が伸び葉も大きくなり、最後に凛、と淡い色合いの花が咲く。
まるで自分を待っていたかのような開花の瞬間に、シリカはぱっと

目を輝かせた。
「なるほどー、テイマー自身が来ないとそもそも花が咲かないのか」
「テイマー自体そう多くはないから、滅多に手に入らない……とてつもなく珍しいアイテムってわけだ」
感心した様子を見せるユウキとキリトの前で、シリカはおずおずと手を伸ばし、目の前のそれ――〈プネウマの花〉に触れる。
端は独りでに根元からキレ、シリカの手の中に納まる。淡い輝きを放つ可愛らしい花を見下ろし、シリカは思わずユウキ達にはしゃぐ姿を見せる。
「これでピナが生き返るんですね？」
「ああ」
「よかったね、シリカ」
もう、二度と友達に会う事は叶わないのかもしれない、そんなｚ？諦めがココロのどこかに合った少女は、自分をここまで連れてきてくれた二人に心の底から感謝の念を抱く。
涙を流す少女の肩を叩き、ユウキとキリトは優しく、何も言うなといわんばかりの微笑みを返した。
「でも、ここだと強いモンスターも多い。生き返らせるのは街に戻ってからにしよう」
「使い魔を助けて本人が死ぬとかシャレにならないもんねー」
そう言って、二人はさっさと元来た道を戻っていく。
然したる苦労はなかったというような、気楽そうな彼らの背中を見つめ、シリカはグッと花を抱きしめその後を追いかけた。

―２２―　頼れるアイツはＬｏｎｅｌｙ　ｂｏｙ③

主を守る為に命を散らせた小さな竜、それを蘇らせる希望を宿した花を手に、少女は帰路に就く――――そのはずだった。

街へと戻る道を辿る中、ユウキとキリトが険しい表情で立ち止まるまでは。

「さてと――――そこで隠れている奴、出てこいよ」

ぎろりと、キリトは道の先に――――両端に生えた二本の木を睨み、鋭い視線を向ける。

シリカはえ？と困惑の眼差しを自分の前に並んだ二人に向け、何事かと二人を交互に凝視する。

すると、彼らの見据える先で、木の影から姿を見せた一人の女性プレイヤー――――ロザリアが不気味に嗤ってみせた。

「ろ、ロザリアさん?!」

「私の隠蔽を見破るなんて、中々高い索敵スキルね剣士さん達…侮ってたかしら？」

にやにやと、以前とは比べ物にならないほどに濃く強い悪意を隠そうともしないロザリアに、シリカの足は知らぬうちに数歩後退る。

怯えた顔になる少女を背に庇い、とキリトは鋭くロザリアを睨みつけたまま、その場に佇んでいた。

「その様子だと、首尾よく『プネウマの花』をゲット出来たみたいね？　おめでとう……じゃあ、さっそくそれを渡してちょうだい？」

「な、何言ってるんですか!?」

「だって……〈プネウマの花〉って今が旬らしいんだもの。今のうちにうっぱらっておかないと損じゃない？　だから……さっさと渡しなさいよ」

平然と、ピナとは何のかかわりもない筈のロザリアが、さも当然とでもいうように手を差し出す。

混乱し、動く事もできないでいるシリカに焦れたのか、険しい顔になって彼女の元へ近づこうとする。

だが、ロザリアが一歩を踏み出す直前、キリトがフッと不敵な笑み

を浮かべた。
「そうはいかないな、ロザリアさん。いや、犯罪者ギルド《タイタンズハンド》のリーダーと言った方がいいかな？」
「…へぇ？」
　自分の正体を言い当てられたロザリアが、意外そうに片眉を上げ、同時に小馬鹿にしたような声を発する。
　否定を返さないロザリアに、シリカはギョッと目を剥き、彼女とキリト達を交互に見やる。しかし無意識のうちに、〈プネウマの花〉をきつく抱きしめていた。
「で、でも、ロザリアさんはグリーン……」
「犯罪者ギルドって言っても全員がそうじゃないんだよ。グリーンが獲物をみつくろって、待ち伏せのポイントまで誘導するんだ」
　ロザリアの頭上に浮かぶカーソルを見上げ、信じられないと言った呟きをこぼすシリカに、横目を向けたシリカが説明する。
　だがシリカは、なおも真実を受け止めきれない様子でいた。
　口は悪く、態度も最悪な女性ではあったが、この世界で殺人や犯罪に加担する本物の悪人であったなどと言う話は、納得できないものであった。
「じゃあ……この二週間の間、一緒のパーティにいたのは……」
「そうよぉ。あのパーティの戦力を分析するのと同時に、冒険でお金が貯まるのを待ってたの」
　わなわなと震え、涙目になるシリカに、ロザリアは見下した目を向けつつハッと鼻で笑う。
　騙された馬鹿な子供、自分のような賢い大人に利用される以外に価値がない雑魚が、現実を突き付けられて慄く姿を、さも愉しげに眺めている。
「一番楽しみな獲物のあんたが抜けちゃってどうしようかって思ってたら、なんかレアアイテム取りに行くっていうじゃない？　それにしても、そこまで判っててその子についてくるなんて、あんた達馬鹿なの？」
「いいや、そうじゃない」

「ボク達は貴女を探してたんだ」
嘲笑するロザリアだが、ユウキとキリトは全く意に介した様子がない。怒りを滲ませる事もなく、氷のような冷たい眼差しを目の前に立ちはだかる女に向け、淡々と事実を述べるだけであった。
思わぬ反応に、ロザリアは訝しげに眉をしかめ、ユウキ達を睨みつける。
「どういう事かしら？」
「貴女、１０日前に『シルバーフラグス』っていうギルド襲ったね？メンバー４人が殺されて、リーダーだけが脱出した……」
「…ああ、あの貧乏な連中ね」
少し、思い返すような素振りを見せて、ロザリアはつまらなそうに鼻で笑う。
思い出したと言っても、顔や格好など、相手の細かい特徴などは重い浮かんでいない様子であった……自身が誘き寄せ、本隊に襲わせた獲物の事など、微塵も覚える気がなかった事が明らかであった。
「リーダーだった男はな。毎日最前線の転移門広場で、泣きながら仇撃ちをしてくれる奴を探してた。けど彼は、依頼を受けた俺達にあんた達を『殺してくれ』とは言わずに『牢獄に入れてくれ』って言ったんだ……あんたに彼の気持ちが分かるか？」
「解んないわよ。マジになっちゃってバッカみたい。ここで人を殺しても、ホントにそいつが死ぬ証拠なんてないし」
静かな声に、確かな激情を交えて語るキリトに、ロザリアは鬱陶しそうに顔をしかめ吐き捨てる。
シリカはその姿に、心の底から嫌悪を怒りを覚える。
確かにゲーム上で死亡した人間が現実世界でどうなっているか、ゲームから抜け出さない限り知る事はできない。
だがそれでも、もしかしたらとまともな人間は殺人を忌避するのだ。そう考えられない彼女は、シリカにはすでに人としての何かが欠落した化け物のようにしか見えなかった。
「……そんな事より、あんた達の心配した方がいいんじゃない？」
にたり、と悪意をいっぱいに詰めた顔で、ロザリアはおもむろにそ

の場で片手を上げる。
すると、彼女の指示に合わせ、複数のプレイヤー達が物陰からぞろぞろと姿を現してくる。その数は、ざっと十人は数えられた。
「に、人数が多すぎます！　脱出しないと!!」
絶体絶命にピンチに、シリカはユウキ達の服の裾を引っ張って叫ぶ。二人がどれだけ強くとも、ここまでの人数が相手では圧倒的に不利であり、下手をすれば本当に殺されてもおかしくはない。
自分が狙われたせいで、二人も危険に晒してしまったという思いから、シリカの思考は絶望で埋め尽くされかけていた。
だが、ユウキもキリトも一切恐れる様子を見せず、シリカを後ろに庇ったまま動こうとしなかった。
「大丈夫、問題ないよ」
「そうそう、シリカはボクの後ろに隠れてて？」
「でも、ユウキさん！　キリトさんも!!」
窮地にあるとは思えないほど、のんびりとした声でなだめてくるユウキ。
レッドプレイヤー達に囲まれ、余裕綽々といった態度を見せるロザリアと同じく、自分は絶対に死ぬ事はないと語るような態度がそこにはあった。
それでもなお、焦燥に駆られたシリカが二人に呼びかけていたその時、レッドプレイヤー達の中の一人がはたと表情を変える。
「ユウキ……キリト……？」
その一人は、標的を庇うお人好しの馬鹿と認識していた二人の背格好、そして得物をじっと確認し、みるみるうちに顔色を変えていく。
彼の異変に気づき、何事かと振り向いてくる仲間達に、男はわなわなと震える指をユウキとキリトに突きつけて声を漏らす。
「黒尽くめ装備に盾無しの片手剣……それに、同じ盾無し片手剣に紫基調の装備の女プレイヤー……まさか、《黒の剣士》と《絶剣》!?」
「や、やばいよロザリアさん！　こいつらコンビで最前線に挑んでるビーターとビギナーの……攻略組だ！」
その瞬間、見下した態度でシリカ達を見下ろしていたレッドプレイ

ヤー達が、どよどよと慄きを見せ始める。
攻略の最前線、自分達が今根城にしている付近の階層とは比べ物にならない強さを見せつける敵と戦う、数々の逸話を持つ限られたプレイヤー達。
その中の二人、それも比類なき強さを誇ると言われるプレイヤーが目の前にいるのだと気付かされ、レッドプレイヤー達は思わず数歩後ずさる。
「攻略組……キリトさん達が……！」
シリカもまた、自分を守ってくれている者達の正体を知り、驚愕でそれ以上の言葉が出なくなる。同時に、どうりでこうも詳しく、人間（プレイヤー）の敵が現れたところで動揺していないのだと、納得を抱く。
味方が混乱に陥る中、我に返ったロザリアがチッと舌打ちし、戦意を萎ませているレッドプレイヤー達を睨みつける。
「攻略組がこんなトコに居る訳ないじゃない!!　ただの仮装野郎どもに決まってる！　さっさと始末して身ぐるみ剥がしな!!」
「そ、そうだ！　攻略組なら、すっげぇレアアイテムを持ってるかもしれねぇ!!」
ロザリアの檄に、逃げ腰になっていたレッドプレイヤー達が勢いを取り戻していく。
名を騙るだけの偽物なら容易く殺し、もし本物であれば、ここでは手に入らない貴重な持ち物を奪って金に換え、自身らを強化してさらなる獲物を狙いにいく。
目の前にいるのが得体の知れない強者ではなく、無数の宝石を体につけた獲物に見え始めた時には、レッドプレイヤー達のやる気は最初の倍にまで膨れ上がっていた。
「死ねよやぁ!!」
レッドプレイヤー達が列をなし、一人前へ出たキリトに次々に斬りかかる。
凶刃は棒立ちのキリトに次々に食らいつき、全身に赤い線を刻んでいく。前の仲間が斬った後から後ろの者が斬りつけ、前にいた者が後ろに下がる。

避ける事を許さない連続攻撃により、キリトのＨＰを表示する棒がみるみる減少していった。
「やめて！　キリトさんが！　キリトさんが死んじゃう！　ユウキさん！　このままじゃキリトさんが!!」
「大丈夫大丈夫、大丈夫だよシリカ。ほら、キリトのＨＰをよく見て？」
凶刃に晒され続けるキリトの姿を見せつけられ、シリカが頭を抱えて悲鳴をあげ、ユウキにすがりつく。
しかし、ユウキは最初と同じく呑気な笑みを浮かべていて、相棒の窮地に動揺する様子が一切見受けられない。
その上、減り続けるキリトのＨＰ表示を指差し、ケラケラと可笑しそうに笑ってみせている。
「何言ってるんですか！　早く、助けに行かないとキリトさんがーーー!?」
一向に動こうとしないユウキに戦慄を抱きながら、このままではいけないと、シリカはキリトに襲いかかるレッドプレイヤー達を睨みつける。
だが、あることに気づいて彼女の表情はギョッと目を見開いたまま硬直する。
キリトの命を示すＨＰが、一定とまで減ったかと思うと最大値まで急激に回復するという、奇妙な現象が起きていたのだ。
「ど、どういうことですか……？」
「何やってんだアンタ達!!　さっさと殺しな!!」
斬りつけても、斬りつけても倒れない黒いプレイヤーを前にし、顔に焦りをにじませたロザリアが仲間に吠える。
同じく驚愕で目を見開いていた彼らも、すぐさま我に返り再び列をなして連続攻撃を行っていく。
だが、それでもやはりキリトのＨＰは一定の値以下に減る事はなく、微動だにせずにその場に佇み続けていた。
「な…何だよこいつ、不死身かよ……!?」
「１０秒あたり４００ってとこか……それがあんたら７人が俺に与え

るダメージの総量だ」
　ありえない光景に、恐怖を表情ににじませた男が呟く。それにキリトが冷たい目を向けて、つまらなそうに頭をかきながら、残酷とも言える事実を告げる。
「俺のＬｖは７８、ＨＰは１４５００。さらに、『バトルヒーリング』スキルによる自動回復が１０秒で６００ポイントある。何時間やっても俺は倒せないよ」
「無茶苦茶だ……アリかよ、そんなの！」
「アリなんだよ……たかが数字が増えるだけで無茶な差が付く。それがＬｖ制ＭＭＯの理不尽さだ」
　自身もこの理不尽な世界に向けた怒りを抱くキリトが、自身の声にかすかに激昂を混ぜ、レッドプレイヤー達に吠える。
　死ねば復活など叶わない現実の理不尽さと、レベルさえ高ければ弱者の牙など毛ほども通じないゲームの理不尽さ。最悪な部分を混ぜ合わせたこの世界の歪さに、少年は静かに苛立ちを滾らせる。
　レッドプレイヤー達は震え上がる。格好に餌だと舐めていた相手が、実は決して敵うはずのない怪物だったという事実に、自身らの浅はかさを激しく後悔する羽目になる。
「だ、だったらあの小娘共を…！」
　どうにか、そこの知れない力を見せつける黒いプレイヤーを抜き、逃げようと考えていた彼らは、彼に守られる少女達に目をつける。
　特に、紫の少女の後ろに下がっている竜使いの少女を狙うべくだと考えたその時。
「いやぁぁぁぁぁぁ!!」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁ!?」
　凄まじい咆哮と共に、仲間の一人がとんでもない勢いで吹き飛んでくる姿が目に映る。
　慌てて脇に退けば、仲間は全身に赤い穴の傷跡を刻まれ、ＨＰも赤色に染まった、死にかけの状態で倒れ込んでくる。
　苦悶の声を漏らす仲間からぎこちなく目をそらし、恐る恐る視線を上げれば、知らぬ間に抜いた細剣を肩にトントンと当てている紫の少

女が目に入った。
「ぬるいぬる～い。ボクらを人質に取ったりすれば大人しくなるだろうって考えだろうけど、残念でした。ボクって、キリトより強いんだよね～」
「……まだ負けを認めたわけじゃないからな」
「まーまー、白黒つけるのはまた今度って事で、ね？」
得意げに胸を張る少女に、悔しげに声を漏らす黒のプレイヤー。
後ろに庇われた竜使いの少女がほー…と感嘆の声を漏らし、呆然と立ち尽くしている事も知らず、和気藹々と二人だけで話している。
まるで彼ら、殺人集団（タイタンズハンド）など、何の脅威にも感じていないように。
「まぁ、要するにだ……ボク達に目をつけられた時点で君たちに逃げ場なんてとっくになくなってるんだって事だよ。お分かりかな、おばさん達？」
言葉も出ないロザリア達は、不敵に笑ったユウキの言葉が、まるで見えない刃のように自分達の胸を深々と貫く幻想が見えたような気がしていた。
「これは俺達の依頼人が全財産をはたいて買った回廊結晶だ！　監獄エリアが出口に設定してある、これで全員牢屋に跳んでもらう！　逃げられると思うなよ……コリドーオープン！」
「ちくしょう……」
キリトが放り投げた結晶が、光を放った直後に宙に浮く扉となる。
犯罪を犯したプレイヤーを閉じ込めておく事ができる牢獄、そこに通じる道を開き、そこへレッドプレイヤー達全員に入るように告げる。
観念したのか、抵抗する様子もなく項垂れる男達。
そんな中、牢獄の扉から離れたまま、鬱陶しそうに顔を歪めるロザリアにユウキがじろりと視線を向ける。
「あんたはどうする？」
「はっ！　それで勝ったつもりかい？　言っとくけど私はグリーンだ。手を出せばあんた達がオレン――」
捕らえるのなら捕らえればいい、ただし自分に傷ひとつつけた時点

で、お前達も自分達と同類になるのだ。
そんな事をのたまおうとしたロザリアだったが。
言い切るよりも前に、暴風と共に接近した鋭い切先が、彼女の喉元に突き付けられる。
「…だからなんだってんだ。別にボク、お前をここで殺してやっても、心とかぜんぜん痛まないからさ」
ユウキが発したそれは、これまで聞いたことがないほどに冷たく、殺意に満ちた声であった。
彼女が微かに動かすだけで、容易く皮膚を裂き、ＨＰを削る無拍子の一撃。
自分の命が、年端も行かない少女に握られているという事態に、ロザリアは表情を強張らせながら目を血走らせる。
「こんなところで……こんなガキ共なんかに…！　ちくしょうがぁぁぁ!!」
悔しさをこれでもかと表した、往生際の悪い喚き声をあげる悪女。
構う事なく、ユウキがさらに剣を突き出し、悪人たちを牢獄へと追いやろうとした、その時だった。
――ユウキの目の前で、ロザリアの体に荒いノイズが走り始めたのは。

―２３―　頼れるアイツはＬｏｎｅｌｙ　ｂｏｙ④

「……え？」
「ぎゃあああああ!?」
「かっ、体がぁぁぁ!!」
　困惑の声を漏らしたロザリアが見下ろす自身の両腕。全てが荒いノイズに呑まれ、みるみる形が変貌していく。
　異変は彼女だけでなく、他の大半のレッドプレイヤー達にも現れ出し、あっと言う間に彼らは人の姿を失っていき……そして。
『〔#?，#＞〃＋$$；］?＜#』
『@＜＞〈｝＜〃＊！：；｜〃＜⊠』
　もう何度見たか、思い出すのも億劫な程に出現する、オレンジ色の頭をした異形達へ、悪人達は変わり果ててしまった。
　ユウキは慌てて飛び退き、キリトとシリカの元へ合流する。
　驚愕で目を見開き、立ち尽くす彼らの前で、奇怪な呻き声を漏らすレッドプレイヤーたちの成れの果てに、うんざりとした目を向ける。
「またこいつら～!?」
「なっ…なんですかこれ!?」
「…ひどくタチの悪い、ウィルスだよ」
　異形達を初めて見たシリカは、恐怖のあまり咄嗟にキリトの後ろに隠れながら困惑の声を上げる。
　盾にされたキリトはその事を気にせず、辺り一帯に蔓延る異形達を睨みつける。
　ふと、身構えていたユウキ達は、足元が微かに震動している事に気付き、はっと視線を下に向ける。
　咄嗟の判断で跳躍し離れた直後、彼らがいた個所の地面がぼこっと盛り上がり、巨大な一体のモンスターが姿を現す。
『＜｝＊＜；#⊠＋〃］＾＋＝€＞』
　緑色に、全体に蔦を巻き付けたそれ――――道中に何体も襲ってきた植物型のモンスターが、やはりノイズを走らせて咆哮を上げる。
　めきめきと身体を軋ませて仁王立ちした植物型のモンスターは、姿

が変わっていないレッドプレイヤーたちに蔦を巻き付け始める。
「うわあああああ!?」
「た、助けて……！　ぎゃあああああ!!」
怪物に囚われ、全身を締め付けられるレッドプレイヤー達が悲鳴をあげる。
絶叫し、自由の利かない身体をじたばたと暴れさせる彼らであったが、次第にその抵抗も弱まり始める。
無事だった彼らの体にもノイズが走り出し、数秒も経たぬうちに他の仲間と同じく、オレンジ色の頭の異形に変貌してしまったのである。
「…悪人といえど、ああいうのをほっとくのは気分が悪いな」
見るも無残な姿に、ユウキが顔をしかめながらちっと舌打ちをこぼす。
本音を言えば助けたくはない。命を軽んじる愚か者であり、件の依頼者の願いがなければ自分が人殺しになってでも始末しておきたいような輩だ。
だが、あんな怪物となって終わりを迎える事は、敵であっても見過ごす事はできなかった。
「仕方ない……シリカ、キリト！　ちょっとの間離れてて！」
「へ？」
臆する事無く、一歩を踏み出したユウキに指示され、シリカはきょとんとした顔で呆けた声を漏らす。
ユウキは振り向かず、アイテムメニューの中からベルトとガシャットを具現化させ、ベルトを腰に巻き、ガシャットのボタンを力強く押す。
【マイティアクションX！】
「変身！」
【ガシャット！　レッツゲーム！　メッチャゲーム！　ムッチャゲーム！　ワッチャネーム!?】
ガシャットをベルトに突き刺し、出現したスクリーンを選択し、その身に纏う。白い鎧と大きな仮面が少女の体に纏われ、軽快な音楽と

歌が辺りに響き渡る。
シリカが目と口を全開にして立ち尽くす中、アクションゲームの戦士へ姿を変えたユウキが華麗にポーズを決める。
【I⊠m　a　仮面ライダー！】
「ノーコンティニューで、クリアする！」
言うが早いか、ユウキはとてつもない跳躍と共に飛び出し、オレンジ頭の異形達と植物型モンスターに挑みかかる。
片手にハンマーを呼び出し、まず最初の獲物に向けて脳天に向けて振り下ろす。
だが、ハンマーが触れようとした直前、異形はすいっと異様な素早さで横にずれ、ユウキの攻撃を空振りさせてしまう。
「はっ！　やっ！　わっ、ちょっ…なんか速いよこいつら!!」
めげずに標的を変え、懸命にハンマーを振り回すユウキだが、異形達は異様な速度であちこちへ動き回り、まるで当たってくれない。
宙を跳び、フェイントを仕掛け、当たれば強烈な衝撃を加える武器を振るうが、やはりどれも掠りもしなかった。
「……ハッ！　キ、キリトさん！　ユウキさんが！」
「あの動き…ただ走ってるんじゃない。タイヤか何かで走行している…？」
我に返ったシリカが、苦戦するユウキを目の当たりにして、キリトに縋りついて叫ぶ。
一方でキリトは、目の前で繰り広げられている攻防――というよりはユウキだけが翻弄される姿を視界に映し、冷静に考察を行う。
ただ歩いているのではない、滑るように地面を移動しているのだと、戦いの外から見る事で気付いていた。
「このぉ！　このぉ！　ウロチョロすんな――うぎゃっ!?」
キリトが思考を巡らせる中、ユウキは次第に苛立たし気に攻撃を振るうようになる。策も何もなく、ただハンマーを我武者羅に振り回し始めている。
当然、そんな攻撃が当たるはずもなく、余裕を持ち始めた異形達や植物型のモンスターに後ろに回り込まれ、手痛いしっぺ返しを食らう

羽目になっていた。
「キリトさん！」
「……使うしか、ないのか」
シリカの急かす声に、キリトは険しい表情で歯を食い縛り、スッと片手を掲げる。
宙に一筋の線を描き、メニュー欄を表示すると、奥底に隠れていたあるアイテムを自身の手元に顕現させる。
――そう、ユウキが使っているものと同じベルトと、黄色く彩られたガシャットを。
【爆走バイク！】
はっ、と目を見開くシリカの前で、キリトはガシャットのボタンを押し、ベルトを腰に巻きつけさせる。
途端に周囲に波紋が広がり、辺りに幾つものトロフィーが配置されていく。
またしてもハンマーを空振りさせながら、異変に気付いたユウキが振り向き、仮面の下で大きく目を見開く。
「へ？」
「変身…！」
【ガシャット！】
小さく呟き、キリトはガシャットを逆さにし、ベルトのスロットに差し込む。
すると、これまでにベルトとガシャットを使ってきた者達と同じく、キリトの周囲に幾つものスクリーンが現れ、くるくると回転する。
キリトはその中の一つに狙いを定め、鋭く蹴りを放つ。その瞬間、スクリーンが押し出され、巨大化してキリトの体に重なっていった。
【レッツゲーム！　メッチャゲーム！　ムッチャゲーム！　ワッチャネーム⁉？　Ｉ⊠ｍ　ａ　仮面ライダー！】
スクリーンと一体化し、キリトの全身をユウキのものと同じ白い鎧が覆う。
顔を覆う仮面は、棘がついたヘルメットのような形状。頭部の左右からは一本ずつ、バイクのハンドルが耳のように生える。

両腕にタイヤがついた銃器のようなものを備え、キリトもまた、ゲームの戦士へと姿を変えてみせた。
「へ……ええええ!?」
「キリトも……ライダーに!?」
肩を上下させ、汗を垂らしたユウキが瞠目し、シリカと同じく呆然とその姿を凝視する。
相も変わらず送り主不明のままのアイテムを使い、これで四人目となった戦士。いずれも自分が知った仲の者が変身してきているという事実に、今度こそどうなっているのかと混乱に陥る。
『|＜%＞?・〔・;〃＋$＞?』
だが異形達にとってそんな事は関係がない。新たに現れた敵に対し、ユウキの周りを走り回っていた彼らの半分が動き、キリトの元へ殺到し始める。
キリトは異形達を冷静に睥睨し、両腕に備えたユニットを構えると、仮面の下でカッと形相を変える。
「うおおおおおお!!」
雄叫びと共に走り出し、ユニットを地面に叩きつける用にしてタイヤを回転させる。
タイヤの凹凸が地面に食らいつき、猛然と駆け出して、オレンジ頭の異形達の元に突っ込んでいく。
敵が目前にまで迫ると、キリトは高く跳び上がり、両腕のユニットを異形達に突きつけ、無数の光弾を発射し彼らを吹き飛ばした。
「あ！　なにそれズルい！　ビームとか超ズルい！　オレ飛び道具持ってないのに!!」
「俺に文句言うな！　それを送ってきた奴に言え！」
ぴかぴかと光を放ち、異形達を貫いていく光弾に、ユウキが羨望の眼差しを向ける。声高に文句を垂れるが、敵を狙い撃つのに忙しいキリトは乱暴に怒号を返すだけ。
その間、オレンジ頭の異形達と植物型のモンスターは足のタイヤで走り回りながら、キリトの放つ光弾から必死に逃げ続けていた。
『%?・＜＞＋・|}，［#$＋』

『・?・｝＞〔〕［＋＝！・；％！，％☒＋｝｜＜＊』
意味不明な雑音を悲鳴のように撒き散らし、キリトから距離をとっていく異形達。必死になっているためか、互いにぶつかり合い、転倒する個体がいくつも現れ出した。
キリトはその後を追い、背中を向ける彼らに対して容赦無く撃ちまくる。
やがて彼の前で、逃げ回っていた異形達の動きが全て止まる。植物型モンスターの蔦に異形達が絡まり、身動きが取れなくなってしまったのだ。
「ここで決める…！」
【ガシャット！　キメワザ！】
好機を見出したキリトは、ぎらりと仮面の目を輝かせ、ガシャットを腰のスロットに差し込む。
ガシャットの中のエネルギーが全身に収束し、稲妻のエフェクトが辺りに飛び散る中、キリトは両手のユニットを放り捨て身構える。
そして勢いよく跳び上がり、ぐるぐると空中で縦回転を見せると、自身をタイヤのようにして異形達に突っ込んでいく。
【爆走クリティカルストライク！】
「おおおおおお!!」
ドンッ！と凄まじい衝撃が辺りに広がり、異形達が炎に包まれ爆発する。
すると、異形に変じていたロザリアやレッドプレイヤー達が元の姿に戻り、どさどさと倒れ込んでくる。気を失っているのか、全員白眼を剥いて苦悶の表情のまま固まっていたが、概ね無事な姿であった。
キリトは宙を跳ねながら、元の位置に降り立ち、ロザリア達を見やり無事を確認すると、仮面の中で鼻を鳴らしてみせる。
「よし…次は！」
「キリト、あれ！」
次に起こる現象を予測し、ユウキが呼びかけるよりも前に振り向き、再度構えるキリト。
すると、彼らが想像した通り、燃え盛っていた植物型のモンスター

がうぞうぞと蠢き出し、みるみるうちに形を変えていく。そしてーーー。
『ウィ～ッハァ～!!　やってくれたなてめぇら!!』
　モンスターは、身体中からバイクの管が生えたような見た目の、黄と青に彩られた人型の怪人となり高らかに嗤い出す。
　傍にいつの間にか異形の形をしたバイクを侍らせ、うっとうしいほどのテンションの高さを見せるその怪人を見て、ユウキがハッと声を漏らす。
「爆走バイクの敵キャラ……モータス！」
『ここまで俺様を追い詰めるとはたいしたもんだ！　いいぜぇ…走り屋として勝負を受けてやらぁ!!』
　異形、モータスはそう吠えると、相棒のバイクにひらりと跨り、ブオン、ブオン！とエンジンを唸らせる。
　喧しいその音に、シリカが思わず顔をしかめて耳を塞ぐのをよそに、モータスが乗ったバイクは猛烈な速度で走り出し、あっという間に小さくなっていった。
『イイヤッホォ～!!』
「……って、待てこらぁぁぁ!!」
　ユウキ達に確かめる事など一切ないまま、一方的に勝負を受けて走り去っていったモータスに、一拍遅れてユウキが抗議の声を上げる。
　しかしモータスはすでに景色の彼方へと消えかけており、ユウキの声も届いたかどうかあやふやであった。
「あっ…い、行っちゃいましたよ!?」
「ふざけんな！　バイクにどうやって追いつけってんだよ！」
「おい、ユウキ」
　地団駄を踏み、獲物を逃したことへの憤りをあらわにするユウキ。辺りに転がっているレッドプレイヤー達の体に走るノイズはまだ消えておらず、急いでモータスを追う必要がある。
　どうすればいいのかと頭を抱えていたその時、彼女の肩をキリトがポンと叩いた。
「おい、ユウキ……お前、俺がなんのゲームを使ってるのか、忘れたの

か？」
「え？」
「いくぞ……二速！」
【ガッチャーン！　レベルアップ！】
　困惑の声を漏らしたユウキの前で、キリトは自身が腰に巻いたベルトのレバーをひっくり返す。
　すると彼の体は、ユウキ達とは比べ物にならないほどの変貌を果たす事となる。
【爆走！　独走！　激走！　暴走！　爆走バイク！】
　ユウキ達と同じく、白い装甲が仮面だけを残して弾け飛び、中身があらわにさせられる。
　しかし……現れたキリトの体は、人の形をしていなかった。
　流線型の装甲にエンジンを積んだ、黄色とマゼンタに彩られたボディ。ハンドルはそのままに、仮面を被った顔がヘッドライトの部分に位置する。
　先ほど放り投げた両腕のユニットが独りでに動き出し、車体の前後に合体する。
　あっという間に、キリトは鮮やかなカラーリングを誇る、一台のバイクへと姿を変えたのだった。
「え――――――っ!?」
「バイクぅぅぅぅ!?」
　グォン、グォンとエンジンを唸らせるバイク……もとい、変形したキリトにユウキとシリカは目と口を全開にして驚愕の感情を叫ぶ。
　ただでさえ見た目が衝撃的な鎧を使用していたというのに、それを超える衝撃を与える展開。二人とも咄嗟に冷静な思考ができず、ただ驚く事しかできなくなった。
「いや、いやいやいやいや！　オレも大概だけど世界観まるまる無視しすぎじゃない!?　大丈夫なのこれ!?」
「……ほんと、何で俺だけなんだろうな。だが今はどうでもいい！」
　ユウキはおろおろと慌てふためき、キリトの全体をあちこちに飛び回って凝視する。

変身した本人も、気持ちの半分くらいは納得がいっていない様子だが、半ば諦めた様子で虚空を見つめる。
しかし、すぐに気分を切り替えたキリトは、棒立ちになっている相棒にヘッドライトを向け、強く呼びかけた。
「乗れよ、絶剣！」
「お、おう！　大変身！」
戸惑いながら、外側の装甲を脱ぎ捨て、身軽な形態になったユウキは高く跳躍し、キリトの背中……もとい座席に飛び乗る。
ハンドルを握りしめ、ギアを何度か試しに回して、乗り心地を確かめる。
エンジンに一際大きく強烈な唸り声を上げさせると、ユウキはニヤリと笑みを浮かべ、敵が消えた遥か先を見据えた。
「よし…行くぞ!!」
気合いの咆哮と共に、地面を蹴りバイクを発進させる。タイヤがガリガリと地面を削り、辺りに砂埃を巻き上げる。
そして進み出したと思った直後、バイクは強烈な加速を見せ、景色があっという間に後ろに流されていった。
「うおおおおおおお！　速ぁあああああ!!」
髪を全て後ろに引っ張られるほどの圧に晒されながら、ユウキはどうにかハンドルを掴み、キリトを操作する。
花畑中に通る道をコースとして、砂塵を巻き上げ、小石を弾き飛ばしつつ、遥か先へ行ってしまったモータスの後を追う。
そしてやがて、見覚えのある青と黄の後ろ姿が見え始め、ユウキはより強くグリップを捻る。
『ひゃーっはっはっは!!　よく来たなぁ、俺様の洗礼を食らいやがれぇ!!』
前を進みながら、モータスが自身が操るバイクの車体を斜めに持ち上げる。
すると、後部から伸びるマフラーから爆炎が迸り、地面に弾かれてまるで炎の壁のようにそそり立つ。
コースを遮られ、危うく炎に飲まれかけるのをどうにか防ぎ、ユウ

キは思わずぎりっと歯を鳴らす。
「くっ……あんにゃろう！」
「構うなユウキ！　このまま突っ走れ‼？」
キリトに促され、エンジン音をけたたましく鳴らさせるユウキ。彼女の思いに応えるように、キリトはさらにタイヤを回し、一気に加速する。
進む先には炎の壁があり、突っ込めば確実に只では済まない危険地帯となっている。その上猛烈な加速を行っている今のキリトは、いつ操作を誤って転倒してもおかしくない状態になっていた。
『ウィ～ッハッハッハァ！　追いつけるもんなら追いついてみやがれぇ……!?』
「ーーーぅおりゃあああああ!!」
しかし、ユウキはそんな逆境にも負けなかった。
迷う事なく速度を上げ、炎の壁に突っ込んでいきーーー触れる直前に、坂になった道に乗り上げ、キリトと共に天高く跳躍を行ってみせた。
青空に飛んでいきそうな勢いで、天を舞うバイクと少女。車輪は炎の壁の上を軽々と越え、一切の熱を浴びる事なくモータスの家を超えていく。
気づいたモータスが唖然とした顔になる前を、ユウキとキリトは悠々と越え、ついにモータスの前へ陣取って見せた。
『な、何だとぉおおおおお!?』
「ウィニングランを決めるのは…!!」
「オレ達だ!!」
驚愕の絶叫を上げるモータスに、ユウキとキリトは声を合わせて吠える。
同時に、キリトの座席に備わっているベルトからガシャットを抜き、ユウキは自分のベルト横のスロットに差し込む。
その直後、キリトの後部のマフラーからも爆炎が迸り、鋭く槍のように伸びていく。
【ガシャット！　キメワザ！　爆走クリティカルストライク！】

ユウキはキリトを横に滑らせ、マフラーから噴き出す炎をモータスに突きつける。
爆炎はモータスの全身だけでなく、バイクにも強烈な熱を加え、金属の塊をみるみる白化させていく。
襲いかかる凄まじい熱に晒され、モータスは真っ赤な地獄の中で悶えくるし、そして。
『ぎ……ぎゃあああああああああ!?』
【会心の一発!】
ついに炎に耐えられなくなり、愛車と共に派手な炎を噴き上げて爆発四散してしまう。
破片が辺りに飛び散った後、キラキラと輝くポリゴンの欠片となって、ユウキとキリトが駆け抜けた後を美しく彩る。
「イエ〜イ!!」
二人はそのまま、花畑に囲まれた道を駆け抜け、宣言通りのウィニングランを決めたのだった。
☒
「あの…本当に、ありがとうございました」
騒動が終わり、街に戻ったシリカとユウキ達。
〈プネウマの花〉を大事に抱えたまま、シリカがユウキとキリトに向けて深々と頭を下げる。
「行っちゃう……ん、ですね」
「三日くらい攻略から離れてしまっているからな」
「そろそろ戻らないと大変なことになるかもね〜」
寂しそうな眼差しを送るシリカに、キリトは困り顔で頭をかき、ユウキは呑気にケラケラと笑う。
二人とも、少女との別れに対して悲しみを抱いている様子はほとんどない。
シリカは寂しがっているのは自分だけか、と内心で肩を落とし、キリトに名残惜しそうな目を、ユウキには羨望の眼差しを向ける。
「す、すごいですね。攻略組なんて、私なんか……足元にも及びません。あんなとんでもない敵が現れるようじゃ、私なんて、何のお役に

も……」
「んー、まぁ、あいつらはマジで謎のバグだし、本気で気をつけないといけないんだよね」
自身に不甲斐なさを抱き、しゅんと目を伏せるシリカ。
対するユウキは頬を引きつらせ、困り顔で目を逸らす。あれが一体なんなのか、ソードアート・オンラインというゲーム世界において歪にもほどがある存在に対し、理解は全くと行っていいほど及んでいない。
ユウキはやがて、んんっ！と咳払いを一つし、表情を引き締めて改めてシリカに向き直る。
「別にレベルがすべてじゃないよ？　シリカは強いものを持っている」
「強いもの？」
「うん、心だよ」
不安げに俯くシリカに、ユウキが手を伸ばし、トンッと拳をぶつける。
はっ、と顔を上げるシリカに、ユウキはにっと満面の笑みを返し、何度も力強く頷いてみせる。
「ピナを取り戻すために危険な場所へ向かったじゃない。それは心が強くなければできないことだよ？」
「レベルだけがすべてじゃない。誇っていいことだ」
キリトもその言葉に同意し、自身の無力さを呪う少女に勇気を与える。決して弱いだけではないのだと、真剣な眼差しを向けて告げる。
目に意欲の光が戻り始めたのを見計らい、ユウキとキリトは一歩、シリカから距離を取る……そろそろ戻らなければ、別れが名残惜しくなってしまいそうだ。
「今度はピナも一緒で冒険しようね？」
「……はい！」
ユウキの誘いに、目に涙を溜めながらシリカが強く頷く。
ユウキとキリトは彼女の表情に安堵した様子を見せ、くるりとその場で踵を返す。そして、静かに扉を開き、シリカの部屋を後にした。

一人残されたシリカは、テーブルの上に乗せた一枚の羽ーーーピナの心を見下ろし、手に持った〈プネウマの花〉を傾ける。
ゆっくりと、溢れ出した雫が垂れ落ち、羽の上にかかって光を放ち始める様を見つめながら、シリカは眠り続ける友達に微笑みと共に話しかけるのだった。
――――ピナ、目を覚ましたらいっぱい、いっぱい、お話しようね！
とんでもない冒険の事と、お兄ちゃんとお姉ちゃんみたいな素敵な人の事を…。